

3V87

22
450

22
450

宗教大觀

宗教大會事務所編纂



013623-000-0

22-450

宗教大觀

宗教大會事務所/編

M41

ABA-0092



22
450

九月廿一日十五日開
宗 教 大 會 開 催

- ▲中央及び地方より神佛基の三大宗教界の大家を招聘し宗教講演會を開催す
- ▲日本全國の慈善家を招聘して社會的慈善事業の發展を圖る事
- ▲共進會開會中、神、佛、基、三大宗教の天幕傳道文書傳道を舉行する事
- ▲五十日間の殆んど半ば頃、司會式を舉行し且一大園遊會を開催し、三大宗教家の親睦を圖るへし
- ▲司會式の參列會員には、追て紀念として發行する宗教寶鑑壹部を送呈す

主 催 者
長 野 市
佛 都 新 報 社

序 言

歴史上著名の靈佛を奉安せる信州の地、由來天然の山水に富み、山や峻峭にして水や清冽、英雄出所山水好、天真爛熳たる宗教的偉人の出づべくして出でざるは何ぞや、宗教的運動の時勢に伴はざるものあればなり、我社同人茲に深く感ずる所あり、數年前、世に所謂佛都の稱ある長野市に、純乎たる宗教主義の一新聞を創刊し、愛養扶育して今日に至るものは、偏に佛天の默示を、日本一の高原に降して、大に世人の宗教的意識を振作し、熱烈眞摯なる信仰を養ひ、所謂思想を山に起として實行を平地に求め、進んでは東西宗教の融合發展を圖るべき使命を有する、我か日本皇國に宗教的一大偉人の傑出を促がして止まざるに外ならず、かゝる希望を全く實現せんには固より前途遼遠なり、而かも數年の短日月を以てして今日の社運を見るに至れるは、これ全く吾人の力にあらざる聖佛の冥助與つて茲に至りしものと深く感謝の念に堪へざる次第なり、時恰も一府十縣の聯合共進會時に際し、此の好機を利用して、宗教的活動をなさんとする道念禁ずる能



はず、微力なる本社一身を挺して之れが主催者となり、道俗潮をなし
て相集ふ善光寺畔に宗教大會を開設せんとする幸運に遭逢す、洵に
是れ千載の一遇、敢て以て自重自奮、宜しく已れの責任を全ふすべき
秋ならずや、此の時、此の際、本社創刊滿三ヶ年の紀念出版として本書
を上梓したるもの、一は以て大方愛教扶宗の結縁となし、他は以て大
會先驅の發動たるに過ぎざるなり、殊に本書の出版に際し、現代知名
の諸先生より隨喜の餘、玉稿を與へられたるは、吾等同人の深く謝し
て措かざる所、卷末に我社同人の所見を附す、敢て諸大家の班に列せ
んとするにあらず、唯た思ふ所を言ふのみ、讀者之れを諒せよ、

宗教大會事務所に於て

編者 しるす

目次

- 儒佛二教論……………子爵 渡邊 國武……………一頁
- 釋尊の降誕に就て……………伯爵 大隈 重信……………三頁
- 現今の佛教……………文學博士 男爵 加藤 弘之……………九頁
- 文章傳道に就て……………醫學博士 男爵 高木 兼寛……………一一頁
- 基督觀の進化……………本報教會牧師 海老名 正……………一二頁
- 宗教大會の開催を祝し併て我神道實行教の趣旨に及ぶ……………
神道實行教管長 柴田 禮一……………一八頁
- 天上天下唯我獨尊……………眞宗大學長 文學博士 南條 文雄……………二〇頁
- 余の觀たる禪學……………帝國大學教授 文學博士 元良 勇次郎……………二五頁
- れもひ出の事……………六合雜誌主筆 佐治 實然……………二七頁
- 何者乎人生に最も必要の寶なるか……………
東洋女學校長 文學博士 村上 專精……………二七頁
- 予が布教の金針……………御嶽教大教正 小松 定市……………二九頁
- 大和魂の本領……………帝國文科大學教授 文學博士 白鳥 庫吉……………三一頁
- 各宗教の日本的統一……………宗教界主筆 望月 信享……………三二頁
- 將來の宗教如何……………文學博士 谷 本 富……………三五頁
- 天地と我と一體也……………鳴地 默雷……………三七頁
- 余が不朽觀……………法學博士 浮田 和民……………三九頁
- 三聚の衆生……………通俗佛教新聞 筆 高田 道見……………四三頁
- 佛教の日本に及ぼせる感化文學博士 姉崎 正治……………四七頁
- 偉人の訓誡……………釋 雲 照……………五一頁
- 世界宗教界七奇事……………文學博士 三宅 雪嶺……………五四頁
- 讀經眼……………日本國教大道 社 長 川 合 清 九……………五七頁
- 東西宗教の大相撲……………文學博士 井上 圓了……………六〇頁
- 生活の趣味……………加藤 咄堂……………六二頁
- 余が所謂理想教……………文學博士 井上 哲次郎……………七〇頁
- 大日本世界教略義……………大日本世界教 主 筆 川 面 凡 兒……………七四頁
- 宗教に於ける願と信との關係……………在 大 學 院 文 學 士 吉 田 修 夫……………八五頁
- 眞佛降誕の時所……………大 內 青 燈……………九四頁
- 婦人と社會事業……………法學博士 小河 滋次郎……………九六頁
- 自覺的活動……………豐山大學教授 釋 慶 淳……………一〇三頁
- 禪想に映したる大聖降誕……………禪雜誌主筆 新井 石 禪……………一〇八頁
- 東西の異同……………釋 宗 演……………一一〇頁
- 宗教大觀の發行を祝す……………河野 廣中……………一二二頁
- 我佛陀……………池田 秀賢……………一二二頁
- 南無釋迦牟尼佛……………奥山 枯影……………一二五頁
- 善光寺布教機關設備の急……………佛部新報社 幹 倉 嶋 鬼 成……………一二七頁

宗教大會名譽顧問御芳名錄

左に掲載の諸氏は本社主催宗教大會名譽顧問たるを快諾せられ、大會中或は講演に或は其社發行の宗教主義の新聞雜誌上に於て大會の事業を聲援せらるゝ事を約せられし、中央及び地方の大家なり(掲載御芳名順位不同)

- | | | | | | |
|------------|----------|----------|--------|----------|-------|
| 豊山大學教授 | 釋慶淳殿 | 宗教界主筆 | 望月信亨殿 | 子爵 | 渡邊國武殿 |
| 宗教大學教授 | 豐岡博道殿 | 通俗佛教新聞主筆 | 高田道見殿 | 曹洞宗人事部 | 新井石禪殿 |
| 淨土教報記者 | 村上專精殿 | 宗教大學長 | 黒田眞洞殿 | 智嶺新報社 | 田中教仁殿 |
| 東洋女學校長 | 境野黃洋殿 | 六合雜誌主筆 | 佐治實然殿 | 從一位侯爵 | 大内青巒殿 |
| 文學博士 | 川合清丸殿 | 曹洞宗大學長 | 山腰天鏡殿 | 在學士 | 久我通久殿 |
| 新佛教主筆 | 川面凡兒殿 | 神田神社宮司 | 加藤咄堂殿 | 帝國文科大學教授 | 長谷川泰殿 |
| 日本大道社長 | 大日本世界教主筆 | 眞宗大學長 | 平田盛胤殿 | 文學博士 | 吉田修夫殿 |
| 大日本高等女學會幹事 | 牧口常三郎殿 | 文學博士 | 南條文雄殿 | 文學博士文學士 | 白鳥庫吉殿 |
| 無盡燈記者 | 和田龍造殿 | 神道教管長 | 柴田禮一殿 | 御嶽正教 | 河野廣中殿 |
| 精神界主筆 | 佐々木月樵殿 | 本郷教會牧師 | 海老名彈正殿 | 大教 | 小松定市殿 |
| 眞宗大學教授 | 石川亮一殿 | 靈南坂教會 | 小崎弘道殿 | 正教 | 宮本隆範殿 |
| 瀧の川學園長 | 久内大賢殿 | 高等師範學校 | 中村久四郎殿 | | |
| 一喝社代表者 | 前田慧雲殿 | | | | |
| 東洋大學長 | | | | | |
| 文學博士 | | | | | |

●儒佛二教論

子爵 渡邊國武

日本國民が舊來如何なる宗教に於て、最も多くの感化を受け又將來にも如何なる、宗教に於て最も多くの感化を受けべき乎と問ふものあらば、何人も遲疑するをなく之に答へて儒佛二教なりと云ふを擧げざるべし。儒教の如きは歐米各國に所謂「リジオン」なる者と少しく其本質を異にし、或は一種の倫理學なるに近しと雖も其世道人心に最も多く感化を及ぼしたる結果よりして、之を言へば世界に於て最も有力有効なる宗教なりと言つて不可なるべし、清韓兩國の如き及び日本の如き、今日まで世道人心を維持し來りたるは全く儒佛二教の力なりと言て不可なるべし。儒佛二教深奥の原理に就ては余、別に所見ありと雖もこれは今日の問題にあらず、今の問題は只此二教が舊來に於ても世道人心に感化を及ぼし、將來に於ても又感化を及

ぼすべきものとして、儒佛二教は果して世道人心を維持するが爲めに應用上不利なありて一弊害なきものなりや否やの問題を解決するにあり。余が所見に因れば儒佛二教は世界の宗教中其應用に於て最も穩當着實なるものにして儒佛二教ソレ自身に於ては著しき弊害あるものにあらずと雖も、儒教には支那固有の痼疾之れと纏綿し、佛教には印度固有の痼疾之れに伴隨するが故に舊來はイザ知らず、將來に於て日本國民が此競争的世界に立て各國の間に馳驅するに當り、到底此儒佛二教の感化を委棄す可らずとすれば大に注意して此儒佛二教に、纏綿伴隨する所の支那印度の痼疾痼疾に浸染せざるが爲めに、儒者も僧侶も充分に之を防禦するの覺悟なかるべからず是此儒佛二教論に於て論斷せんと欲する所の本題なり。何をか儒教と纏綿せる支那固有の痼疾なりと謂ふや、他なし定命論即ち英語に「フエ

「ダリズム」と云へるものは是なり、余少年の日三代以下漢唐宋明諸儒の説を通過して其極致を察するに其道徳上、深奥の道理は別として其實行上に於ける支那道義の根柢は天を知り命に安んずるにあり故に夫の論語の如きも其開卷第一に「人不知而不慍、亦君子乎」を以て始まり其盡頭末尾の一章も「不知命無以爲君子也」を以て之を結び、支那の道義は君は君ならずと雖も臣は臣たらざる可らず、父は父たらずと雖も子は子たらざる可らずと云へる流義にして一方には權利ありて義務なく、一方には義務ありて權利なく、總て片權片務より成り立つゝあるが故、之を以て臣子に教ふるにせば不可なしと雖も之を以て君父に教ふるものとするれば其弊害あり、特に君臣父子の此の如くなるのみならず一切社會に於て、上層に在るものは權利在りて義務なく下層に在るものは義務有りて權利なし、此の如き社會に在て自ら感ふるの術は是天なり是

命なりと天を知り命を安んずるの外なし是
定命論の由て起る所以ならん、是も亦安心
立命の一法なり然れども今日の如く四海横
流の時に際し世界競争の間に立て、各國家
各國民と其雄雄を争ひ優勝劣敗の數を制す
るに非ざれば自立自存する能はざる時に當
りて、一國の民皆天を知り命を安んじて是
天なり是命なりと言つて自暴自棄したらん
には國の發達進歩は、勿論自存自立をだも
望む可らざるは見易きの道理なり、日本の
國民は先天的に此定命論と相反對せる直前
進取の心操即ち自由の意思英語に所謂「フ
ライウィール」に富むが故に其弊害を受ると
甚だしからずと雖も、今日兎角に消極的受
動的の氣風あるは蓋し其感化の餘波にして
宋明以後の支那が外國の侵伐を免れざるが
如きは全く此病癩膏肓に入りたるなり、佐
藤信淵翁が宋明の諸儒は忠君愛國の國民に
非ずして解脱の大和尚なるが故に、四海困
窮天祿永終を憂ふるが如きものに非ずと

云ひたるは知言と謂ふべきなり、日本國民
の如きは自由の意思に富むの國民なるが故
に其弊害を受ると甚だ微なりと雖も儒教の
應用上には、此の如き支那固有の病癩あり
て之を纏綿することをば決して忘る可らず。
何をか佛敎に伴隨する印度固有の癩疾なり
と謂ふや他なし、厭世論即ち英語に所謂「
ベツシムズム」と云へるもの則ち是なり余
多年佛敎を研究して八宗九宗乃至十三宗に
わたりて其深奥を究めたるに哲學上宗教上
の深奥の玄義は別として、其應用上に於け
る印度の教義は三界無常安猶如火宅と云
へる旨趣にして出離生死入涅槃を以て
極致とす、印度は往昔に於て「カスト」の制
あり婆羅門、刹帝利、毗叉、旃陀羅の四種
四人種に分かれ上層の刹帝利種か下級の婆
羅門たらんとするも容易に得られず、何況
んや毗叉、旃陀羅に於てをや、後年漸次相
混淆したりと雖も尙階級制度は依然として
今尙儼存す、此の如く窮屈千万なる社會に

在て自ら慰むるの術は早く此婆娑世界の苦
しみを脱離して清淨無垢の極樂世界即ち涅槃
に入らんとす、故に印度の宗教は佛敎に限らず近
來舶來する所の古今各種の宗教經論を見る
に皆三界を出離して涅槃に入るを以て、其
非端と爲さざるはなし、是も亦た一種の安
心立命の法なり、然れども今日の如き各國
競争世界に在て一國の國民が皆、此世界は
安きとなく火宅即ち燒けかゝりたる家屋の
如しと觀念して、皆世を厭ひ世を離れんと
したらんには國の發達進歩は勿論自存自立
をだも望む可らざるも亦見易きの理なり、
日本の國民は先天的に此厭世論と相反對せ
る快樂快感即ち樂天論英語に所謂「ラプテ
リズム」に富むが故に其弊害を受ると甚し
からずと雖も、兎角に今日善柔に流れ無常
を觀するの習癖あるは、蓋し又其感化の餘
波にして印度の諸國が英國の爲めに占領せ
られて、數億の國民が甘んじて億々數萬の

英人に服從し尙深山幽谷の中に禪定に入り
て國家國民の何たるを忘れて入涅槃を専心
一意に求めつゝあるが如きは、全く此癩疾
の膏肓に入りたるなり、日本國民の如きは
樂天的心操に富むの國民なるが故に其弊害
を受ると甚だ微なりと雖も佛敎の應用上
は此の如き印度固有の癩疾ありて、之れに
伴隨することを忘るべからず。
以上、説く所は儒佛二敎の應用上之と纏綿
する所の支那固有の病癩と、之に伴隨する
所の印度固有の癩疾を擧げて將來儒佛二敎
の感化をして、其利益を全ふして其弊害に
還からしめんとを希望し儒者僧侶が、公平
に之を判斷し之に注意せんとを促すの微衷
に外ならず、夫の耶穌敎の如き其原始的敎
條に就て之を直解すれば或は儒佛二敎以上
の定命論厭世論なるべしと見ゆる所少しと
爲さずと雖も、歴代宗教家神學者の潤色を
經て今は立派なる自由樂天敎とはなりた
るなり、此二個の病的癩疾を去りたりとて

儒佛二敎は存立し能はざるに非ず儒者僧侶
も亦大に活眼を開きて大に活動せざる可ら
ず。
若しうれ今日の如き交通自在の時機に際會
するを機として各國間に行はるゝ所の哲學
宗教、道德等の長短を比較研究して之を折
中し、完全圓滿向上の一路を開くに至つて
は余、別に説ありと雖も數日間數週乃至
數月間に於ても得て其要領をだも盡す可ら
ざるが故に、今は只儒佛二敎が其應用上に
就て其各々纏綿伴隨する所の支那印度固有
の病癩癩疾を腹藏なく發摘して以て儒者僧
侶の參考に供せんと欲するのみ。(宗教界)

釋尊の降誕に就て

伯爵 大隈重信

諸君、今日は釋尊の御降誕に付て早稻田の
學生及び其他の學生諸君の催しに係る今日
の降誕會に、私も御案内を受けまして、諸
君に御目に懸つて一場の御話を致すと私
に取つて甚だ喜ばしく存するのであり、然
るに私は何の用意もない、殊に此數日間
有栖川若宮の我々國民の最も悲むべき不幸
に際して、始とせ其爲めに精神を奪はれて
居る時に、世界人類の立法者として太宗敎
家として現はれた所の釋尊の降誕會に臨ん
で御話を致すに就ては甚だ迷つて居る、
私は喜びをする御目出度い日に誠に我々
の不幸が我々の頭上に臨んだと云ふ時であ
る、殊に私は茲に雲照律師——我々の最も
尊敬する律師の前に於て、又多分茲に御集
りの多數の御方は充分な信仰者であること考
へるのであるが、其前に向つて餘儀なく懺
悔しなればならぬ、第一私は佛敎徒であ
るや、自らちよつと迷ふのである、佛敎徒
のやうでもあるが、時としては此前に基督
敎の青年が集つた其時にも出て御話を
其時には何か基督敎のやうでもある、又先
年支那の學生が來て居る時に、それに向つ
ても時々演説をする、其時は何か佛敎者

見たやうである、餘程不思議な境遇である併しながら私は諸君の前で明々地に言へば私の先祖は本當かどうか能く分らぬが、先づ家の系圖に於ては管家、即ち菅原道真公の子孫のやうに系圖には書いてある、多分本當であるか知れぬ、併し系圖と云ふものは拵へものが多いから嘘であるかも知れぬ、併し書いた者が本當であるとすれば諸君に向つて誇るべき點もある、即ち其靈を以て祀られて居る所の菅原道真公が我輩の御先祖と云へば随分誇るべきである、兎に角此先祖の管公は多分眞言宗であつたらうと思ふ、雲照律師は眞言宗として餘程佛教には精しい御方であるが、管公も學者として唯た佛教を無益に研究するのではない、充分なる信仰の念の厚い人であつたと思ふ、併するものである、其當時は成程弘法大師を距るとさう遠くない、又管公の文章は深山遺つて居る、されば名高い漢學者であるが同時に佛學者で有名なるは管公の王法の

縁起なきが遺つて居る、さうも佛と儒を兼ねた御方のやうであつた。それ程禪宗はいつの頃からか知らぬが私は先づ大方五六百年以來だらうと思ふが、近來は其禪が餘程世の中に流行するやうである、是は信仰の念から起つたか、物好きからであるか、但しは一種の學術的に研究したすのか分らぬが大分流行する、即ち坐禪などいふことが盛のやうである、それ程私に坐禪も一向やらぬ、近來流行の碧巖集といふものは大分本屋で賣れるやうである、是れ又昔書生時代には讀んだともあるが、今日は忘れて居る、更に之を繰り返して見やうと思ふのである、又御寺に參詣して説法を聴くといふことも餘り致さぬのである、雲照律師は私の母の信仰して居つた御方であるから偶には見られる、草庵にも行つたことがありますが、餘り説法は聴かぬ、私の所に御出で下さつて法話があるが、法話も能く聴かぬ、其處から見ますと

何だか外道のやうにもある、そこで全體今日の釋尊御降誕の御目出度い此席に出て諸君に御話をする資格が無いやうなもの、資格の無いと云ふよりも御話する智識が無いと云つて宜いやうなものである、それで私は今日諸君に御話するのは誠に平凡な話である、斯く申す我輩も凡俗であるから凡俗が凡人に向つて凡俗な話をするに過ぎぬのである。さうかすると世間には随分學者がある、學者がある色々講義をやるが聴く人は分らぬ、聴く人が分らぬよりは言ふ人自らも分らぬ、竟に分らずに仕舞ふ、概ね末世の僧侶の説法も恐くはさうでないかと思ふ、説法其物を聴く人も分らなければ多分説法する和尚さんも分らぬ、分らぬでさうして南無阿彌陀佛、南無妙法蓮華經で終るとが普通のやうである、御寺に行つては殊勝氣に念佛を唱へて居るが、御寺を出ると直ぐ惡いことをする、是が普通の人間一般で、分ら

ぬとは畢竟出来はしない、人間にも誰でも分るとでなければならぬ、全體世の中は平凡なる社會である、所が平凡以上の偉大な人間でも死の運命と云ふものは免れぬのである、實に悲むべき、僅二十二といふ將來最も有望なる、殊に國に取つて取換へのない大切な宮様も、一たび運命が來ると何ともするとは出来ないのである、此死の運命と云ふものは不思議なもので、死の運命が來ると王者も、金持も貧乏人も直ちに此世を去らなければならぬ、私の友人である岩崎彌之助と云ふ人も何でも一週間ばかり前に葬があつた、其時に禪宗であつたから禪坊主は何か引導を渡した、其時に茶毘と云ふことを言つて居つた、私はさういふことを能く聞く、始終我々の耳に入る言葉である其外ナムカラタンノ一などいふ、あゝいふとは言ふ人も分つて居るか分らぬか、何んぞか疑ふ聴く人は無論分らぬ、何んでも是から茶毘をやるに云ふとは分るが、其外

の意味は分らぬ、白骨となつたら金持の白骨も、貧乏人の白骨も、王者の白骨も何も區別は無いのである、人生の大義は茲にあると私は信じて居るのである、そこで誕生も涅槃も同一である、哲學者はみた話であるがさう思ふ、近來は空念佛が流行するが是は雲照律師なども頗る慨嘆して居る、衣を着け、袈裟を懸け、珠數を爪繰つて念佛を言ふ、若くは殊勝氣に佛の前に禮拜するが、さうかすると多數の御寺の坊主達が人の眼の前に於ても不道德の事をするが、餘り善いとはせないやうである、是に於て雲照律師は非常に慨嘆して、さうか先づ此の末世の殊勝でない僧侶だけを善い僧侶にしたいといふので、もう七十七八歳、多分八十にもなるであらうが、實に盛なもの、律を守つて居るだけでは間に合はぬから先づ無言の業をやつて居る、高尾の住職が御出でになつて律師の所を御訪ねになつても無言の業をして居るから、律師に御會ひ申

す事は出来ても話が出來ぬと云つて、歸りには私の所に寄つたが、なかく盛なもの多分律師は御話になるより御話以上のことを實行して御居でになるだらうと思ふ、全體一宗の起るのは偶然に起るものではないのである、必ず殆ど人間以上の偉大な豪傑が一宗を起すのである、起つた以上之を守つて行くといふとがいつでも充分いかなる爲めに衰へて仕舞ふのである、古へより種々な宗旨が起つたが、其間に段々盛衰があるのである、所が宗教として其善惡、得失或は孰れが眞理であるか、孰れが人類の上に幸福を與ふるかといふ議論は別として、事實世界の上に現れて居るものは何が一番勢力を持つて居るかといふと基督教である基督教が全世界に勢力を以て進んで行つて居るのである、佛教はさうかといふと孤城落日、段々衰へて來て居る、然らば基督教は人類に幸福を與へて佛教は人類に幸福を與へぬものかといふと、現在は其通りにな

つて居る所が基督教其物がどういふ變化をして居るか云ふと、諸君見なければならぬ。是が餘程必要である、是は素と亞細亞の出産物である、佛教と同じとである、佛教から云ふと九十六派の外道の一つであつたかも知れぬのである、それがどうして小亞細亞に於つて、即ち亞細亞洲に起つて、而して羅馬の勢力は亞細亞を征服したので羅馬の領地になつたのである而して基督教はどうか、羅馬に流れ込んだ所が羅馬にはなかつた、昔からの宗教がある、即ち昔から種々の神を信する宗教が幾つもあった、此宗教に反對するものだから羅馬の政府は基督教を苦しめて、夥しい人を殺したのである、基督教の門人達が宗教に殉じて死んだ人などが澤山あつたのは其時代である、其間に基督教がどういふ工合になつたか云ふと亞細亞から歐羅巴化した、即ち羅馬化した、而して基督教の經文は極く廣い意味を以て解釋すれば希臘の哲學を胎み出して來たので

ある、さうして居る中にどうして羅馬の勢力は基督教に歸したののである、うこで世界を統一する宗教となつて漸く歐羅巴に擴つた、其時になつては亞細亞の宗教ではなく餘程歐羅巴化したのである、羅馬化して仕舞つたのである、此の如く固と亞細亞の宗教が歐羅巴に擴り、ううして全歐羅巴を基督教國に爲した斯う云ふ譯である、所が是も長い間に弊が起つて、羅馬の方々の所謂羅馬教會の權力が盛んになつて、其間に段々基督教の坊主は或は墮落して來たうこで今度はルーナルといふ素張らしい暴れ者があつて、宗教改革といふとを唱へ出して其間數百年、歐羅巴はズット其爲めに血を流すとは夥しい、それを日本でも真似て天草征伐などをやつた、餘程不思議なことで、日本でゼスイツト征伐をした時に歐羅巴でもゼスイツト征伐は盛に起つたゼスイツトがうれに反抗する爲めに戦つた、一番長い戦争は獨逸に於ける三十年の戦争、是は全歐

六
羅巴に擴つて、三十年戦つたのが宗教の戦争である、丁度天草一揆の起つた時分に漸く三十年戦争が終つたのである、逆も宗教で長く戦争しても國が耐へられないと云ふので不充ながら平和條約が出来たと云ふ譯である、其間に宗教が次第に政治を進め、社會を進め、文明の進むに従つて宗教の本體は知らぬが段々時代の精神に導かれて進歩した、而して今日も尙且つ物質的文明に伴へ、宗教が餘程進歩しつゝあるのである、今日までの基督教の歴史を簡單に説き明かすと其通りであるから、猶且つ今日耶穌教が世界に雄視して居ると云ふも決して歐羅巴が國が強いと云ふばかりではない、宗教其物が人類の進歩と伴つて活動したのである、何としても人類を離れて宗教は存在しないのである、人間の上に働いて居るものである、人間の良心の上に働いて居るのみならず、更に進んで申せば靈魂の上に働いて居るものである、是が時代の

精神に背馳せば必ず滅びると云ふとは分り切つた話である、時代の精神を捉へて之に應ずると云ふ仕方を取らなければ到底宗教と云ふものは成立つものでない、私は能く知らぬが多分是等の事が其人を見て法を説く之を名けて方便と云ふ、方便と云ふものが必要、方便がなくては宗教は成り立たぬのである、うれ故に釋尊も一代善へた所の夥しい説法の前後を照し合せて見ると知る矛盾が多いのである、大乘を説き、小乗を説き、顯る矛盾が多いのである、之を諸君が考へなければならぬ、是は人間には方面は幾つもある、人間は單純なものでない、誠に人間は複雑なる思想、精神、又社會の狀態、是に依つて成立つて居るのである、うれを能く知つて説くから前後の説法も矛盾するものが起るのである、然るに或宗教家は其一端を捉へ、或宗教家は又別々の方面を捉へて喧嘩するから、宗教が八宗とか十幾宗になつて始終喧嘩をする、支那は其爲

めに衰へ、印度は其爲めに滅びて仕舞つたのである、是は全く釋尊の精神を知らぬからであると思ふ、うこで日本の偉大なる大宗教家たる弘法大師の如きはさうしたかと云ふと、日本の國民性、日本の人道、即ち此人道の精神に依つて日本の宗教を日本に御擧げになつたから、一時燦然として全國民に行はれたと、斯ういふ譯である、唯複雑なる人類、複雑なる世界、之に向つて一端を擧げて自分の意志を貫かうといふ、結局不可能なるを教ふるのである。如何なる宗教家でも時代の精神に應じなければ衰亡する、是は原則である、うこで我輩は宗教家ではないが先祖から千三百年來日本に佛教が導入して居る、多分官公の子孫は京都に居つたと思ふ其京都は最も佛教が盛んである、然らば我等の先祖から千三百年佛教を受けて居る、うれで此官公の當時に佛教と同時に漢學者が支那の革命もやつたに相違ない、私は斯う思ふのである、

七
うこで神儒佛と云ふものが共同の働を爲したのである、日本の文明の上、日本の社會の上、風俗の上、政治の上、神儒佛共同の上、有力な共同の働といふものが偉大な力を與へて、而して今日の日本と云ふものを産み出したものである、日本から佛教を産まないのだから佛教を以て日本の國家は解釋は出来ぬのである、漢學を修めなければ決して日本の國家を解釋するとは出来ぬのである、日本の政治、文學、技術、風俗その他總てのものが佛教と儒教をやらなければ解釋するものが出来ぬと云ふ大切なもので、佛教は千三百年、儒教は千五百年、是が結び附いて殆ど日本のものになつて居るのである、佛教其物が日本化したから今日のやうに盛んになつて居るのである、世界到る所に此佛教は衰ふるに拘らず、日本は近年多少衰へたりと雖も日本の多數の人は佛教信者である、殆ど九十九迄は佛教信者である、此の如く猶且つ佛教の餘澤を

蒙つて居るのは何であるかといふと日本の
佛教は日本の民族、日本の國民性に合して
居るといふことを私は斷言するに憚らぬので
ある、勿論釋尊其御方の感化力の偉大なる
とは申す迄もないが、其感化力を誰か傳へ
るかといふと僧である、法其物は正しき法
である、人類に必要な法である而しうれ
ど時代の精神に適用して行くといふことが出
来なければ俗世界に俗化して、俗人の俗よ
り坊主が俗になつて仕舞つて、地獄の設け
は俗人の爲めに設けたのではない、坊主の
爲めに設けたやうになる、耶蘇教にしても
其通り、讚美歌を唄つて神を歌うといふ
ても神はさういふかぬ、今日のやうな宣教師
の説教、今日のやうな坊主の説教、今に見
る死んだら地獄に行く、凡人はうれれ地獄
に行かぬ、多分雲照律師は斯う言ふて慨嘆
されて居るだらうと思ふ、願くば釋迦牟尼
佛の御精神の如く、而して今日、日本が世
界的に大活動を爲して、日本の文明が東西

の文明を調和して世界に活動する時に至つ
て、宗教其物の上に於ても世界の宗教を調
和し、且つ東西の宗教を調和して、而して
此日本の宗教として東洋及全世界に向つて
充分なる日本民族の大活動と同時に宗教も
亦大活動を爲すことを、釋迦牟尼世尊の高徳
に依つて此大なる使命を果すと私は祈る
のであります、決して是は空などではない
至人至聖其徳は實に弱いもので、實に哀れ
果敢ないもので、朝夕を測られぬもので、
其時に至つては人間以上の偉大の力に依頼
するといふより外はないのである、前には
種々豪慢などを言つて居るが、今に佛の前
に向つて後生を祈る時が来るかも知れぬ、
人類はさう云ふ性質のものである、諸君と
共に釋迦牟尼世尊の高徳に依つて此宗教を
時代に適用して、世界の進運に適用して、
社會の進運に伴つてさうして世界に大雄飛
を爲すと云ふことを助けて貰ふやうに願ひた
いと思ふ、此請願は口の先ばかりではいか

ぬ、丁度御祈禱をして神の徳を讚美して、
神の助けを請ふと同じと、是は惡者其が役
人に賄賂を持つて行つて悪い事をする、役
人は受けるかも知れぬが、神は賄賂は受け
ぬ、佛も正直なもの賄賂はいかぬ、神や或
は佛が願ひを受けるやうな精神を以て臨ま
なければ逆も此目的を成就するとは出来ぬ
のである、人間は正直になれば立派に成佛
は出来る、佛になれる、世界に雄飛する
が出来るのである、斯う固く信するのであ
る、願くば私に豪慢な御方である、
天上天下唯我獨尊、斯んな豪慢な御方
た立法者、大宗教家が何處にある、自分が
一番偉い、うれだから唯我獨尊を以て世
界の人類の上に幸福を興ふるやうに自分が
其使命を果すといふことをしたのである、其
手段といふものは何んであるか正直に嘘を
吐くなど云ふことである、空念佛はいかぬ、
之を釋尊の前に誓つてくぐくすれば、死

んで仕舞ふ、うれより先きに活きて居る中
に地獄に行く、斯んな馬鹿などはない活き
ながら煩悶する、言語斷絶な地獄である夜
も寝られぬ馬鹿者もある、是は不正直から
起る全林迷ふなど、云ふ人間馬鹿などは
ない、正直にすれば直ぐ迷ひは解けて仕舞
ふ、諸君もさうか釋尊の前に誠實に、此聖
人の壯快の精神に隨つて、世界の進運に伴つ
てさうして、世界的に活動すると云ふとの
使命がある、宗教は一つの人間に限つたも
のでない、世界の人類の上に宗教は臨んで
居るのである、殊に天上天下唯我獨尊、全
世界總べての上には是は臨んで居る、又或意
味から言はば總べての生物の上に臨んで居る
と斯う思ふのである、うれだからさうか其
心になつて、折角今日誕生會を御催しにな
るならば此位な勇氣と決心がなくてはいか
ぬ、充分なる敬虔の念を持つて事に臨んで
人に譲らぬ、即ち唯我獨尊といふ大膽な氣
象を以て臨まれんとを希望するのである

右は本書、大日本佛教青年會の催す、釋尊誕生會
に於ける伯の演説の大要也

● 現今の佛教

文學博士 男爵 加藤弘之

言ふまでもなく佛教の我國に渡來したのは
頗る古い昔の時代で、日本國民の精神に染
み込んだのも、甚だ深刻であるから、從つて
其影響も善惡共に抄からざるのである。

世界に於ける諸有の宗教の中で兎も角佛
教が最も勝れて居るのは誰れも異存はない
基督教と比較したら其教理に於ては基督教
の淺薄にして佛教の深遠なる寧ろ比較の者
ではなからう、然しながら今日の社會を利
益する一般世上の感化からいへば佛教は決
して深いとはいへない、一般の感化は寧ろ
淺近の方がよい、高遠のものは少數者の爲
めにして廣く一般の利益にはならない、宗
教としては却て淺薄な基督教の方が感化が
深く而して廣いのである、併し佛教中の眞
宗の如きは基督教と同しく一般を利導する

佛教で、世俗に對して基督教と似た性質と
感化を以て居る、うれから日蓮宗も教理
が高尙で且つ世俗を益する場合がある、眞
宗の元たる淨土宗、之も他方を説き彌陀を
説いて世俗を利導する性質を有して居る。

蓋し宗教と名くべきものは一般益世の感
化あるにあらざれば宗教たるの資格なきも
ので、一部少數者の爲めに説く、若しくは
修めるといふ位のものなら、其は哲理、學
問に屬するもので、既に宗教の區域を脱出
したものである、佛教は既に此學問、哲學
の性質を以て、未だ其範疇を脱しない傾向
がある、幸に眞宗、日蓮宗の如き平易な宗
旨があつて、抄なくとも佛教の一般を利益
する感化があるのであらう、更に眞宗に至
りては頗る奇怪な宗旨で、一種の哲學には
相違ないが、未だ他に類を見ざる哲學であ
る、元より世間少數者の爲で一般の利導に
はならないから宗教としての實際上の性能
はないものである、尤も鎌倉時代には武家

の信仰歸依するものであつたが謂ゆる社會上流一部の階級に信せられたので、社會の全體を利益するものではない、其坐禪の如きは最も一部少数者の爲す所であつて世俗が爲さるべきものでないから、殆んど宗教たるの性質を具へて居らぬものは則ち禪である、かゝる種々の宗旨あり、而して其時勢に依つて盛衰を異にして兎も角古代から日本の社會を利益して來た佛教であるから從て弊害も多く則ち利害共に社會に用ひられたのである、然るに近來に至ては先づ社會に用ひられず、唯た習慣の惰力に依つて下等社會の信仰のみを有するものだから、活潑の信仰がないのである、眞宗は聊か信仰の勢力がある様だが、之も惰力で活ける信仰は少ない、かゝる場合に際して淺近にして宗教の本義に適當した手近な基督教が渡來したから、一時は頗る盛んな勢力を社會に示したのである、併し乍ら其れも今日では社會の全般を利益する能はずして、極めて

社會の一小部に局られ、其勢力の進歩太だ遅々たるものである。

越に於て佛教の改良論は唱へられ、現今の佛教では終に社會の人心を支配し、又は要求を満足せしむるとは出來ぬと云ふ議論が起つた、併し親鸞、日蓮の如き傑僧が起らぬから元より宗教改革は起らぬ、其の議論は只た一箇の書生論に過ぎないのである然も其議論たる宗教としての議論ではなく寧ろ哲理の議論である、宗教改革者の議論ではなく、哲學論者の學者論である。宗教は人格にある、學者の議論は宗教の改革にはならない、昔の宗教の開祖は皆高貴の人格を以て居る、進歩した今日の社會では議論を以て人を服せしむるとはできない一般に開進した社會には人格も實は容易に立たないものである、況んや同等の人間が相寄て多くの智慧を集め、而て宗旨の改革をなさんとするは、無論不可能の事である世人も知れる通り佛教中、新佛教なるもの

を唱ふる人々がある、其會員は道理を知り學問を有する青年である、機關雜誌新佛教は學說として仲々有益趣味のあるものである、然し其議論は教理であり、研究的である、元より宗教の改革にはならん、佛教を研究比較するとは出來様が、宗教改良としては殆ど無價値である、彼は佛教の研究會である、新佛教をして之に了らしむるは太だ遺憾である。

予は元來宗教は智識社會には不必要と信する、獨り智識なき社會には宗教の盛衰、世俗を導くには大關係あり、基督教の如きは智識あるものより其教理を見れば笑ふべきもの、雖も、世俗開導の力頗る巧にして益世の感化少なからず、今日では昔の様な功力はあるまいが、併し又悔るべからざる勢ひもある、蓋し研究よりは實行に熱心するからである、佛教は之に反して、現今の所、利弊共になく殆んど無用物の傾きがある、何となれば學理として今日の泰西の哲

學と拮抗相對する事は出來ず、宗教として益世の感化が太だ鈍いからである、故に佛教の最も必要急務とする所は淺近にして解し易く、又入り易く而して基督教徒が神を信するが如く、佛を信せしむるにある、佛教中の他方宗、即ち淨土宗眞宗の如きは餘程此點に於て基督教と同じく感化の巧妙な面白い味がある様に思ふ(智識新報)

文章傳道に就て

醫學博士 男爵 高木兼寛
宗教を普及し快興する上に於て、言論文章の必要なるは言ふまでもなし、言論の事は且らく之れを措き、予は今文章傳道に就き、宗教家中就中、佛教家の一顧を煩はさんと欲する事あり。

思ふに、由來佛教家のものしたる出版物を見るに、概ね其眞意の所在を、一讀にして了解し易きものなし、是れ一は其教理が他宗教に比するに、哲學的分量に富みて、

幽玄高妙なるに由るべけれど、亦た唯だ一家が、已が學力を街ひ文才を顯はすを第一義とし、他の了否如何は敢て之れを問はざる不親切の致す所なりと、評さるゝも彼等は亦た辨解の辭なかるべし、他人の批評或は顧みずして可なり、若し今日の如き専門的難文章にて荏苒推移らば、獨り信仰の門戸を閉塞するを如何せん。

うれ自己の修養學問等は、是れ謂ゆる自行門にして、布教傳道は是れ他行門に非ずや、化他門に自行門を混じりて、妄りに信窟贅牙なる文字を臆列し、自家の専門語を專用して、徒らに冗長繁重に亘り、人をして其眞意を捕捉するに苦しましむるが如きは、確かに佛教執筆家全体に通用する一大病根なりと言はざるべからず、此病根を根本的に切斷せざる限り、佛教界に於ける文章傳道の成効は、到底得て望むべからざるなり。

彼の深遠なる教理をば、ゐろは四十七字

に歌ひ、以て經文學の範を垂れ、廣く一般國民を益せらるゝ弘法大師の功績や、量るべからず、其手腕や及ぶべからざるも、下て彼の眞宗一流の御文章の如き、是れ教家の宜しく則るべき所のものに非ずや、無量廣大なる如來の本誓功德をば、極めて通俗平易の文字を以て演繹せるが故に、山村水郭到る處の老若男女も、皆是れ朝夕佛前に誦じて渴仰の涙に其袖を濡ふしつゝあるにあらずや、是れ洵に通俗の文章にて言ふべからざる妙味に富み、平易の文字を以て高妙の眞理を書き現はし、經意を失はずして誰人にも解り易き様に綴りあるが故に、讀者をして恰かも其状を見る如くに覺へしめ知らず識らず自己を忘れて彼れ絕對者の慈懷に眠り、小我を忘れて大自然に同化し、既往の罪惡を悔ひ改めて、佛陀無限の慈悲に感涙するに至らしむるの効あるなるべし而して現今佛教界の著述に於て、能く此種の効果を奏するもの、うれ果して幾許ぞや

物に對して聊か所感を陳ると爾り(交實記者)

●基督觀の進化

本報教會部 海老名禪正 新人主筆

今茲に取つた題は、古より今に至るまで基督の輩が熱誠を以て、考へ且つ味へるところのものであるが、このことを暫く申上げて見たいと思ふ。

吾人はキリストといへば、直ちにナザレのイエスと合點するのであるが、これ實はイエスの大勝利である、古來幾多の人々がキリストたらんと欲した、併し遂にキリストたるの榮冠はナザレのイエスの頭上に授けられた、これは決して一世一代の努力の結果にはあらず、誠に長い間の奮闘の結果である、イエスの時代には既に一種の基督觀があつた、キリストと云ふ誠に尊

といふべき名があつた、其名にはイスラエル民族の凡てが熱中して、其の爲めには凡ての物を獻げて忠義を盡したいと願つた、これは決して一世一代の努力の結果にはあらず、誠に長い間の奮闘の結果である、イエスの時代には既に一種の基督觀があつた、キリストと云ふ誠に尊

加へられた、カイザリヤ・ピリビに於ける發表の以前に於ては一大秘密として存して何人にも之が明さなかつた、それよりエルナレムの殿深めは、キリストたる自覺の大膽なる發表を見るべきである、さらば何故に基督は自ら之を長い間秘せられたか、これ則ち基督自身の基督觀は、當時のそれと異なること大なればである。

ストの死後、弟子等は茫然自失の姿であつた、これあまりに甚しくうの意に反したればである、併し乍ら又靜かに考へて見れば其人格の如何にも氣高く、其恩愛の暖かにして博大限りなく、其の言、其の行、其の爲人は、尙ほ嚴平たる事實として彼等の記憶に新たである、當時の人々はイエスを以て偽りのキリストと信じたれども弟子等は如何にしても疑ふとは出来なかつた、音容は髣髴として眼底にある、その胸中に受けたる印象は如何にしてナザレのイエスの十字架と共に滅することは出来やう、イエスは彼等の模表たり、理想たり、生命であつた、之を以てたゞ朝の露の如く、夕の煙の如く消へ去るべしと信ずることは、彼等にありては其生命を失ふにも等しい、復活の信仰は是に於て起らざるを得なかつた、復活して主は神の側に行かれたるなりと、こゝに彼等の基督觀は蘇つて來た復活して地上の王たるべしではない、昇天して神の御

位の半座を分ち給ふと、先きには毛頭考へ及ばざりしもの、忽焉として蘇りしものに無限の恩愛を認むることが出来た、是に於て乎、更に亦柔和なるもの謙遜なるものは神側に擧げらるべしとの思想も生じて來た併し尙ほキリストは天國の人たるも、依然としてユダヤの王たるべしとの思想は、牢固拔くべからざるものがあつた、故に其基督觀は羅馬皇帝の權威と衝突せざるを得ない存つて、キリスト生存の際、偶々税のことに就て問ふた時、彼れは神のものは神に歸し、カイザルの物はカイザルに歸せといはれたれども、弟子共には充分徹底せなかつた、証據には黙示録中に此衝突を記してある十の七の怪獸は羅馬皇帝の象徴である、神の羊は基督の表章である、こゝに戦闘は行はれて、遂にキリストの國は實現て來る、つゞキリストを以て一種の王なりと考へたのである、それで一寸序ながら申すのであるが、此思想を以て基督教は國家

に反對するものなりとなすものがある、併
乍らキリストがユダヤの君主ならば、うれ
と同意味に於て我が日本の皇室はキリス
トとなる、以て賽書第四十章以下を書いた
大預言者はペルシャのシラス帝を以てキリ
ストと見た、それは尤もなことで、ダビデ
の裔がキリストならば、何故に世界の明君
を以てキリストと見るとが出来ぬか、此意
味より申すならば、日本の政治上の皇室は
又之キリストなりと観ると出来る、神の
子は天子即ち地上の王と並び立つべからず
これ天に二日なく地に王あるべからざる
論の然らしむるところである、之を調和
するにはかく解釋せざるを得ないのである
併乍らかゝる基督觀は忽ち一變せざるを
得なかつた、キリストを以て第二人類の祖
先と観るの觀念即ちこれである、第一原始
人即ち創世記中のアダムに對照しての基督
觀である、而して言ひ換れば基督は新人類
の大先祖、第二のアダムなりと観る、羅馬

書第五章に表はれたる基督觀の如きは即ち
これだ、罪の人類の祖先はアダム、清き人
類の祖先はキリストなり、而して此キリス
トたる、無形の意味に於てユダヤ教に孕み
つゝあつた弟子共は、ナザレのイエスを以
てキリストなりとの觀念に到達した、最早
キリストはエスラエルの王ではない、世界
の救主である、宜なり、ヤゴブはユダヤを
去り民族を離れて世界に傳道するを層とせ
なかつた、之れキリストはユダヤの王なれ
ばであつた、併しパロウの觀たるキリスト
は新たなる世界人類である、故に彼れは責
任の念にたへぬ、一國に満足する事が出来
ぬ、異邦に道を傳ふるに至りし所以實に此
に存す、又ヘブル書著者あたりになると
基督は神の眞の姿にして神の輝きなり、而
して世界の初めに於て出られたる方なりと解
して居る、然るに遂にヨハネ傳に至りて、
ロゴス觀に達した、基督は道なり、眞理な
り、これ其當時の大思想、大觀念、大理

想である、箴言には知慧とある、知慧は神
の參謀にして天地經營に即つたものである
舊約書にアポクリファによれば義人に宿を
籍るものである、之を希臘の哲學より言へ
ば、基督は世界に於て精神だ、アレキサ
ンドリアのフキローの哲學によれば第二の
神である、世界と神とを結べるものである
冥々の神より、出で、大地を作れるまで、
ある。
是に基督觀は擴大して世界大、宇宙大と
なつた、かくの如く進んだところに於て、
基督觀の進化は二分した。
一、ロゴスと耶蘇とは如何なる關係あり
や。
一、ロゴスと天地の神とは如何なる關係
ありや。
初代のクリスチャンは頻りに研究した、
これ大問題である、殊に之を受けたものは
ギリシヤ人である、故に一面に於てはロゴ
スと神との關係を研究して、遂に三位一體

論を作り、智慧の上より、信仰の上より、
切りに基督論は究められたのである、何故
に彼等は三位一體の教義を作るに至つたか
ロゴスが神ならざれば、之を信奉するもの
は神に到ることが出来ぬ、人間の宗教心は神
を抱かずんば止まず、神を求むるの切なる
鹿の溪水を慕ひ喘ぐが如くである、然るに
當時神は深遠にして眞如の如しと解した、
さらばロゴスに行くか、ロゴス第二の神な
らざれば、ロゴスの信者は未だ神に達した
と言ふべからず、こゝにロゴスは神なりと
觀した、三位一體論は茲に大成して、彼等
は内心に満足を得ることが出来た、他の一面
はロゴス肉體を取りて人間界に現れたりとい
ふとである、假りにマリヤの腹に宿りて
人となり給へりと觀るけれども如何にして
も満足することが出来ぬ、假りに現れたとす
ると、之れ我が國の權現だ、基督は權現か
眞の人間ではないのか、元は神にして假り
に人間の形を取り給ふたのであるか、さら

ば人間は浮いたものとなつて仕立ふ、假り
に」と云ふでは、神と人間とは眞に結ばれ
てない、耶蘇は影の如きものだ、一種の淋
しみに堪へぬではないか、イエスは人間の
影に外ならざれば人間は救はれて得ない、
人が淵に陥つて溺れんとするに、岸の上よ
り竹竿を伸ばして之に絶れと云ふよりも甚
しく所謂水中の月を捕へやうとするものだ
夢だ、幻だ、一種の幽霊だ、温かき同情が
ない、切實でない、人は到底之を以て満足
する事が出来ぬ、人は身自らの救を全ふせ
ずんば安んじられない、ロゴスの肉體を取
りたまへるは、これ人を神にせんが爲めな
り、かうなくてはならぬ、ヨハネ傳ロゴス
總論第十四節の句はまだ後の方の一句が足
らぬ、然らずば人間の中に神が宿つたとし
てもそれが何の爲めであるか、イエスは神
なるもの、假りに人間の皮を被つて人間と
なつたとは、一種の演劇に外ならない、人
間の衷情はかゝる演劇を以て安ずるとは出

來ぬのである、道肉體となれりとは、人間
たるべき凡てのものを取つたのだ、故にイ
エスは眞の神にして又眞の人なりと、ナザ
レのイエスには神たる所と、人たる所とあ
り、神と人との二性を有したまへりと謂
ふので、以てやゝ安心するとは出来る、是
を以て漸く一面神と人との關係一面基督と
神との關係が出来、信仰の上で安心が出来
た、かくて中世を通じて近世に及んでこゝ
に理性と信仰との衝突を見ざるを得ざるに
至つた、信仰の上から云へばこれでもない、
けれども議論は中々立たない米のシニエ
ルの如き、獨のシニエラエルマツエルの如き、
皆このために苦悶した人達だ、遂に彼のユ
ニタリアンの人々は基督を以て純乎たる人
なりと解するに至つたのである併しブニチ
ルの如きは自分は神様を欲いんだといつて
遂にイエスは神の性格の發現なりと見るに
至つた、これ宗教的熱誠の然らしめたる
ころである、シニエラエルマツヘルにも亦

然り神人二性論は理窟に於て中々立たない
 しかし信仰には棄てられぬ、實に苦痛だ
 人たる所を捨て、仕まへば、個人は神の中
 に吞まれて仕まふ、神の中に茫漠として半
 睡半醒の状態にあるのみだ、來世觀の如き
 も極めてばんやりとなつて仕まふ、彼れの
 弟子に若い夫婦があつた、能く琴瑟相和し
 て、家に不斷の春風を湧かして居つた、
 併し無常の風は幾くもなく襲ひ來つて、夫
 の方をさらひ去つた、子さへも一人あつた
 のだ、妻は夫を慕ふて、來世のと思つ
 て惱亂を極めた、遂にシユナイエルマツヘ
 ルに問ふに來世の事を以てするに至つたが
 文辭深酷哀婉、斷腸の手紙は、彼をして又
 斷腸の思に堪へざらしめた、彼は言葉を以
 て慰むるのすべを知らなかつた、未亡人と
 子を引取つて己が妻として慰むる
 に至つたのである、彼れは其外には慰めか
 ねたのであつた、彼れも亦かくの如き慘憺
 たる苦悶を味へる人である、神と基督とを

統一するは困難である、彼れは基督の人た
 る方面を捨て、行つた、又自分の人たる方
 面をも捨て、神を慕つて行つた、何となれ
 ばあまりに神にあらがれたればである、ユ
 ニテリアンの中にも偉人は多い、併し宗教
 上に於ては缺點多きを免れぬ、彼等は宗教
 的熱情に乏しい、冷たい、は實に今日ま
 で尙ほ宗教的精神と熱情と道理との折合の
 つき兼ねる一面である、併し乍ら先づ第一
 に哲學の方面に於て、神に就ての思想が進
 んて來た、ヘーゲルの如き、その進歩思想
 の代表者である。

神は天地の上にあるではない、天地の中
 にあり、又その中に満つてりと觀ると、之れ
 近世の宗教思想である、天地の上在り、
 天地の中にあり、天地を貫いて居る、天地
 は實に神の中に活き、動き、存するを得る
 のだ、神は九天の上の高御座に在して世界
 を遙かに下に支配したまふと見る、こゝに
 於ては仲介者必要だ、人世に羽翼なし、白

雲を押し分けて九天の上に通ずるとは出來
 ぬ、これはデイズムの神だ、人間の良智良
 能とは先づ没交渉だ、それでは冷たい、満
 足されぬ、人間の奥の奥の奥には清い、
 ものがあつた、皮を剥ぎ、肉を去り、骨を去
 つて尙ほ一ツの偉大なものがあつた、猛火燬
 くべからず、却風吹き拂ふべからず、眞に
 神と其本性を一にするもの、所謂「人は神
 なり」と一面が明かになつて來たかくなり
 來れば再び基督觀が迂曲したが、今日は復
 ビナザレのイエスの許に歸つて來た、歸り
 來らざるを得ないのである、アバ父よと呼
 ぶ子たるもの、精神、これ彼の「闇の夜に
 啼かぬ鳥の聲さげば生れぬ先きの父を戀し
 き」の父かさうじやない、それではまだ親
 子の情が密でない、それは悟だ、神の悟だ
 澄んで居るが燃て居ない、アバ父よと呼ぶ
 の聲は、實に野の百合花を裝ひてソロモン
 の榮華を顔色なからしめ、一錢に傳らるゝ
 二羽の雀を地に墮らしめ、吾人の髪を毛を

の宗教的實驗は如何に吾人一同の得んと欲
 する所であるか、自分も實は此の問題に就
 いては長い間苦んだ、聖書は神の默示を受
 けて書いた人類に對する書翰であると教へ
 られた、二千年前に於て神の靈、豫言者に
 宿り、基督に宿り、而して其弟子共に宿り
 て聖書を作らしめたりと、されどこれは二
 千年前の御手紙である、今日に於ては如何
 實にその頃のバレンスタインが戀しい、羨ま
 しい、その自然、その山河は實に自分が憧
 憬の對象であつた、十年以上も嘆いたこと
 るだけれども、遂に自ら一境を開拓するを
 得るに至つた、二千年前豫言者に宿り基督
 に宿りたまへる神は二千年後、今日現在に
 於て、多の人々の心の奥に住み、これを清
 め、これを導きたまふ神である、これを教
 ふるものが實に聖書なのだ、二千年前イエ
 スに宿れる神が、今日吾人の心殿に住みた
 まはないならば、吾人は遂にイエスの如く
 にはなれんのか、これ程の失望はない、否

も歎へたまふ、その父なる神に對する痛切
 の叫びた、これ即ち基督の神、基督の示し
 給へる神、人類共通の父なる神である此萬
 有に満ち、萬有を導き給ふ父を慕ひあこが
 れて行く、此の精神は何だ、これ天地の大
 精神に結びつくものたるのみならず、神は
 靈なりとの清い、心をナザレのイエスの
 心に送り來らしめたるどころのものである
 宜なり、ヨハ子傳に於てイエスは「父我に
 在り我父にあり父と我とは一なり」と仰せ
 られたるとや、神とキリストとはその原因
 を同じうす、之を人の方からいへば人は神
 だ、うこがナザレのイエスの自意識の上に
 玲瓏一翳と即けずして現はれて來たので此
 の自覺に達するには、我は神に歎ばるゝも
 のなりとの實驗がなければならぬ、此人が
 基督なる自覺を取るの外はない、アバ父よ
 と呼ぶは我はキリストなりといふと同じと
 である、之れ即ち萬古に通せるキリストで
 ある、神人一体の美妙なる境である、基督

なる、今日も吾人と雖もなれる、之れ眞
 にイエスの道なり、予は是に於てパウロの
 實驗を倣なりとせざるを得ない、彼は斷言
 して「一最早我れ生けるにあらず基督我
 れにありて生けるなり、彼は基督に死した
 りして基督に復活した、彼は最早基督と共
 に不朽の人である、これ得もいはれぬ大福
 音ではないか、彼は基督を見もしない、又
 能く知らない、併し乍ら尙ほ彼れ自ら其中に
 入りたりと認めてかく叫ぶを得たるは、實
 に偉大なるものといはねばならぬ、彼れは
 先きには基督教徒を粉滅せんとした、彼れ
 は其の熱誠を以て逆々に基督に行つた彼れ
 遂に基督となつた、基督だ、ヨハ子傳に基
 督は「我は葡萄の樹爾曹は其枝なり」と仰
 せられてある、然り吾人は葡萄と同じもの
 だ、末と幹との差違はあらう先後の別はあ
 らう大小の別はあらう、けれども飽くまで
 其質を同じうして居る、然らば即ち此ヨハ
 子傳中の一句は、基督と一になりしものは

宗教大會の開催を祝し併て我神道實行の趣旨に及ぶ

神道實行教管長 柴田 禮一

國運の隆興と人民の福祉とは、善良なる宗教上の信仰が一般的に普及せらるゝとに因りて待つべく、慈善博愛の根源たる一視同仁の觀念は、宗教家たるもの、經緯として遵守すべき唯一の本旨なり、然して宗教上各派の聯合大會は斯る目的に向て偉大な効果あるを以て、之れを忽に附すべきに非ざるや更に喋々を要せざるなり、予は嘗て西曆千八百九十三年九月十一日より北米合衆國に開催せられたる萬國宗教大會に參列し、各種の宗派に就き包含せる眞理の合同的普及と、異種の宗教を奉ずる信者の間に萬國同胞たるべき本旨を知らしめ、列國の平和を永久に保維せんが爲めに地球上の國民をして親睦の情を増さしむべきの議決ありたるに際し、或は演説により或は著述によりて、我が國現時に於ける神道佛敎

これ吾人をしてキリストの弟妹たらしむるが故である、吾人は相互に稱して兄弟姉妹と云ふは、是れ果して何の謂であるか、單に同じ神を信じ、同じ會堂に集まるが故であるか、ろんな淺薄なものではない、神の靈、キリストの靈、吾人衷心の奥底に於て共通のものあればである、こゝより見ればキリストのとも分つて来る恰も積雪を排して日輪を仰ぐが如くである、これナザレのイエスの自覺のもの、中に入るとが出来るからだ、これ實に難有い忝けないこといはねばならぬ、こゝに新約は生れ、聖書も亦出て来る、今は斷じて形骸の時代ではない形式若し諸君を纏ふものあらば、諸君は之を棄屑の如く捨てよ、キリストを信ずるとはキリストとなるのである、こゝに至つて吾人は宗教的要求も初めて満足するものが出来る、神を抱いて人は助かる、神を離れず人を殺さず、神人合一の奇しき法縁は是に於て全うせらるゝのである(新人)

基督なるを明言せるものではないか、神人合一の奥義は實に茲に存するのである、ルーラルは近世に至りて叫んでいふた「吾れは基督なり」と、こゝまで達するには、それは中々容易ではない、併し乍らこゝだ、こゝまで達しないでは宗教生活の堂に入れるものではない、彼のバイナスト、スピナー、ウエスレーの如きは皆この境地に立つたのであらう、人間一面に於て肉の實在はある、併し他の一面肉を起絶して、天地の神と其性を同じうするものはないか、なしと云ふものはたゞ一團の肉塊のみ、之れあるを認めるものはルーラルと共に「吾れはキリストなり」との自覺に入るとが出来るので、諸君は自らの軀にかくの如き清きものを認めないか、認むれば即ちこの境地に到り得るのだ、人類の發展を無窮、基督觀の進化は又正にかくの如くならざるべからずである、諸君、故にこれは決して閑問題ではない、實に吾人當面の活問題である

並びに基督敎に就き、斯る目的の遂行を唱導せしに傍俸にも參列せる數百千人士の拍手と喝采とを博し、當時我が帝國の神道を奉せる手に向て與へられたる榮譽は、神明の冥譚と敎祖の誘導とに依るとは謂へ、斯敎に對する職責の重大を感ずるの情は寔に數層の大を増したりき、今や本年九月二十日より信濃國に於て神道、佛敎、基督敎各派人士の聯合大會の開設に際し、斯敎の爲めに衷心湧躍の感に堪ざるなり。

宗教上の信仰が一般的に普及せらるゝは洋の東西を問はず、時の古今を論せず、其國其社會に於ける人類が、既に限定せられる智識を以て宇宙間の諸現象を網羅し、之れを其根底なる眞理に證明しつゝ、絶對の理法を自覺して行動すると能はざるか故に我が大日本帝國に於いては、神敎は天地開闢と共に其根源を發し、吾人の祖先は其肉体の以外に不死の靈魂ありと爲し、亦た子孫を慈愛する父母の威靈は、顯界に於ての

み其肉体を亡ふと雖も、猶は幽界にありては其子孫を保護すべきことを確信して、神人一体たる觀念を以て我が固有の祭祀を重んじ、家てふ團體には祖先の威靈の永住する所にして國家てふ團體には天祖の威靈の存在する所なるを信じ、吾人の肉体に於て代表せらるゝ祖先の生存を永遠に傳へ、國運の隆昌と人民の幸福とを不朽の基礎の上に確立し、以て安神立命の根本的成果を擧ぐるとを建國の大義とせられ、天孫瓊瓊杵尊か神勅を奉戴し、我が皇土に降臨せられしより以來、皇統の連綿たると萬世一系たる代々の天皇は、徳政を布て萬民を撫育せられ、臣民は偏へに忠孝を擧げて、譲らず、君民の大禮完備して溢るゝとなく神教其間に介在して、歴代の天皇は躬から其祭主となりて天地神祇を祭祀し給ひ、君民の一致と上下の輯睦とは我が建國の大義にして、之れを千載に立て之れを萬世に傳ふは、我が國の精華として萬國其化を見ざる所なり

應神の朝に儒敎の傳來ありて忠孝仁義の道を説くや、懇切を極め亦た、欽明の朝に佛敎を百濟王より傳奉して能く、無量無邊の福德果報を生じ、無上菩提を生成すると唱へたりしが、此二敎たるや多少の變形を免れざりしと雖も、克く我が上下社會を經緯せる家族制に伴なふ祖先崇拜の信仰と一致し、殊に佛敎に至りては、佛敎、弘法兩大師以後の宗派は殆んど印度の敎義と獨立するに至り、儒敎を以て行法の基礎と爲し、神佛二敎を以て善良なる宗教二大派と爲せしが、近世歐米諸國より基督敎を傳へ之れを遵奉する人士も漸やく多きを加へつゝあるを以て、日本の基督敎の偉大なる發展も亦た劃目して見るものあるべきを信ず我が神道實行敎は、他の神道各派と共に此祖先崇拜の大義を基礎と爲し、往昔長谷川角行なる修業者が富嶽に登り、天神地祇を拜して國運の隆興と人民の幸福とを祈禱し、神靈の示現によりて天地和合と君民輯

隨の秘開を受け、普ねく萬民を救恤せしよ
り起りたる神教の一にして、爾後數百年を
經過して以て今日に及べる所以のものはれ
亦た神祇の擁護と教祖の冥助に依らずむば
非なるなり。

然り而して神、佛、基三教の現時我が帝國
に於ける形勢を鑑みれば、正に巔に萬國
宗教大會に於て爲されたる議決の如くに、
此の三教は各々合同一致して、善良なる布
教に勉めんとすの希望に堪へざる所なり、
殊に日露の戦役は空前の大捷を博して帝國
の名聲、俄然として世界に煌輝を放てる現
代に當り、歐米の人士は我が各種、各階級
に於ける動靜を環視しつゝあるを以て、徒
らに堂宇の莊嚴と被服の潤美を事とし、自
己の歡喜と逸樂とにのみ汲々たる者ありと
せば、識者の冷嘲を招致するに止まらず、
往昔各教祖が其生命を遺棄して普く萬民を
救済し、安神と立命とを得せしめたる本旨
に背くの罪に陥らんのみ、豈戒心せざる可
けむや。

夫れ這般の戦役、我が勢力範圍に歸した
る滿韓の天地は、草味の繁茂に委せられて
今時に及びたり、彼れ等の神心を感化し自
然的に我が帝國崇拜の精神を喚發せしむる
には、獨り宗教の偉力に待たずんばあらず
我が帝國の宗教家たるもの自我的小乘の觀
念を蟬脱し、博愛的大乘の任務に従事し、
進んでは萬國の人民をして我が帝國宗教の
眞髓に隨喜せしむるの抱負なかるべからず
這般の宗教大會は斯かる前途の興隆を産む
の第一歩たるを確信し、一言以て其の祝辭
に代ふ。

天上天下唯我獨尊

此八字は釋迦牟尼世尊降誕の後、最初出
言の語として、廣く世人の知る所なり、然
るに其曲據は何れにありやと云ふにつき、
縮刷藏經の中に於て、十餘部の翻譯又は著

述の諸書に掲載するものを、年代の順序に
依て鈔出すれば、實に左の如き異同あり。
第一、後漢西域三藏(宋元明三本作沙門)
竺大力共康孟詳(三本作祥)譯の修行本
起經上(辰十の廿九左)に、十月巳滿、太子
身成、到四月七(三本作八)日、夫人出遊、
過流民 Jamini 樹下、衆花開化(三本作
敷)、明星出時、夫人攀樹枝、便從右脅生
墮地、行七步、舉手(三本作住字)而言、
天上天下、唯(三本作惟)我爲尊、三界皆
苦、吾當安之とあり、此經は西曆百九十
七年の譯あり。

第二、吳月支優婆塞支謙譯の佛說太子瑞應
本起經上(辰十の卅七左)に、到四月八日夜
明星出時、化從右脇生墮地、即行七步、
舉右手住而言(三本有曰字)、天上天下、
唯我爲尊、三界皆苦、何可樂者とあり、
此經は西曆二百廿三年より二百五十二年に
至る間の譯なり。

第三、西晉月氏三藏竺法護譯の佛說普曜經
見也。
答、玄應音義云、毗婆尸、此譯云種々
見也。
此引文の中に本經と異なる所なる所二あり、
第一は不亂の下に從右脇生の四字を重
出せず、第二は唯我爲尊を唯我獨尊に作る
尙因みに曹魏天竺三藏康僧鑒譯の佛說無量
壽經上(地八の十七左)に、捨彼天宮、降
神母胎、從右脅生、現行七步、光明顯曜、
普照十方、無量佛土、六種振(三本作震)
動、舉聲自稱吾當於世爲無上尊とあり
るも亦類文なり、此經は西曆二百五十二年
の譯なり。

第六、西(三本作乞伏)秦沙門釋聖堅譯の
佛說摩訶利頭 Mahastha 經(三本作佛說
灌洗經)亦名灌洗佛形像經(宙八の廿四右)
に、以四月八日夜半明星出時、生、墮地行
七步、舉右手而言、天上天下、我當爲
人民之作師とあり、夜半の半の字の行なら
んことは第四と同じ、又天上天下の下に恐
くは唯我爲尊の四字を脱するならん、此經

(宙四の七十一左以下)に、爾時王后(中略
在隣(三本作憐憐)樹下、(中略)菩薩從
右脇生、忽然見身住寶蓮華、(三本作
隨)地行七步、顯揚梵音、無常訓教、我當
救度天上天下、爲天人尊、斷生死苦、
三界無上、使一切衆無爲常安とあり、此
經は西曆二百六十六年より二百七十七年に至
る間の譯なり。

從右脅出、墮地行七步、無人扶持(三
本作持)、遍觀四方、舉手而言、天上天
下、唯我爲尊、要度衆生老病死、此是
常法とあり、此次に四行十六句の偈あり、
此經は西曆三百七十四年の譯なり、此は過
去七佛の第一、毗婆尸佛の事なれども類文
として之を引く。因みに元祿二年西曆千六
百八十九年)に瑞應の泊如蓮僧正著の寂
照堂谷總集一卅五右に、天上天下唯我獨尊
と標して、左の問答あり。
又問、有人曰、佛初生之時、唱天上天下
唯我獨尊、非獨悉達太子如是、諸佛常
法也、此說是耶。
答、經中作如是說、長阿含經云、佛告
阿難、諸佛常法、毗婆尸菩薩、當其生
時、從右脇出、專念不亂、墮地行七
步、無人扶持、徧觀四方、舉手而言、
天上天下唯我獨尊、要度衆生老病死
一、此是常法。
因問、毗婆尸未聞翻名、華言如何。

は西曆三百八十八年より四百七十年に至る間の譯なり。

第七、東晋沙門釋法顯自記遊天竺事と署名する高僧三本無比二字法顯傳(致六の四右左)に、到迦維羅衛(Kapilavastu)城(中略)城東五十里有王園、々々論民、夫入入池洗浴、出池北岸二十步、舉手攀樹枝、東向生太子、々々噉地行七步、二龍王浴太子身、浴處遂作井、及上洗浴池、今衆僧常取飲之とありて、別に出言の語を出不さず、此傳は西曆四百十四の著なり。

第八、宋天竺三藏求那跋陀羅譯の過去現在因果經一(辰十の五右左)に、摩耶夫人(Maya) (中略)往藍(恐藍誤)毗尼園(中略)爾時夫人既入園已、諸根寂靜、十月滿足、於三三本作(四)月八日日出時、夫人見彼園中、有二大樹、名曰無憂、Agala、花色香鮮、枝葉分布、極爲茂盛、即舉右手、欲牽摘之、菩薩漸々從右脇出、于時樹下亦生七寶七莖蓮花、大如車輪、菩薩即便

墮蓮花上、無扶持者、自行七步、舉其右手而作師子吼、我於一切天人之中、最尊最勝、無量生死於今盡矣、此生利益一切人天とあり、此經は西曆四百廿五年より四百卅三年に至る間の譯なり。梁(宋元二本作蕭齊)沙門釋僧祐撰の釋迦譜一(致一の十四右以下)に此經文を引て、一段毎に註を加ふ、從右脇生の註に北凉天竺三藏曇無讖(西曆四百十四年より四百廿一年に至る間)譯の佛所行讚(三本有經字)一の生品第一(癸七の四十四左)の六句を引けり、左の如し。

慶留王股生、卑偷王手生、漫陀陀、Manodhatri、王頂生、伽叉、Krishtya、王腋生、菩薩亦如是、從右脅而生、右の釋迦譜は西曆五百年の著なり。第九、隋天竺三藏闍那彌多譯の佛本行集經七(辰七の廿六左)樹下誕生品第六上に、爾時菩薩聖母摩耶、懷孕菩薩、將滿十月、

垂欲生時、時彼摩耶大夫人父、善覺長者、即遣人詣迦維羅淨飯(Suddhodana)王所(中略)以善覺婦名嵐毗尼爲彼造立此園林故、以是因緣、即名之爲嵐毗尼園(中略)菩薩初從右脇生時(下略)とありて

次に同經八(辰七の廿八右)樹下誕生品第六下に、菩薩生已、無三人扶持、即行四方、面各七步、歩々舉足、出大蓮華、行七步已、觀視四方、目未曾瞬、口自出言、先觀東方、不如彼小嬰孩之言、依自句偈、正語正言、世間之中、我爲最勝、我從今日、生分已盡、此是菩薩希奇之事、未曾有法、餘方悉然とあり、此經は西曆五百八十五年より五百九十二年に至る間の譯なり、此隋譯に至りて始めて四方各七歩の語あり。

第十、唐三法師玄奘奉詔譯、大總持寺沙明辨撰の大唐西域記六(致七の廿八左)以下に劫比羅伐窣堵(Kapilavastu)國の記事あり其中に(致七の廿九左)に、箭泉東北行八九十里、至臘伐尼林(Lumbini-vana)有釋

種浴池、澄清皎鏡、雜華彌漫、其北二十四五歩、有無憂華樹、今已枯悴、菩薩誕靈之處、菩薩以吠舍佉(Vasistha)月後半八日、當此三月八日、上座部則曰以吠舍佉月後半十五日、當此三月十五日、次東寧塔波(Supa)無憂Asoka王所建、二龍浴太子處也、菩薩生已、不扶而行於四方各七歩、而自言曰、天上天下、唯(明作惟)我獨尊、今茲而往、生分已盡とあり、是に於て始めて唯我獨尊の文字あり、西域記は西曆六百四十六年の著なり。

第十一、唐終南山釋道宣撰の釋迦水譜(致一の七十七右)に、涅槃經於十方面各行七歩、經云、便舉右手一言、我於一切天人中、最尊最勝、無量生死盡矣、利益一切天人、大權云、舉手現相者、爲除外道自尊必墮惡道、故本起云、天上天下唯我爲尊、三界皆苦、何可樂者とあり、涅槃經の北凉と劉宋との南北二本あり、其中に十方各七歩の語ありとすれば、隋譯に四方各七

歩の語あるも奇とするに足らざるなり、此書は西曆六百六十年の著なり。

第十二、大唐天竺三藏三本作唐中天竺國沙門地婆訶羅譯の方廣大莊嚴經、一名神通遊戲(經三)宙四の十二右)に、佛告諸比丘、時有八萬四千象兵馬兵車兵步兵(中略)翅從佛母、往龍毗尼園(中略)比丘當知、菩薩中略滿足十月、從母右脇安詳而生、(中略)爾時菩薩、善自思惟、稱量正念、不假扶持、即便自能東行七歩、所下足處皆生蓮華、菩薩是時無有怖畏、亦無悲訥、作如是言、我得一切善法、當爲衆生說之、又於南方而行七歩、作如是言、我於天人應受供養、又於西方而行七歩、作如是言、我於世間最尊最勝、此即是我最後邊身、盡生老病死、又於北方而行七歩、作如是言、我當於一切衆生中爲無上上、又於下方而行七歩、作如是言、我當降伏一切魔軍、又滅地獄諸猛火等所有苦具、施大法雲、雨

大法雨、當令衆生盡受安樂、又於上方而行七歩、作如是言、我當爲一切衆生之所瞻仰とあり、此經は西曆六百七十六年より六百八十八年に至る間の譯なり此は上の第三に挙げたる普曜經の異譯なりと云ふと雖も、同一の原本を譯せしものに非ざることは彼此對照すれば明かなり、今此唐譯は現存の梵本と大略比較し得べきことは、下の第十五に擧ぐべき和譯と對照して知るべし。

第十三、宋景定四明東湖沙門志磐撰の佛祖統紀二(致八の廿三左)に、周昭王二十六年甲寅、夫人往藍毗尼園中、十月滿足、四月八日、日出時(註)前言四月八日降胎、今言四月八日出胎並出因果經、南山云、降胎出胎、皆言四月八日、則是十二月在胎文、今此文言十月滿足者、且約人間十月懷妊爲言、若佛所行讚經、則云三月八日生、此皆譯人用歷、兩土不同、然內外典籍、多言四月八日、(本)夫人見無憂

樹花葉茂盛、即舉右手、欲牽摘之、菩薩漸々從右脇出、時樹下生七寶蓮花、大如車輪、身噴花上、自行七步、舉右手、作獅子吼云、我於天人之中、最尊最勝、(註)按瑞應經云、舉右手而言曰、天上天下唯我獨尊、善權經云、爲應七覺、故行七步、舉手現相、爲除外道自尊、とあり此書は西曆千二百六十九年より千二百七十一年に至る頃の著なり、瑞應經の文は上の第二に引くが如く唯我爲尊なり、然るに佛祖統紀には唯我獨尊に作る者は異本に據る歟第十四、元嘉興路大中祥符禪寺住持華亭念常集の佛祖歷代通載四(致十の十九右)に、周昭王璣二十五年四月八日、大聖現白象瑞、七支案地、乘雲而下、降神大術胎中、右脇而住、豈若虹橋、現表厥命世者也(甲寅三十二年)二月八日、世尊生子(悉王迦維衛國薩毗尼園波羅叉樹下、從二母摩耶夫人右脇而出、姓刹利、父淨飯天(恐王)母大淨淨、生時九龍吐水、金盤浴已、

周行七步、自言、吾受最後生身、天上天下、唯吾獨尊、相好莊嚴具三十二大人之相、諸經有別、(註)且依二文、三十二者と標して卅二相の目を擧げて、更有八十隨好、具如般若等說とあり。以上十四種は、翻譯もあり、又は引用もあり、兎も角も天上天下唯我獨尊と明記するものは西域記を始めとするが如し、但し其前の第一第二第五の唯我爲尊も、第四の唯我爲尊も、古本には皆唯我獨尊に作りしものありとすれば頗る舊譯なり、又以上列記の外にも、藏經中尙處處々に類文ありて、全く管見の及ばざる所なきにしも非ざるべし、博雅の示教を仰ぐ所なり。第十五、現存梵本ラリタゲイヌスタラ(遊戯方廣と譯すべし、唐澤方廣大莊嚴經の一名神道遊戯と比較すべし)は印度と露國との刊本あり、今印度本の六方七歩の段を直譯して局を結ぶべし、其文左の如し。其時菩薩師子の如く、怖畏恐懼する所な

く扶持を假らず、善思惟を念じ、思惟し、一切有情の心行を知りて、善く撰擇攝取したまへり、菩薩東方に向て行きたまふこと七歩にして曰く、我は一切諸善根法を得たりと、其行きたまふ時、空中に於て誰にも持たれざる天の廣大の白傘と二個の美麗なる拂子とは其行に従ひき、而して菩薩足を擧げたまふ所には隨處に蓮華出現しき、是の如く南方に向て行きたまふこと七歩にして曰く、我は諸天人に供養せらるべしと西方に向て行きたまふこと七歩し、第七歩に師子の如く、住立して満足の語を宣べたまひき、我は世間に於て最尊なり、我は世間に於て最勝なり、是れ我が最後の生なり生老死苦の終りと作すべしと、北方に向て行きたまふこと七歩にして曰く、我は一切諸有情中の無上者なるべしと、下方に向て行きたまふこと七歩にして曰く、我は魔と魔軍とを降伏し、一切諸地獄の猛火を消滅せん爲めに、大法雲の雨を雨らすべし、

此れに由て彼等(諸有情)は安樂を受くべしと。上方に向て行きたまふこと七歩にして曰く、上方を觀(て)宣べたまひき、我は一切諸有情に瞻仰せらるべしと。前記諸書の中、佛所生地の園名の音譯に流民と憐憫と論民と藍毗尼と嵐毗尼と臘伐尼と龍毗尼との七種あることをも注意すべし。

余の觀たる禪學

帝國大學教授 元良 勇次郎

▲禪學は沈思默考 禪學と云ふ言は元來沈思默考する事であらうが、日本などで云ふ現今の禪學は沈思默考して得たる結果を重に指すやうである、尤も此兩者は離す可からざるものではあるが、段々進んで行く上には多少異つた點も起り來るかと思はれる ▲禪の必要 何のために禪學を修むるのか坐禪をするかと云ふに、必竟精神を落ち付けると云ふ事であらう、併し乍ら是は曹洞

宗と臨濟宗とに因つて異なる、曹洞宗は取り敢へず沈思默考し、臨濟宗では或公案を與へ、その公案に依て悟ると云ふ事が主になつて居るやうである、その孰れにしても坐禪の必要は何故なりやと云ふに、吾人の精神は外部の刺戟、内部の感情想像等のために、注意が不定的に所々に迷想する、處と事とに當つて或は誤りたる判斷をなし、或は物に驚きなどするやうな事がある故、精神を沈め注意を一點に集むると即ち精神の修養を必要とするより、此禪學と云ふものは起つたものである、公案を授けて、その公案に就いて默考するが、一には幾分か注意を一點に集め、又一には是を土臺として、普通吾人の考へて居る思想以外の世界に立ち、見性するの手段となつて居るかと思はれる、此見性を禪に於ては第一の關門と名くる、此見性に依つて第一の關門を打破するとが一大仕事にして、此處に於て初めて新生活に入るのである、此の見性と

云ふとは坐禪して自ら經驗した人々には分る、即ち自ら經驗するのが見性であるから今茲に説明しても分らぬ。 ▲禪と現代の學風 是を普通の思想歴史に依つて云へば、古代には吾人の學問とか知識とか云ふものは、多くの書物を讀むとが學問で、識者と云ふのは成る丈け多くの書物を讀んだ人だと思はれて居つたが、現時の學風に於ては、凡ての知識は實驗的知識でなければいけぬ、書物は唯た視食するに止つたものである、而して自ら修養すると云ふと即ち禪は、精神上的の實驗をするが主になつて居るのであらう、而して實驗に實驗を積んで行けば、其の行先きは何處ぞ益々深山の様な深い所へ入つて行くかと思ふに、關門を打ち破つて見なければならず關門を打ち破るまでは何だか段々深山の様な所へ入つて行くが如く思はるゝも、愈々打ち破つて見れば、此世界は矢張り此世界の儘で、柳は綠に花は紅、四角は矢張り四

角である云ふのが、悟つた所である、所が青年其他の人々が禪の修養をせんとするに、關門の前後に於て種々の誘惑に遭遇する動もすれば普通以外の理窟を悟り得たりとなし、世の中を罵倒したり奇説を吐きたりするものだ、斯る事を以て禪を修し得たりとすれば、是は禪のために一大不幸であつて、世間より攻撃されるものなる、凡う何事に限らず、生嚼りは無益有害にして、殊に禪の生嚼りは精神を害するものと思はる、故に初めよりして、堂奥まで進むの決心を以て修養するは最も必要である。

▲漸進せよ 人の精神作用は身軀の發達と同様に、一時に手の掌をかへす如く過度の進歩をなすものでない、今日悟り得ざるものも、日に日を重ね、月に月を積み行かば遂には悟りの境に入るのである、例へば文を作るにしても、書をかくにしても將た又體操を以て身體を練磨するにしても漸々に積んで始めて進歩を見るのである、

勿論禪の修養に於ては、或時期に於て一足飛びに高飛をなした如くに感ずることがあるが是は一種の幻影であると思ふ後日に考へて見ると、誤れるとが段々に分る、されば禪の修養に於て、一旦豁然として大悟の域に達し、事物の全體を解し得らるゝと云ふ事は到底出来難い、悟れりと思ふても退歩する、退歩に退歩を重ね、悟つた、悟つたと思ふ境が幾つあつて、修養する内に、進歩發達するのである。

▲主觀的修養 禪の修養は主に主觀的修養である、尤も客觀的修養も出来ないとは云はれまいが、是は餘程六ヶ敷からう、殊に現時の禪では形式に流れて居りはせんかと思はるゝ、三十棒を食はすと云ふてもそれは唯言葉の上のみにて、實際に三十棒を喰はさない、三十棒を喰はされた時に如何にするかと云ふ事を研究するに過ぎない。

▲毎日の奮闘と禪 坐禪と云ひ參禪と云ふも、必ずしも坐して黙つて、居るばかりが

禪の奥義とは謂はれない、吾人が日々専心一意、其業務三昧になつて奮闘して行くのが即ち禪で、例へば學生が大に學課を勉強するが如き、又は官吏が自己の役務を忠實に遂行するが如き、凡べて人々が専心一意に遂行するが如き、實際此所に至らざれば、眞の修養は出来ないと思はるゝ、何故に禪なるものが精神修養として重要なりやと云ふに、禪は已に求めて、他に求めず、自ら内に修めて進むと云ふが故である、要するに禪の修養は外部からの慈善的援助に依らずして奮闘して自ら活路を開くと云ふのであるから精神修養として最良なものであらう。

▲國民教育と禪 國民教育としても是を土臺として行くが當を得て居らうと思はるゝ、主義としては相違する所なからんも、禪は種々の分派がある、又大家大家に依つて夫々流義があつて多少の異なる點もある、

で曹洞宗の流義が善いか又は臨濟宗の流義が善いか、或は更に工夫を凝らすべき乎は第二の問題となつて居る、斯くて在來の如く山中の坐禪堂に於て坐禪するが如きは、國民の修養にはならざるべし、で茲に大家が出で、國民一般の精神修養の爲め工夫をせねばなりませぬまい。(成功)

れもひ出の事

大合雜語主筆 佐治實然

佛都新報創刊三週年の紀念號出版宗教大觀を發刊被成候に付、老生にも何平寄稿せよとの御依頼に應じ左にれもひ出の事二三、筆に任せて申上候。

老生は幼時真宗の寺院に生長し、壯時通佛法の主義を押し立て日本全國殆ど足跡の至らざる所なきほど巡回演説を試み、稍老齡に傾きし時通佛敎よりは一層廣きゆにてりある主義の弘通に熱心するに至り候、右様の履歴ある老生は今日に於て諸宗教を觀ると

平等にして、孰れを貶し孰れを褒するといふか如き偏頗の考は殆ど痕跡を絶ちたるや自ら思ひ居り、唯宗敎は人生には不可缺の要事と信し候外何たる考も無之候

達觀すれば佛敎に所謂八萬四千の法門は人々の氣に應ずる爲の所説にして、八萬四千の法門悉く人生に必要なに有之候、但し一箇人として其數多き法門を悉く信せねばならぬと申す理由は有まじくと被存候、約めていへば五時八敎、宗派に就ていへば八家九宗、其中の一敎一宗を信して安心立命の地歩を占むれば事足ると申してよろしからんと被存候、譬へば種々様々の馳走が陳列してある場合に、何なりとも一品又は二品其人の隨意の料理にて満腹すれば最早其れにて食事の目的は既に果せしと、被存候其上に其處にある料理を殘らす喰盡さねばならぬ道理は無之候、甚だ淺薄なる譬喩に候へども是れにて略々一宗を信じ居る者には餘宗餘門には何等の用事なきと明了

に相成り候と、被存候、古來宗敎を信する者は狹量偏見に陥る弊あり、有之候、謙まねばならぬ事に候、自己の信念に満足を得たる上は他人より強られて餘宗を尊奉すべき義務は無之候へども、自分より他の宗義を誹謗すべき理由もなきと、被存候、法雨は常に三草二木を灌ぎ、佛光は怨親平等に照し給ふと、聞き及び居候、宗敎を信する者殊に佛弟子たるものは、自己の信仰を發揮すると同時に他人の信仰を寛容し、勉めて諍論を避くるやう致し度、老生の今日の心得是れより外に何事も無之候。

何者乎人生に最も必要の寶なるか

東洋女學校長 村上專精

世に寶と稱するものに種々様々の寶がありて一概にいはいはれないやうである、しかし之を大別するに二種の寶ありと謂つてよか

らう、其の二つは世に稀れる所よりして
 寶として居るものがある、神佛開にあつ
 て寶物と稱せらるゝもの、如きは即ち是れ
 である、他の一つは有益といふ邊で寶とい
 はれて居るものがある、而して題に掲げし
 は第二種の寶に就いての問題である、抑も
 何者乎人生に最も必要の寶であらう、多數
 の人は寶といへば忽ちに連想し來れるもの
 は金銀である財産である、成程人の生活上
 一日も缺くべからざるものは財産であるか
 らこれも寶であるに相違ない、依て古來こ
 れを財寶と稱し來つたのであらう。

然れども聖賢の教訓には未だ金銀珠玉の
 如きものを寶であると言つたものは無い様
 に思ふ、支那の孟子といふ人は諸侯に三つ
 の寶ありと謂つたけれども金銀珠玉の如き
 は寶でないと言つて居る、即ち左の文が是
 れである。

諸侯之寶三、土地人民政事、寶珠玉者
 殃必及身

吾人は今日にあつてこれをいはば國家の
 三寶といつてよいと思ふのである、國家と
 いふものは昔も今も第一に土地が必要であ
 る、第二に人民が必要である、而して其の
 土地及び人民を利用するに就いて最も必要
 なるものは第三の政治である、孟子は今よ
 り二千幾百歳の前の人なれども其の考は今
 日といへども動かされぬ所をいつて居る、
 この孟子よりも尙ほ古代の人にして又同
 じく三種の寶を數へて居る人がある、それ
 は誰れかといふに老子である、即ち老子の
 道德教に左の如き説がある。

我有三寶、持而寶之、一曰慈、二曰儉、
 三曰不敢爲天下先、慈故能勇、儉故能
 廣、不敢爲天下先、故能成其長、今捨
 慈且勇、捨儉且廣、捨且先死矣、夫慈
 以戰則勝、以守則固、天將救之、以慈
 衛之

吾人はこの老子の所謂三寶を道德の三寶
 といふて居るものであるが、實に人の道德

上缺くべからざるものは第一に慈である、
 第二は儉である、第三に謙讓である、謙讓
 の徳と老子は敢て天下の先とならずと申し
 たのである、今の 天啓陛下の教育勅語の
 恭謙已を持し博愛衆に及しと示したまへる
 ものは何んとなくこの老子の所謂三寶の意
 を含ませられた御勅語のやうに窺ふること
 である。

さて又佛敎の中にも三寶といふことがあ
 る、即ち推古天皇が時の聖徳太子をして作
 らしめ給へる十七憲法の第二箇に
 篤敬三寶者佛法僧也
 とあるが如き是れである、吾人は之を宗教
 の三寶といつて居るものである、宗教の本
 尊は即ち佛寶である、又宗教の教理は即ち
 法寶である、又宗教を説の如く實行する者
 あればそれが即ち僧寶といふものである、
 是れ等のものは孰れも皆寶たるに相違な
 いが更に此の外に一般人生の上に於て缺く
 べからざる寶があると思ふ、即ち個人的に

如上のものよりも更に一層大切な寶があ
 ると思ふ、それは何者であるか、是れ今の
 題に掲げし問題である、余は個人的必須缺
 くべからざる重寶が三つあると思ふ、即ち
 左の三つである。

- 一 体格
- 二 時間
- 三 勤勉

人生百事成功の基礎は体格の健康である
 其の事たるや恰も家屋建築の本は地盤にあ
 るが如しと謂つてよい、ソカレ如何に健全
 な体格があつても時間を要せずして出來る
 ことはない、學問であれ技藝であれ資産で
 あれ又道德者たることを得るのも、名望家
 たることを得るのも、聖人たることを得るの
 も、君子たることを得るのも皆時間を要する
 のである、彼の釋迦如來が世界の導師とな
 ることを得られたのも苦行六年といふ時間
 が産み出したのである、彼の孔子が聖人と
 して東洋道德者の模範たる地位を占むるに

至りしも七十にして心の欲する所に從へど
 も矩を離れずといふに至る迄の時間を要し
 たのである、故に吾人の成功は体格に次で
 時間が必要なるものはあるまい、
 しかし如何に時間があつても之を妄用す
 れば折角の時間も墮落の原因となるのであ
 る、依て人は此の貴重なる時間を妄用せぬ
 やう、即ちこれを利用することに努力せね
 ばならぬ、語を換へて之を言はば此時間を
 有害無益の方に使用せぬやう、成るべく無
 害有益の方に使用するやうにせねばならぬ
 とである、而して此時間の妄用を去つて利
 用に就くのが、即ち勤勉といふものである
 故に人生百事成功の寶は体格と時間と勤勉
 との三つである、白痴にあらざる以上は此
 三種あつて多少成功の結果を見ぬといふと
 は、斷じてない保証してよいと思ふ、故
 に余は之れ人生に最も必要の寶に數へたの
 である。

然らば此の體格と時間と勤勉とは、眞に

人生無上の寶であるか、是れ以上のものは
 ないかといふに、進んで考ふるに更に以上
 のものがある、何者乎、是れなるやと云ふ
 に、开は一の誠である、誠は眞に人生無上
 の寶である、此の事は余の近著「誠のしる
 べ」の中に委しく辨じ置いた、今之を陳べ
 て居る閑暇はないから要することにした。

●予が布敎の金針

御嶽教 小松定市
 大教正

東西古今の宗旨、孰れが正にして孰れが
 非なるか固より問はざれども、眼を放つて
 經世上より宗教を眺むるときは、人心感化
 に至大の勢力を有し、以て道德を左右し、
 國家の盛衰を效さしむるの力甚だ大なるを
 認む彼のマホメットの教理は「アラビヤ」帝
 國を創建し、釋迦の教理は印度を亡國にし
 たるは其著例なり、本邦の如きは古來神國
 と稱し國民みな始祖を一にし、社會の平和
 を保つに熱心なるがため謂ゆる大和民族の

稱あり、吾が同胞五千万常に協力一致して能く世界の間に御し、弱を東洋に握るに至りしは、國祖建國の大精神と大御心を繼承し玉へる歴代諸天皇の威徳と、國政其宜しきを得たるに依るものにして、之れ實に神道の金針となすところなり、故に神道は國家と消長を共にするに敢て喋々を要せず、殊に建國二千五百六十有餘年我が國民の腦裡に深刻せられつゝある大和魂なる威徳、即ち神道に據り陶冶せられたる一種高尚にして、凜然たる生氣を有する信念が今なほ民心を支配し、絶大の効果を見しつゝあるは勿論にして、未だ曾て外侮を受けず又一回も國威の失墜を招かざるは神道の感化力によりて、忠勇愛國の至誠を發揮したる結果に外ならざるはなし。

神道御教は世界無比と稱せらるゝ我が國民の特質を顯著にして、國力の増進強大を圖り、國威を宇内に宣揚し博愛衆に及ぼして、金匱無缺の國脈を天壤無窮に隆盛ならしめ、而して人畜みな我が神皇の恩澤に霑はし、世人をして此信仰に頼り安神立命せんとする目的の下に於て神祇大神、即ち國家の大基を鞏固ならしめ、其常盤堅盤の發達進歩をなさしめたまふ、氣化第一の國常立尊並に同心戮力以て國土を經營し殊に人類を勞はりて醫藥を禁厭との道を開き人生の福祉を増進するを心となし玉ひし文明主義の大已貴命及び少彦名命の神徳を奉稱し、國典に基きて惟神の大道を説明し、而して此光明の發射すると恰も日月の諸々の暗冥を照すが如く、又活力の發動する大原則を宣傳するにあらは、何人も疑はざるどころなるべし、誰れか泰山に峻巖幽邃にして巍々たる信濃國木曾御嶽山に神靈を憑せ玉へる大神の無始無終に存在し玉ひ、其徳又無限なるを崇敬せざらんや、抑も亦此の靈山との關係神妙なるに驚かざるものあらんや、本教各名の起る所以寔に此處にあり御嶽大神が國家的事跡の大なると仁慈の

深きに感泣せざるべからざるの理は、敢て多言を要せずして明なるべし、本教教師は勿論教徒信徒が公衆の信意に迫り、諸衆と共に頗々御嶽山に登りて修行し、以て救世濟民の道を躬行するも主に此大神の功徳を奉承し宣傳するに外ならず、立教以來歴代の管長は政治に心魂を注ぎ能く時弊を匡し當務を擧げ、教務の普及改良を圖りて今日に至ると雖も、時運の潮流は去舊採新の軌道に向ひ其利害相半し、深思沈考するも取捨を誤るものなきを保し難し、從つて教法接化の道又全然改善するに頗る難事に屬す、之れを要するに本教の大旨は惟神の至道に據り、奉齋主神の神徳を發現し、會王愛國の大義を宣明して布教傳道し、小にしては人々天賦の稟性を活用して各々其本能を完うするを得せしめ、大にしては國政を補翼し國家の安寧を期するにあり。

實に大和魂の中心たり根柢たり、故に神道隆盛なるるときは國威必らず昌揚す、即ち是日本臣民たるもの、肅然として注意せざるべからざるとなり、回顧せば神武天皇神を敬して天業を恢弘し、崇神天皇の敬神は大に國威を擴張し、神后皇后の熱心なる敬神は國威三韓を壓し、蒙古百万の兵を立ちこころに粉碎したるは龜山天皇の敬神に基き、近く明治の維新は全く今上帝陛下の敬神に起因するものたるを、斯く神道と國威と、關するところ洵に至大至重なりと謂ふべし、實に神道は國家の生命たり皇室の藩屏たり、國民の父母たり嗚呼日本國民として、神道界に身を投ずる我等は無上の名譽たる信仰を有するものと云ふべきなり隨つて其任の重且つ大なるを感銘せずんばあらず

然るに國民一般殆んど神道の大功蹟あり又此至大勢力のものたるを知らず、徒らに之を輕視して無智の俗耳に投ず、此の如きは曲直を知るもの、耻づる所なり、若し宗教を尊重すべきを知悉せる歐米の信仰家を以て言はしむれば是れ馬鹿者と稱するの外なく、予は敢て其心事を問ふの意なきも唯だ此機會を利用して、如何に神道家が世上より輕視せらるゝものなるかを、公言せんと欲すると同時に、世人の大多數が腦裡に何等の所信もなくして道徳上の觀念に乏しきもの多きを憐むのみ、然りと雖も吾人之に對して憂苦なきと能はざるなり、又神道家各位に於ても毫も憤勵自勵の念なく人後に落ち而かも恬然として耻づるなく、名實共に之を全うし、智徳共に併進せしむるを勉め、永く我が邦家の隆盛を計り、國民の幸福を祈企せざるべからず、人智は素より神徳の大を宣ふるに足らざれども専心信仰を高め、考覈研究して益々改善宣傳するときは、世を益し人を利するの効愈々多く、歩く神徳の幾分を發揮し得べきは疑ふべからざる事實にして、改善は完全に達すべき

光明たるや眞理なり、不肖定市淺學才なりと雖も身心を神道御教に獻進し、自ら諸氏の模範となり誓つて斯道のために盡すことあらんとす、幸ひに奴意を体して時勢に鑑み、人心を酌量し以て本教の爲めに裨益せられんとを乞ふ。(完)

大和魂の本領

帝國文科大學教授 白鳥庫吉

予は建國以來、綿く連續し來れる我邦特有の大和魂を呼ぶに、直ちに武士道の名稱を以て冠せしむるの非を痛斥するものなり武勇の精神は、素より大和魂の中に含有せらるゝと云ふと雖も、之れ其全體に非らず武は權道なり、時としては用ひざる可らざるも、好んで弄すべきものに非らず、吾人大和民族の精華として世界に尊重せらるゝ所以のものは、廣大無限なる仁徳なり慈惠なり、此慈惠仁徳こそ、寧ろ大和魂の精髓なり。本領なりと言ふべし、果して然らば

大和魂即之武士道なりといふ者あれば、之
大和魂を侮辱する者にあらざして何や。
武士道の本質は固より至上至大なる仁徳
慈愛なるべしと雖も、如何にせん其名既に
秋霜烈日の如き武勇の一邊のみを顯はすに
過ぎざるを、蓋し名は自性を詮して其實
體を召すの功あり、故に普通の場合にあり
ても、名は尤も之れを正さるべからず、
實と名とは必ず相應せしむるを要す、其
名も其實體に契はざれば、之れ空名なり
虚名なり、普通の場合にありては、空名虚
名或に顧みずして可なり、されど外邦に對
し一國特有の精華として誇るべき大和魂を
呼ぶに、直ちに武士道の名を以てするは、
豈其だしき語弊に非らずや、彼の黃禍説の
如き、畢竟この語弊に由來する所あらざる
なきか。

皇くも皇室は仁愛の淵源なり、而して國
民は擧つて皆な平和を愛す、仁道平和は實
に神代以來日本民族の根本精神なり、之れ

は彼の三種の神器に考ふるも、劍は武勇を
意味すとせば、玉の渾然たるは、之れ仁徳
を表するに非らずや、恵みの主體たる玉と
武勇の主體たる劍と合體して我國家は健全
に組織せらるるされど、和氣洋々たる仁徳は
主體にして、秋霜烈日の武勇は寧ろ從位な
り、武勇は陰德にして仁徳は陽道なり、否
な日本民族の勇歩は春風和氣の仁徳慈恵よ
り出づ、則ち全く自利を忘れて利他の爲め
に盡くし、彼我の差別を離れ、普遍廣大な
る無我平等の樂地に住して勇進し、君主の
爲め國家同胞の爲めには、死を鴻毛よりも
輕んじて奮闘し、小我を空じて大我の爲め
に一身を犠牲に供し、進んでは怨親平等な
る大慈悲觀に住して陣頭に猛進す、此くの
如く彼生死の巷に於ける活潑々地の勇敢な
る行爲も、皆な之れ春風洋々たる仁徳博愛
の大精神の中より止むを得ずして、發現す
るもの、故に其武勇や全く是れ、無限廣大
なる仁徳にして、其本體二あるに非らず、

各宗教の日本の統一

宗教界主筆 望月信享

大和魂の本領實に茲に存す、世の謂ゆる武
士道なるもの、亦た素より此意義に外なら
ざるべけれど、語弊は語弊として、斥する
の必要を認むるが故に且らく其論点を記す
ると、此くの如し。

クラークの所謂宇宙的宗教なるものには、
素と特殊の國家、特殊の國民たる觀念を容
れず、釋迦、基督、馬哈默の眼中には印度
なく、猶太なく、亞刺比亞なし、概論する
に宗教なるものは、國家者くは帝王以上に
或る救済主を憧憬して、之れに身心を委し
て渴仰の誠を連ぶる根本旨義となすが故に
如何なる宗教も個人的にして、且つ非國家
的傾向を有せざるはなし、猶太教及日本の
神道の如きは、國家的宗教の標本として、
最も國家と密接の關係を有するものなりと
雖も、尙ほ地上の國家及び帝王以外に、天

國及び神を理想とするは事實なり。然れど
も宗教も亦社會の一事象たり。是を以て社
會の一事象として其中に存在し、而も果し
て宗教の本義たる救済を全うせんとするに
は、必ずや其社會の事情に應同して施設す
る所なかるべからず。株を守るは變を知ら
ざるもの、事なり。甲の社會に適合したれ
ばとて、之を以て乙丙の社會を律せんとす
るは愚なり、印度の佛敎と、支那の佛敎と
は驚くべき相違の點を有せり。支那の佛敎
と日本の佛敎とは、亦驚くべき相違の點を
有せり。同じ印度に在りても、佛滅四百年
間の佛敎と、其の以後の佛敎とは、全然教
義を異にせり。支那に在りて、六朝の佛敎
と唐の佛敎とは、其趣決して一ならず。
唐の佛敎と宋と、宋の佛敎と元明清と、亦
各々其流行を異にせしとは、佛敎史の證明
する所なり。日本に於て、奈良の佛敎は平
安佛敎と同じからず。平安佛敎は、鎌倉佛
敎と同じからず。鎌倉佛敎と江戸佛敎と亦

甚だ其流行を殊にせり。基督敎は基督一人
の口より出でたる宗教にして、元と何等の
異同なかりしは言を待たざれども、ラテン
民族の間に信せらるゝに至りて、天主教と
なり、スラヴ民族の間に信せらるゝに至り
て、希臘教となり、而してチュウトン民族
の間には、獨り耶穌新敎の流行を見るにあ
らずや。馬哈默敎と基督敎とは同じく惟一
眞神を奉ずる宗教たり。而も幾多の教義の
徑庭あるは、教主たる馬哈默其の人の人格
如何によるは勿論なるも、之を奉ずる東西
人民の性情の異同は、主として這般の別を
生せしめたる因縁ならざるを得んや。
且つや各宗教に古今改革運動なるもの有ら
ざるはなし。ルーテルは基督敎改革者とし
て最も有名なるものなりと雖も、國又は時
代によりて、小ルーテルの輩出せしは殆ん
ど枚擧に遑あらず、其は現に數十の分派を
有するに徴しても明なり。佛敎は古來十三
宗三十六派と稱すと雖も、尙能く巨細の分

派を數へ來んか、恐らくは數百の多きに達
せん、是れ皆經論中に就き、新たに一見地
を出して、新宗新派を首唱したるに非ざる
はなし。其大なる者は佛敎の大改革者なり
小なる者は佛敎の小改革者なり。蓮華生上
師は西藏の舊敎を打ち倒して喇嘛敎を唱へ
宗喀巴は喇嘛の舊敎を革新して、新敎を唱
へたりき。凡う改革運動なるものは、之を
首唱せる者の偶發的意志によりて遂げられ
たる場合なきにあらずと雖も、多くの例を
綜合して考ふる時は、殆ど悉く四圍の境
遇事情によりて餘儀なくせられたるものな
らざるはなきが如し。
宗教も亦發達すべき者、宗教は其の教祖の
定めたる教條を一意遵守して、之を不廢の
聖典と信じ、之れに叛くものを異端とし、
順ふ者を正統として以て其混淆惑亂の弊を
拒ぐとを勉むるが故に、比較的守舊の觀念
に富むと雖も、而も其聖典を讀み、教條を
信する上に於て、固より萬人同一なると能

はず。天台も法華經を讀み、傳教も讀み、日蓮も讀めり。而も日蓮の讀み方と、傳教の讀み方と、天台の讀み方と同じからず。是れ支那天台と、日本天台と、同じ日蓮との別を生じたる所以なり。固より一は其の人の天才に因るは言ふまでもなし。然れども其の讀み方を異にするに至りたる所以を察するに、當時社會の事情の互に同じからざるものありて、必ずや之れに促されたる結果ならずんばならず。社會は時々刻々に變遷し發達しつゝあるに、社會の一事象たる宗教のみ獨り頑然として移らざるの理あらんや。否、世と移らざる宗教は、古今皆亡滅の非運を招くを常とす。適者生存は宗教にも亦免る能はざる原則なり。哲學の如きは唯た理を討究すれば足れり。社會が之を容るゝと容れざるは其關する所にあり。理の生存は即ち哲學の生存なり。世に哲學者なく、又哲學を講ずる一の講堂なきも、社會は何等の痛痒を感せざるなり。哲

學の生存不生は全く社會と没交渉なりと雖も、宗教は然らず。直接社會の指導を以て任じ、救済を以て務となすものなれば、社會成立の要素、即ち根柢の要素にして、宗教の存否は或意味に於て社會の存否を意味するものなる以上、獨り宗教家のみと云はず、世の經世家は皆能く宗教問題を以て深く其の念頭に懸くる所なるべからざるなり。要するに宗教の本質なる者は、多くは個人的にして且つ非國家的なりと雖も、古今東西の史實は、一面に於て宗教が一たび或る民族、若くは或る社會の間に信せらるゝに至れば、忽ち其の民族の性情、若くは社會の事情と同化して、茲に一種特殊なる傾向を帯ぶるに至り、或る國家の下に奉せらるゝに至れば、忽ち其の國家の事態と融合して、茲に一種特殊なる傾向を帯ぶるに至ることを證明し、又他面に於て、若し其民族、若くは其社會と同化すると能はず、又其國家の事態と融合すると能はざるもの

は、必ず亡滅を免れざることを證明するを見る。宗教家の立場より是れを見れば、固より宗教が何れの國家、何れの社會の間にも隆盛ならんことを希望するなるべく、國家若くは、社會の立場より之を見るも、其國家の進退を補翼し、社會の發達を助長するに堪ゆべき特殊の宗教の隆盛ならんことを希望すべきは言を要せず。重野博士新に歸朝して、其歐洲教育談なるものを傳へらるゝ所によれば、歐洲の教育は、宗教を本として立てられ、神と云ふが如き漠然たる觀念のみ注ぎ込むが故に、社會黨などの發生を促したるならんと語られたり。實にや神てふ觀念をのみ注ぎ込みて、已が踏める地上の國家を忘れたらんには、社會黨、虛無黨、無政府黨などの發生は、止むを得ざる結果ならん。宗教家は勿論、世の經世家たるもの、深く留意すべき所ならずや。吾人は日本將來の宗教に對して、聊か別種の考案を有す。されど之れを以て汎く世の

同感を得し、人心を染注せしむるは尙遠き將來に在らむ。而れども目下の策としては各宗教共に日本て大旗幟の下に集りて協同戮力し、以て國運の進歩を圖らんことを希望するものなり。されど之れを以て吾人は國家に諷ひ、其の教を曲げ、其奴隸となるものと誤解すべからざるなり。否、國家若し非運を圖るとせば、宗教家たる限り、佛の眼を以て、神の眼を以て、之を説諭し、之を指導せざんばならず。聞くと聞かれざるとは其關する所にあらず、これ豈日本の國家に棲息する吾人靈界のもの、一大任務たらすとせんや

● 將來の宗教如何

文學博士 谷 本 富
宗教は過去の遺物にして將來社會には無用なるべきかと云ふに、決して然らず、今後とても益々其必要を認めらるべしと想はるゝが、併乍ら其風格は迄の通りにては何分

時勢不相應となつて自ら滅亡し去るべきは蓋し、勢免れ難き所ならん、從て將來も仍は宗教は必要なりと云ふと同時に、其所謂宗教は如何なる風格を備ふべきかと、余輩宗教必要論者に取りては先づ攻究すべき問題たるべし。
文學博士井上哲次郎氏は「哲學雜誌」上に於て、例の椽大の筆を以て、將來の宗教は倫理的なるべし、實在の倫理的觀念に依るべき筈にて、人格的なるも萬有的なるとは共に取らざる所なることを言明せられたりと覺ゆ、此意見は實に尋常凡俗の陋見と全く其趣を殊にす、巖然頭角を現はすの卓見と謂はざるべからず、而かも余輩の管見を以てしては、將來の宗教とても必ずしも倫理的なるのみに限らず、萬有的も可なり、人格的亦最可なりと想はる、畢竟井上博士の高説は合理的に論斷せらるゝに過ぎたるにはあらず、余輩不肖ながら些か説なきにあらず、之れに就き頃者某會議室に於

て多少贅辯を弄したることもあれども、今茲には反復詳説せんに暇なし、由つてこれは宗教の本質論として他日に譲るとし、此處には簡單に將來の宗教の風格に就いて一言せんとす。
余輩竊に感ずる所あつて、近頃頻りに宗教を育の忽諾に附すべからざることを説くや、聽衆往々余輩の所謂宗教は果して何宗教を指すや、佛敎か、基督敎か、孰れにしても明言せられんことを希望すと謂へり、而かも余輩は毎に之れに答へて、未だ自ら二宗一派を取つて標榜せず、唯だ單に宗教と云ふ、固より偏頗なし、強いて余輩の持説を質さんとらば、余輩は敢て言ふべし、余輩の好まざる所は、左の五風格を有する者なり、曰く悲觀的、曰く過情的、曰く禁慾的、曰く孤立的、曰く出世間的是れなり、將に又余輩の好む所はと云はば、同じく左の五風格を有する者なり、曰く樂觀的、曰く有趣的、曰く奮闘的、曰く社會的、曰く

世間的是れなりと云へり。

座に在る人々、之れを聞いて、一は得色あり、他は氣色を損するもの、如し、得色ある者は基督教徒にして、損色なるものは佛教徒なり、然も余輩素より毫も之れを以て一方を揚げ、一方を抑へんとするにはあらず、蓋し之れを歴史に徴するに、基督教の教風も亦古今時代に由つて變遷あり、其の初期にありては、概ね厭世的たり、禁慾的たり、乃至個人的たり、出世間的たりしが如し、歐洲中世紀に於ける僧侶生活の如きは特に然りと謂つべし、其樂觀的となり、社會的となり、世間的と成りたるは、寧ろ漸次に馴致せし所の風格たるに過ぎず、佛敎とも亦今日世人の普説するが如くに、小乗大乘の別るゝ所あつて、小乗は言ふ迄もなく厭離穢土ながら大乘の方は寧ろ欣求淨土の理なりとせば、佛敎必ずしも厭世的なり、個人的なり、出世間的なりとも限らず、乃ち余輩の好惡する所を以てしては、必ずしも、佛耶兩敎の勝劣を沙汰せんとするに

はあらず、唯た一言以て之を掩はば、佛耶孰れにしても、古代的なるは大慈悲觀的なり、乃至出世間的なれば、余輩之れを好まず、又其近世的なるは固より樂觀的なり、乃至出世間的なれば、余輩之を好むと云はんのみ。

勿論忌憚なく言へば、今日の儘にては佛敎は概して近世的なるに於て基督教に及ばざるや尙遠し、例之日露戰爭中にも、兩敎活動の方途、形式自ら逕庭ありしが如し、否、今日佛敎徒中に於て偶々近世的設備を見るに至りたるは、實は主として基督教の刺戟を被りて覺醒し、急に其の爲す所を模倣せんとするに外ならずと謂ふも、必ずしも過言を咎められざるべし、而かも佛敎固より近世的たるに適せずとは云はず、されば余輩の切望する所は、佛敎亦將來の宗教として汎く認知せられ尊崇せられんと欲せば、先づ其の舊習を一洗し、故態を一

變して斷然近世的宗教の風格を備へんとを力めざるべからず、世捨て人を以て自ら許し、山林桑下の客と號し、方外の民と稱して、私に得々たる如きは、決して將來の宗教家たる者の爲すべき所にあらざるなり、基督教既に新基督教たり、佛敎亦理當に新佛敎たるべしとす。

尙ほ更に蛇足を添ふれば、古代的の事物は動もすれば貴族的臭味を帯ふると多し、是くの如きは到底將來の時勢に適せざるや毫も疑なし、封建的たり、排他的たる如き皆之れに屬す、共に可ならず、將來の時勢は平民的にあらざれば活動し難からん、即ち近世的にして而して平民的なる之れを將來の宗教風格の總徴と看做すべきか。伏して望むらくは、此の文を讀む人須らく三思して舊夢に眩惑し又一時の營利を事とするとなし、必ずや濁眼を開いて遠謀深慮せざるべからず、故村田寂順師の如きは、真に近事釋門の大徳たり、而かも其の一生

の事業を歴観するに、未だ此點に想到して用意せざりしが如し、されば向後は千の寂順師ありとも、到底願望を挽回し難かりしならん、叡山々門の今昔を思ひて轉た感慨に堪はざるものあり、堂塔伽藍の修繕は固より決して佛敎家唯一の能事にあらざるべしと信ず、將來の宗教を言ふ者先づ一番工夫するを要す(宗教界)

天地と我と一體也

（本春、千葉樹徳會にて）鳴地 黙雷

昨日、私は早稲田大學の敎友會に出て、多くの人々に會ひました。此會は創立以來既に二十餘年を経てをる。是と同じ頃に来て、今猶盛に續いて居るのは、第一高等學校の徳風會である。此二つの會に、私は厚い因縁をもつてをる。先頃田舎より東京に来て、是等の會が、打揃うて麗はしく進んで居るのを見て、私は深く喜んだ次第でありませぬが、今又千葉に来て、從來有縁の

此會に參つて、諸君に會ひ、諸君の愈々厚く道に志されてあるのを見て、衷心喜ばしさに耐はせぬ。殊に私は三十七八年戰役の當時、傷病兵療養地の見舞に忙しがつたことでありましたが、其間所々で、軍醫の方々に遇つて、自分は以前に千葉に居つて御話を聞いたものであるとの挨拶を受けたことが、度々あつて、深く、一寸のことが廣く影響を及ぼすものであることを感じました。併し是は、かような場合のことばかりに限らぬ。凡てのことが、一たび起つたならば、其影響は決して一時一處に止まるものではないませぬ。

香を焚きましますと、それを焚いたものはいふまでもなく、焚かぬ者迄も、同じ香に薫せられます。一つのことが、一切の處、一切の時に、かく響いて行くことを思へば、一つのことが、一切のことが、誠に密に相關係して居ることが分る。それ故、世界の物事の上に、本當の區別をつけることが

出來ないやうになつて、色々其相を異にしてをる者が、實は一體のものであることを認めねばならぬことになる。

私共は、平生、動植物と自分との區別をはつきりと立て、彼は彼であつて我でなく、我は我であつて彼でないときめてをるけれども、我は日々野菜をたべ、肉を食ひ穀類を口に入れて生活して居るではないか。而して彼も亦我が排泄したもので養はれて居るを見れば、彼と我とが常に相融通してをるものであることが分る、自分と社會と、が皆さやうである。我と天地とが、皆同じ關係になつてをる。天地と我と一體であることは、さうしても疑ふことはできませぬ。

今、釋尊の上について見るに、釋尊は誠に人天の導師であらせらるゝ。而も此釋尊がいかにして此世にはたらかせられたか、食物が養ひ、衣服が被か、天が之を覆ひ、地が之を載せ奉つた、めでである。されば大千

世界が皆釋尊に御供養を申し上げたのである。「一佛成道して法界を觀見すれば、草木國土、悉皆成佛」と仰せられてあるが、正しく其通りであつて、佛を供養しまゐらせた程の草木國土が、どうして竟に成佛せぬといふことがあらうか。而も亦一方に翻へつて、石川五右衛門について見るに、五右衛門が、あれだけの罪惡を犯したのは何故であるか、いふまでもなく、やはり食が彼を養ひ、衣が彼を被ひ、天と地とが彼の一身を荷載したためである、されば大千世界は全く五右衛門に加勢したのである、惡人に加勢して、惡人の手傳ひをした程の草木國土が、どうして墮獄の縁を結ばぬことがあらうか、されば天地一體であるために一一の草木にも善の方より見れば善の因がある惡の方より見れば惡の因がある、一つの中に、善惡色々の情を具へてをるといふことは、拒むことはできません。

此道理は、一つのとへについて、明らか

に合點することが出来る。此處に一つの種子がある。種子を地に下してれば、上に向つて芽を生ずる。而して芽は莖となり、莖は枝を生じ葉を生じ、美しい花を咲かせ立派な果を結ぶ。然るに又一方には、之と正しく反對に、下に向つて根を生ずる。而して根は硬くあつて、花も咲かぬば、果も結ばぬ。此硬い根は、彼の美しい花や果とは別の本より出づるかといふに、さうではない、共に一つの種子より生ずるのである。一つの種子に、上つては美しきものを現はし、下つては硬いものを示す性能をたもつてをる。世界の一一のものが皆同様である。私共の心が、亦正しく是と同じである。「華嚴經には、心と佛と及び衆生と、是二三差別なし」と仰せられて、我此一念の心に進んでは大覺の佛位を究め、退いては迷惑の衆生となる性質が具はつてある。此心と佛と衆生と、決して永く別あるものではない、正に同一體である。

佛教のみならず、儒教に在りても、此道理が示されてある。孟子は「浩然の氣」を宣べて居る。我、善く吾が浩然の氣を養ふ。敢て問ふ、何をか浩然の氣といふ。曰はく言ひ難し。決して私共の語で、是が本當に言ひ得らるゝやうなものではない。されど唯言はれぬといふだけでは、さつぱり分らぬ。うで強いて語にかけていへば「其氣たるや至大至剛、以て直し。養つて害することなきときは、即ち天地の間に塞がる」。宋人が苗をぬくやうなことを致さず、道と義とを以て之を養ひ、而も之を損はぬやうにするならば、天地の間に塞がるのである、天地と一つになるのである、此時、我は即ち天地である、天地は即ち我である。「華嚴經は、龍樹菩薩が南天の鉄塔を開いて得たものであるといふ、而も其偈は、大千大千世界微塵數の偈であるといふ。即ち是れ天地全体が、一個の「華嚴經である」との意である而も此經は、釋尊成道のさどりの

を指示されたものである。されば釋尊の御心が、即ち天地全体と同一であるとの道理が、明らかに辨へらるゝのである。

されば我をわさへていへば、我は即ち小天地である。我共が國の内外を分けて、是は中國である、彼は外國である、隔を致して居るやうに、我身体の中に入れて、胃の腑の邊は、自分ころは中國の民である、手足の部分にある蟲などは、夷狄の民であるなど、威張つてをるやうに分らぬ。威張るものあり、輕んぜらるゝものあり、色々あるけれども、外より見れば、單に是れ一箇の人間ではないか。されば彼はアメリカの民乎、我は日本の民乎と、互に排し互に斥けてをるとも、此天地其者が、亦一つの大きな人間であるやうに思はるゝ。

袁中郎は、學佛の儒者であるが「天地は大丈夫にあらずや」と申してをる。されば天地は大なる人である、我である。

是に在りて、私共に深く道を修むるの大切

であるを感せずにはをられませぬ。我は「之を放てば則ち六合に彌り、之を巻けば則ち退いて密に藏る」はたらきを具へてをる、是を打捨て、鄙劣の境界に墮ちず、是を修めて至上の聖位に進まねばならぬ、近く身体の健康について見ても、やはり心が本である。源賴義は、戦局の長びいたのを愛へたるため、白髪になつたが、つひに戦勝つた折、喜びのために髪が再び黒くなつたといふ、心の安らかなために、病苦の中にも、永く生を保つた者は、私の知合の者の中にも頗る多い。何れの點より見ても心を修むることを忘れてはならぬ。醫師が身の療治をせらるゝに付いても、亦心の療治を疎かに致してはならぬ。「詩に曰く、柯を伐り、柯を伐る其則遠からず」道を開き、心を修む、世に是は尊く、是程大切なことはありませぬ

宗教に對する世人の態度は今尚ほ維新前の狀況の如くである。即ち宗教を以て迷信視するか、又は狡猾なる僧侶の愚民を惑はす方便視する者が今尚ほ識者の間を支配して居るやうである。泰西に於ける百年前の状態も稍これに劣るものがある。十八世紀の末葉に於ける一部の識見は、今は道理の世なれば宗教は不用なりとて、一は以て迷信なりとし、一は以て僧侶の方略なりとなした。併し乍ら此思想は十九世紀に入りてより、學術上、歴史上、打破せられたりといふてよい。宗教心は人心の欲求である。此欲求を満足せしむるに、正當なる分子なくして、何を以て一般の人心を支配し得やう。勿論うれば後代僧侶の智慧を以て書き加へた部分もあらう、又佛式の如きも亦僧侶の獨斷によつて増加されたるものも

余が不朽觀

法學博士 澤田 和 民

あらうけれども、人心の根底に於て、切實なる宗教的欲求の存在することは、到底之を否定することが出来ぬ。宗教は人類と其存在を等しうす。宗教なき人類ありしとするの説もあるが、併しそれは、歴史上、又は人類學上、見出し得ざるところであつて言語の不通、又は事情の不通に由る誤解に出づることが多いのである。

これより予の宗教に對する見解の大體を述べて、予が永生に關する信仰如何を語らうと思ふ。

死後のことを信するは、道理を知らぬ愚民の所作なりとしてこれを輕蔑するものがある。例へば、ればけが居ると稱して暗黒を恐れる、併し暗黒はたい光明なきのみにして何等の實在ではない、宗教も之れと同じく恐怖心あるが故に、有像無像を考へ出して、神あり幽靈ありと信するに至るものなりとして、神を信することを以て妖怪を信すると同様なりと論定する人もある、學理

上、妖怪と上帝とを同視すべからざるは勿論であるが、たゞ人類が妖怪を信するに於て二の理由があるのである。

上帝と妖怪と、何れも想像論である。併し乍ら暗中に怪物ありとするのは、人間の想像力のある證據である。下等動物には妖怪の觀念なく、又上帝の觀念もない、ダルウキンの書などを讀んで見ると、犬が夢を見るなど、いふやうなことも書いてあるが、これも見るだらうとの想像説で、何人も然りと斷定することが出来ぬ。妖怪を信するは人間に價値あればである。上帝を信するも其能力あればである。妖怪を恐るゝことは人間なるが故である、これやがて公義正道を畏るゝの根柢である。公道正義は人類の理想である、人はこれを完全なる規範として、これに従はざれば安んずることが出来ぬ無形の理想、規範を恐るゝこと、有形の利害よりも甚しきものあればこそ始めてよく人道のために活動することが出来るの

四〇

である。此理想に背馳逆行することは人類の耻辱として之を恐れる。此の一種の恐怖心が發達すれば、遂には國家を尊重し、君主を畏敬し、人道を愛慕し、宇宙の上帝を崇拜しての命に従つて行動せんとするに至るのである。此の理想に對して自己の品性が耻かしからぬやうにせんと努力することこれ人間の道德的生活である。故に妖怪を解せざる人民には理想、道德的信仰、及び宗教的信仰も成立せぬのである。故に予は此の點より推考して不朽觀を説かんとする。

靈魂不滅は一の信仰である、智識を以て證明することが出来ぬ。聖書も、經典も、畢竟するに一の理想の書、信仰の書である併し此の理想、此の信仰は決して人類として耻づべきものではない。以下其の理由を述べやう。

物質不滅は物理界の原則である。吾人の住家は之を燒き盡すことも出来るが其の元確の結論である。吾人が身體を構成する分子の數すら之を知らるゝに、況んや頭髮の如きに於てをや。

精神的生命には、成長あり進化あり漸を逐ふて發達する。但しこの生命には個人一個としての生命と、種としての生命の二方面がある。個人としての生命には素より終始あるを免れぬ、けれども種としての生命は永遠無窮に存在するのである。植物も皆然りといふことが出来る。吾人の生命は五十七にして終るであらう、併し乍ら吾人の種族は、人類としては、永遠に不滅である。さらば此の地球消滅の時は何如。勿論の時人は人類としての存在も消滅に歸するに相違ない。併し乍ら吾人は絶対に煙滅してしまふのではない、無より有を生せず有は又無を生せず。これ物理上の原則にして同時に精神上の原則である。然らば吾人が生涯活動の結果が決して無になるといふことはない。何等の状態に於てか必ず存在す

素は永遠に不滅である。これ則ち勢力不滅物質無盡の原則である。予は嘗て物理書を讀んで光の不滅なることによつて、人間は物理上、千年も萬年も生き延びることの出来ることを知つた時は愉快に感じたことではない。太陽より發射する光線は、九千六百萬哩の行程を八分間に於て地球に達するといふ。然もその光線は無邊際を走つて行方を知るべからず。億千萬數限りなき星の中には、三年もかゝつて其の光線が地球に到達するものがあるといふことだ否、中には千年もかゝるものあらう、二千を費すもあらう。然も其の光や空中に失せ去らないのである。物理學者は光を分析することが出来る。つまり吾人の活動は宇宙に映射して永遠に存在するといふことが出来る。ウヲイタルローの戦もあらう、關が原の戦もあらう、その時に反射した光が今宇宙の何處かに存在するの理で、其の光は非常なる大速力を以て進行しつゝある。ナポレオンは

劍を抜いて騎兵を指揮して居る、家康は馬に乗つて采配を振つて居る。思ひ來れば感興限りない。それで吾人が一生の事も、造物者の寫眞には殘つて居る筈だ。死せる父母の寫眞もあらう、逝ける弟妹の面形もあらう、宇宙の間には活動寫眞は千萬無量である、これ則ち一の不滅である。物理上の不滅である。

音に於てもまた然り、空中に傳はつた波動は無窮に移動して行く。今こゝに立つて唱歌でも歌つたとしやう。その響は壁を打ち、障子を振はし、窓を越えて外氣に通ず外氣一度これを受ければ遷轉波久、無窮に移つて遂に宇宙に徹底する恰も池水に一石を投じて、波紋轉々、遂に周邊に到つて止むが如きである。二羽の雀は一錢に售るに非ずや、然も爾曹の父の許なくば其一羽も地に墮つることあらじ、爾曹の頭の髮また皆かゞへらる。故に懼るゝ勿れ、爾曹は多くの雀よりも優れり。これは今日物理上正

へきである。さらば吾人は無責任にして人生を經過することは出来ぬ。吾人の一擧手一投足の結果の無窮に傳はること先きの音波の如くである。吾人は遺傳の事實によつてもうの決して懈怠すべからざることを知る。親の不行のために幾多の青年男女が苦んで居るか知れない。或は精神上に、又或者は身體の上に、酒飲みの親の子は其の精神上の傾向に於て、何處かに不具不自然のところがあつた。吾人のなす凡てのことに必ず結果がある。これ物に影あり聲に響きある此の世の常である。たゞ吾人は直接にうの結果を見ることが出来ぬのみである。社會は個人より成る。個人の行動思想が集積して一の習慣を作る。故に吾人心中の私かなる思も、吾人の囁きも社會的には不滅の相を有して居る。況して道徳上の責任の如き不滅なるべきは言を須ひずして明かである。則ち吾人は道徳的、倫理的意義に於て不滅なりといふことが出来る。

然らば此世界の進化發展の最後は如何の時に於ても吾人は決して絶滅に歸するものではない、此宇宙は無より生じたるものではないと信するからである。吾人は仰いで人類久遠の歴史と宇宙の進化發展を思ひ見れば、うに整然として一糸紊れざる秩序と法則との嚴存するを見る。是に於て吾人は千軍萬馬を繰り出してゆく一大元帥の存在を認めざるを得ない。此の世界には儘かに秩序あり、統一あり、決して空しく動き徒らに移るものではない。然るにかゝる世界にありて遂に一物のよく絶對の消滅に歸するものがあらうか。これ寧ろ吾人の考ふべからざるどころである。一物の消滅は則ち形を更へて元形に歸るの意義である。此の肉體の形は消滅しやうけれども斷じて絶對の消滅ではない、うの構成の分子は或は土となり、或は空中に入りて又元の實在に歸るのだ。精神もまた然り、精神的勢力は決して無に歸せぬ。此宇宙のエネルギー

の一部分である。これが人間なる形に入つて来る、故に吾人死すれば吾人の精神は永遠不朽なる世界的靈魂の中に入る、乃ち神の中に生き動き且つ存するのである。たゞ吾人の記憶や理想などの残るや否やは、到底吾人の思議すべからざるものと信する。又吾人には消滅すべきものあり、進化せざるべからざるものあり。罪惡の思、罪惡の心の如きは消滅せざるべからず、小兒の心青年の心の如きは進化せざるべからざるものである。大人は赤子の心を失はずなごいふけれどもいつまでも小兒で居つてはたまらない、これは畢竟道徳上の意味たるに過ぎない。又たどひ正當なことであつても進化發展の上よりして必然消滅せざるべからざるものがある。例へば色欲の如きものである。此れは有機組織にありては、其の種の生存繁殖上必要なるもので、決して不適當なるものではないが、うは有機體に於てこゝ必要なれ、うの形體を離れては

最早必要なものではない。未來まで至るを要せぬ。現に此世に於ても老年に至れば此の欲情は失せて仕まふ。例へば彼の高砂の尉姥の如くである、彼等が千歳の契を籠めて相睦み合ふのは、決して色欲のためではない。人間にはそれ以上のものがある、肉情以上のものが若し人間にないならば人間とは實に憐むべき動物である。うの肉情以上の尊いもの、それが則ち永遠無窮に殘る價があるのである。例へば彼の源平二氏は互に慎悲の炎を燃やして鎗を削つたうの時には互に憎惡嫌厭の極に達して、肉をも咬まむ思もしたであらう。けれどもかくの如きは果して彼の世まで保存すべき價値あるものであらうか。吾人はかくの如き光景を未來に於てまで見たくはない。これは此の世限りである、此の世限りでなければならぬ。此事は既に佛敎も欲へて居る。彼世に於ては彼此もなく、敵味方もなく、愛憎もなく、浩蕩たる永久の大我に溶くべ

きものと思ふ。宇宙には聰明と智識とありこの偉大なる意識は宇宙の大根本である。物質は互に戀愛を以て相牽引して居る、物質尚且つかくの如し、吾人人類にして、此の永遠の太我に合致せざるものであらうか。予は神を信じ、神の意識を信するものである。うの意識は無限にして不可思議なる意思である。この偉大なる大意識の中に吾人の祖先も生き、又吾人の子孫も生くべきである。吾人は神にありて永遠に生くるのである。過去のこととはたゞ記憶に存するのみである。うれすら吾人の記憶は不完全のものであるから、自分の言行にして忘れて居るものもあらうが、神の完全なる記憶には明かに留まつて居るであらう。吾人の友のことも、先祖のことも、人類全體のことも悉く記憶し給ふであらう。吾人は死後に於て此大意識に合致するのであるから、又吾人は獨自一己の存在を有すとも言ひ得るであらうと信する。さらば吾人は個人的に

も存在すといふを得やう。併しこれらはたゞ想像である。吾人はこれらは死後の樂みとして、たゞ標榜極りなき生命の大海に船を浮べて逍遙するを得んと信することが出来る。人或は妖怪の信仰と同視するあらんも、これ決して人類として耻しからぬ想像である。(新人)

●三聚の衆生

通俗佛敎新聞主筆 高田道見

佛敎新聞主筆高田元彌氏には從來未だ曾て面識を得ざりし人なりしが、今春初めて我が新聞社に來訪を辱ふす。一見するに及びて、蓋し吾人ならざるの思ひあり、是れ氏が宗敎弘布に熱心なるの心、情其の面容に現はれ其の言語に發して包むべからざるものあればなり、而して其の來意を問はば、秋長野市に於て諸宗聯合の宗敎大會を開催せらるゝに付、其の贊成を求めらるゝに在り、余は個人として、且つ氏が東京の紀念として、吾國土産として諸大家の論卓説を蒐集し、以て有縁の人々に

宗教上の知識を仰ぎを得せしめんとすの熱誠より、不自なる余輩にまで草稿を求めらる、余や近來頗る多忙にして一切他に投書することを謝絶す、雖も、遂に氏の熱誠に動かされ、卑文一篇を呈する事せり、而して余近頃大乘起信論講義を草するの折柄、因みに感ずる所ありたれば、不取敢此篇を草して大方の参考に供する事は爲しむ。

一言

本稿は今秋に於ける宗教大會の前披露前活動として出版せらるるのであるから、神佛耶三大宗教家の前進會とも言ふべきもので各自の特長を發揮せらるゝ文壇かと思はれず、随つて此篇を手を把る人も種々な分子があるのであらうと思はるゝので、爾うですら研究得益の爲めにせらるゝよりも寧ろ物數寄の諸君は慰みの爲めに讀まらるゝのであらう、されど縦ひ慰みの爲めなるにもせよ、宗教上に關する印刷物を手にせらるゝ諸君は何れも皆多少宗教心のある人なりと云はねばなりませぬ、苟くも宗教心あるは最も頼母救我が同朋なりと云はね

見ては何うであらうか、我が東京にては我が長友の川面凡兒氏が、日本神道の振はざるを憂ひ、全神教趣大日本世界教といへるを宣言發表し、着々として自己所信の主義を擴張しかけられた、是も亦數寄一で信する人もあらうし、好む人も出来るであらう、今や倉嶋元彌氏が神佛耶の宗教大會を開催せられむとするが如きは、公平無私の活動なりと言はねばならぬ、醫師に譬へて見れば立派な開業醫ぢや、内科もあれば外科もある、佛敎を以て内科とすれば、神耶は體かに外科であらう、内科は内科の領分があり、外科は外科の本領があるに依り、何れも全力を盡して天下人の心病を治療しなくてはなりませぬ、仍て余輩は内科の領分を守り、且く診断を試みて見ませう。

病人の種類

健全なる諸君に對して一齊に之を病人と見做すは如何なるものであらうか、併し佛を大醫王とし、法を良藥とし、僧を看病人に譬

ばなりませぬ、併し中には各宗教に最も熱誠なる諸君の爲めにも愛讀せらるゝのでありませう、我が信する佛敎の中には應病與藥といへる言葉がありまして、佛世尊一代の説法をば應病與藥の法門なりと申して、其中に不用の經文は一卷もないと云ひます、今これを宗教といへる廣き意味の上に應用して見ますと、全地球上に在りど有らゆる宗教は、皆何れも應病與藥の教法なりと言ひ得るゝことが出来るであらませう、謂ゆる其の病が千種万様なれば、其の藥も千種万様なるが如く、其の宗教も千種万様なるものが必要であるから、甲を以て乙を嫌ひ乙を以て丙を忌み丙を以て丁を笑ひ、丁を以て戊を誇り戊を以て己を嫉み、己を以て庚を憎み、庚を以て申を撃つが如きは愚の甚しきものと言はねばなりませぬ、世の中には左のみ利目もなき賣藥にも、利目のありさうな廣告をして莫大の金錢を捲揚げる藥種店もあります、又之を買求めて服藥

ふるからは一切衆生を病人に譬ふるは至當の事であると思ひます、佛敎にては一切衆生を精神的の病人と見做して法藥を調合せられたので、其の病本を無明といふ、一團の無明が順逆の二ツに分れて貪瞋の二種となる根本の痴無明を合して貪瞋痴の三毒と名けたものです、故に貪欲あるものは必ず瞋恚がある、瞋恚あるものは必ず貪欲もある、貪欲あり瞋恚あるものは必ず愚痴がある、愚痴の爲めに其の良心が味まされるに依りて貪欲も起れば瞋恚も起るのであるこの三心は人生を毒し社會を害するパタリア(微菌)である、此のパタリアが一切衆生の精神界に發生するものぢやに依りて財色食名睡の五欲病を引起し、身三口四意三の十惡病、貪瞋痴慢疑の五蓋病、乃至人我病法我病、我慢病法慢病淫病酒病、傲慢病嬌奢病、自慢病高慢病、諸法執著病、殊によると自力病、他力病、宗教病といふ様な慢性質の病ともなる、經中には四魔病、十魔

する人々は左のみ利目はなければ別に立腹もせず後悔もせずして得々たるは不思議なものです、世には殆ど賣藥に類する宗教も色々ありまして其の存在を見るは實に不可議なものです、世に不用なものは一ツもなきものです、天理教、金光教、黒住教、深教、御嶽教、大成教、神宮教、蓮門教、富士講、金毗羅講、地藏講、觀音講、稻荷講、庚申講、淘宮術、干支術、さては阿彌婆羅、秘事念佛、空也念佛、曰く何に、曰く何に、佛にも屬せず、神にも屬せず、妙痴奇隣なるもの數々ありて、夫れ相應に優勢を保持してをる所を見れば、麥喰ふ虫も色々ややら、信する人もあれば好む人もあるとしては一ツもありません、況して觀々堂々たる世界の大舞臺に登れる千両役者として其名を博したる神佛耶の大會をやぢや、蓋し神道は我がこの大日本帝國内に於てこゝろ肩身が廣いけれど、世界の大舞臺に眺めて

病、五十の神魔病、八万四千無量の煩惱病ありと説かせられてあります之が釋迦大醫王の病魔本末論とも言ふべきものにて、之を治療するために八万四千無量の法劑を案出せられてある。之を概括して申しますると三毒病を治せんがために戒定慧の三法劑を調合せられ、慳貪毀慧瞋恚懈怠散亂愚痴の六蔽病を退するがために、布施持戒忍辱精進禪定智慧の六波羅密を調劑し、十惡病を退するには十善といふ様に法劑が調劑してある諸君この病論に依り、心靜かに診察して見られては如何です、如何なる人たりとも無病健全なりとは申されませぬ、只今の病に輕重大小の差があるまでのことです。

三種の診断法

是くの如く一切衆生の病症は四百四病をこゝろではなく、八万四千無數無量なれども、之を邪定、不定、正定の三聚に攝して區分せられてあります。

▲一に邪定聚の衆生「先づ之を佛教から診断すると、三毒病の最も重きものにて、只目前一生の生活問題に耽著し、神あること佛あることを信せず、善を作して善の報いあること、悪を作して悪の報いあることを信せず、過去世の善悪業あること、未來世の苦樂昇沈あることなど一向に信せず、人間の貴賤貧富、美醜好惡の千態万狀なるも只自然の結果なり、偶然の所爲なりと無因有果の邪見を是として、賢聖の教を信するといふこともなく、只浮世の名利のみ驅使せられ三毒五欲の奴隷となりて醉生夢死に終るの種類である。

此中にも一生意をのみ爲して、監獄を其の住家とし、或は巧みに法網を潜りて詐偽取財、竊盜巷賊を商賣の様に心得、佛とも法とも知らぬ無智文盲のものがあつて、之を最下等の斷見社流といふ、又少く経世の智識もあり、學問の素養ありても、ツイを神佛に手を合せるといふこともなく、善惡因

果の道理あることも考へず、自から無宗教者を以て誇り顔なる人もある、之を中等の斷見邪見といふ、我は多少宗教の道理も知り、佛教の理窟を覺われたれど、只之を世渡の業と心得、神威佛徳の何たるをも思はず安心立命の歸着もなく、浮々として世を過す者がある、之を上等の斷見常見といふ、此等の種類は已れに確たる信仰がないから表裏反覆して人の見ぬ所ではドンな悪いことをするかも知れませぬ、此等を佛法では關提無佛性の人とし、邪定聚の憐れむ可き衆生と名けてある。

▲二に不定聚の衆生「此れは深く佛法僧の三寶に歸依し、善惡因果の虚しからざることを信じ已れに眞如佛性の妙心あることを信じ、宇宙法界に充塞せる眞理ありて我等衆生は此の眞理海中に棲息してをるものであるから、惡といふ惡は斷じなくてはならぬ、善といふ善は作さねばならぬと承知しながらも、時に或は無明の習氣に

礙へられ、三毒の猛風に吹かれて其信を失ふことがある、失ひ失つて全く凡情に墮することあれど、又自から反省し、慚愧し懺悔して其の信を回復することがある、是くの如く一進一退して信根の固まらざることは、水上の浮草の如く、空中輕毛の如きもある、之を不定聚の衆生といふ、今の佛教信者といふもの、或は僧尼行者といふもの大抵はみな此種に屬するかも知れませぬ。

▲正定聚の衆生「此れは信心決定の人に於て、八風吹けども動せず天邊の月とやら、百花叢裡に過ぎれども一葉會て身を露さずとやら、打たれ様とも踏られ様とも、如何なる順境に出會ひ、如何なる逆境に遭遇するども、斷々乎として其の所信を變せず、心鐵石の如く頑として動かさず、心金剛の如くにして擊てども摧けざる底の信不退を得たる衆生を名けて正定聚の人といふ、此信心決定人は成佛斷ひ無きが故に安心決定の妙好人ともいふ、彼の馬鳴大士が大乗起信論

を撰述せられしも、不定聚の衆生を正機とし、衆ては邪定聚の衆生をも引纏めて正定不退の信心を發起せしめんがためであり、又、聖淨三門に於て勸發する信仰の刀も、皆た、此の位不退に引導するに過ぎませぬ日本各宗の安心を談するもの、皆また此に歸趣せしむるのであります、之を起信論では信成就發心と申してある、是れより更に進一歩して解行發心、證發心に入るものは甚た少数と云はねばなりませぬ、苟くも佛説に準じて信決定を得んとするの士は、この標準點を記憶に存して置かれんことを希望に堪へませぬ、以上を總括すれば左の通りになり升。



佛教の日本に及ぼせる感化

この篇は昨年九月姉崎博士が米國サンフランシスコ米國佛教會堂に於て講演せられたる同會記者の筆記したるもの也今語訳の參考に供せん

文學博士 姉崎 正治

「日本は佛教國なりや」といふことは外人に依りて屢々質問せらるる問題なり、元より日本は佛教の爲めに、如何に感化せられたるや否や甚だ漠然たる疑問にして一場の講演によりて能く之を説明し去ることは不可能なり。

凡う或國が我宗教に改宗すると云ふとは決して容易になし得るものに非ず、歐米諸國には到る處壯麗なる基督教の寺院を見ざるなし、されど歐米諸國は果して基督教國なるか、果して歐米諸國が全然基督教に改宗したりしや否やは疑問なり、歐米諸國には基督教が傳播せし以前に各民族は夫々の信仰を有したり、故に或人は「新教は獨逸人の宗教の發揮せしなり」といひぬ。新教は實に獨逸人の個人主義即ち人間の威嚴を主

張せんと勉めたる基督教なり、或は云ふ、こは基督教が興へたるにあらずして獨逸人否寧ろ廣くチニートン民族の宗教思想の復活なりと、斯くて獨逸人は一時基督教に感化されたれども一部獨立主義てふ彼等の本能を失はざりき、故に如何なる國民、如何なる民族も全然一の宗教より他の新しき宗教に改宗するといふことは或は不可能ならん、明治維新の後基督教の勢は日本全國を風靡するならんと想像されし結果は然らざりき、今日、日本人の基督教宣教師すら或る程度までは基督教の感化を受けたらんも全然改宗するてふことは恐らくは不可能ならん、故に日本は或程度まで佛教の感化を受けたれど全然佛教に改宗したりと斷案を下すは早計なり、されば何れの國民何れの民族も舊き生命舊き生活を全く放棄して新しき生命、新しき生活を享受するてふことは不可能なれど少くとも或程度までは漸次感化され變化するはまた否定すべからざ

る事實なりホルー氏は其著アドレスセンス
 (青年期に於て十七八歳の人間の性質の變
 化を説明して人間の性質は根本的に變化せ
 ざれども而も漸次變化しつゝあることを説
 きぬ、一の宗教より他の宗教に移るも全く
 之れと同一轍なり、日本人は佛教に全く改
 宗せざりしとも少くとも其感化を受けて變
 化したるは事實なり。

然らば日本人が感化を受けたる佛教の中心
 點は如何、日本臣民は佛教の如何なる部分
 を採用せしが佛教には多方面ありて哲學的
 なるあり、倫理道德の方面あり、其他極樂
 往生説等あり、日本が此等佛教の全部を取
 るに非れば改宗したりといふ能はずとせば
 日本は無論改宗せざりしなり、又は日本人
 は其總てを採用せざればなり、然らば日本
 人が採用したる其最も肝要なる部分は如何
 なる點にして如何に日本を感化したるか、
 佛教の厭世主義即ち出家遁世の教は或る程
 度まで日本人を感化せしむ能く感化したる

したるは物部守屋なりしなり、佛教は此争
 鬪の激烈なる時に來りて大感化を興へ或點
 までは彼等の争鬪を調和したり、此調和は
 聖德太子の憲法に現はれ其第一條に「和を
 以て貴とす」との語を見るに手取りりて當
 時如何に「反對の信仰に飽きて」「調和の信
 仰」を求めたるかを知るに足らん、然らば
 この調和の信仰は如何にして得らるゝか、
 太子の憲法第二條に於て三寶(佛法僧)が根
 本なることを示し即ち佛教を以て調和の信
 仰の基礎とせられしなり、實に太子は種族
 のユニチーを見出し國民的ユニチーを唱へ
 たる日本に於ける最初の人なりき、此憲法
 は只文字のみに非ずして從來反對の争鬪に
 苦しむたる國家を調和し、國民の統一を計
 畫せられたり、太子は亦政治上の統一と同
 時に宗教の統一をも計りしなり、法隆寺の
 夢殿は實に太子が其處に籠りて一のビシヨ
 ンを得、遠く印度の昔の聖者と精神的交通
 をなしたりし所なり、此精神的調和が當時

肝要なる部分となる能はざりき、然らば
 は如何なる點なるか、曰く吾人々類のみな
 らず一切衆生、有情無情、生物にあれ無生
 物にあれ、此世と存在する一切のものは皆
 悉く一の精神的結合に住すてふ思想が最
 も能く日本人を感化したりしなり、故に我
 國に於てこの思想が盛なる間は佛教も我國
 に於て隆盛なりと云ふべし、佛教は前に於
 ける我國精神的生命は即ち神道にして、神
 道は相對の思想を有したれ共結合なる思想
 はあらざりき、古事記に天地別れて其中に
 一の神現はる即ち天の御中主尊と云ふとい
 へり、倍この天の御中主尊は一の主神とし
 て總てを支配し結合するかの如くなれど如
 何なる點までを支配し結合したるかは不明
 なり、加之此最初の神は日本人には夙に關
 係遠くなりて其以後の神が尊敬せらるゝこ
 ととなり、此神は寧ろ「忘れられたる神」と
 なりしが如し、さて其次に尊敬さるゝ天照
 大神は果して主神なるか、曰く否、一方に

我國の思想界を動かし上流のものは指導者
 となりて此思想を鼓吹せり、而して其結果
 は有形の繪巻彫刻となりて表はれぬ、奈良
 朝の美術は即ち之れにして、恐くは音樂に
 も現れしならん、聖武帝の如きは東大寺を
 建立して各地に在る國分寺の中央總本山と
 なし、大佛を安置して其周圍に多くの諸佛
 菩薩天神地祇の像を安置して一の大統一を
 成程度まで有形に現はさんとの理想を實現
 したり。

東大寺の成るや、帝自ら群臣百僚を率ひて
 臨御せられ大音樂を奏して大法會を執行せ
 られぬ、帝自ら盧舍那の前に跪きて三寶の
 奴と稱し、群臣をして共に禮拜せしめたる
 は此時なりき、其法會の如何に壯嚴なりし
 かは、今日より之れを追想するも難からざ
 るなり、思ふに當時此式場に臨みし者は、
 たどひ佛を信せざるものと雖も此等有形の
 事物に依りてユニチーなる思想に感化せら
 れざるものはあらざりしならん、蓋し帝は

於ては皇室の祖先なれども總ての人間を造
 りまた支配せしと云ふ能はず、天照大神は
 ライト(光明)とカルチニア(文化)の主神
 にしてダーク(暗魚)の神なる素戔尊と常
 に争ひたり、この「反對の思想」即ち光明と
 暗魚とが互に争鬪すてふ思想が佛教以前の
 日本を支配したりしなり、又出雲の大國主
 命と天照大神とは常に反對争鬪せられたり
 どの傳説もありて兎に角此分裂抗争の思想
 は其後長く續きたり、この點に於て我國固
 有の宗教は波斯の宗教に酷似たり、而かも
 この争は單に神と神との争鬪のみならず、
 社會にも此反對の思想が應用せられしなり
 日本が皇室の下に統一せらるゝ迄は社會狀
 態は氏族と氏族との争鬪にして實にこの「
 反對」てふことが當時の思想界を支配した
 りしなり、此の反對の争鬪が最も激烈の頂
 點に達したる時に佛教は傳來しぬ佛教は實
 に最も必要なる時に我國に來りしなり、こ
 の佛教を歓迎したるは蘇我馬子にして反對

精神的統一と共に國民的統一を計らんと企
 圖したるものにして、其拜佛式の如きは其
 手段たるに過ぎざりしなり、されど此出
 來事たるや實に佛教に依りて興へられしも
 のにして、日本の文明史上に特筆すべき最
 も肝要なる事なり、佛教は第一に聖德太子
 の憲法に於て、第二に東大寺の大法式に於
 て著しく其感化を興へたり、或論者は佛教
 の感化は無益なる金錢を消費し、當時の人
 民を苦しめたりと批難する人あり、これ一
 理なきに非れども、未だ楯の両面を見ざる
 の論なり、此事業が一方に於ては莫大なる
 金錢を消費したると同時に、他方に於ては
 我國の國民的精神の統一に與りて力ありし
 は掩ふべからざる事實なり、當時日本の邊
 鄙には未だ皇室の勢力及ばず、盜賊各地に
 出沒して國民統一は極めて微弱なりしが、
 これを調和統一するの手段として國分寺
 なるものを各地に設け、地方政府と併行し
 て人心の收攬に努めたり、而して壯大華嚴

の建築は當時邊境に在る人々を驚かし、而も此等總てを支配するものは皇室なれば皇室の勢力は夫れ又絶大なる故との觀念を起さしめ、容易に其威に伏せしむる事を得しなり、かくして一方には政治的パワーを擴張し、一方には宗教的敬虔の念を興ふることを得たりしなり、兎に角奈良朝は我國の國民的精神の統一を此の信仰とこの手段によりて進出たるが、更に平安朝に入りて精神の統一が實際的に力となりて現はれたり、奈良朝の佛教は唯有形の美術として現はれしが、平安朝には更に進んで無形の文學として湧出したり、平安朝の文學は種種なる方面に於て佛教の感化を受けぬ、殊に最も多く其感化を及ぼしたるは法華經なり、恐らく日本に於て法華經の如く多く讀誦せられ多く書寫せられるは經は他にあらざるべし、法華經にても特に藥草喻品即ち佛の慈悲は雨の如く能く一切に被らしめて差別あること無く、又佛の智は太陽の如く、一の光なれども能く世界の總てを照して隨處することなく、各々に應じ境に従つて慈悲を垂れ智を得せしむ云々の思想は當時の文學否當時の思想界に大影響を興へたり、平安朝の國歌は概ねこの思想を歌へり、あわれといふ感情即同情が當時の文學の特長として顯れぬ、其最大文學は勿論源氏物語なり、源氏物語は源の大將が關係したる種々な婦人の感情を寫し、更に天然の美を各婦人の感情にあてはめ、即ち人情と天然とを巧みに歌ひしものなり、紫式部は深鋭なる觀察を以てかく巧みに天然と感情とを寫實したると同時に、またあわれてふ同情をもて歌ひしなり、この同情てふ觀念を興へたる根源は實に法華經なり、源氏物語は實に法華經を日本文學に書かんとて生れたるなり、紫式部の天才はかくして大なる佛教の感化を我邦に興へたり、其他平安朝の文學は多くはこのあわれてふ精神的調和の思想を歌ひぬ、下りて惠心僧都が

往生要集に於て此精神的調和を書き、更に繪巻もてを現はさんと企てたり、即ち惠心の筆になれる曼陀羅は全くこの目的に外ならざりしなり、更に下りて足利時代にはこの精神的調和の思想が謡曲となりて現はれ、謡曲の大體の筋書は精靈を廻向すてふ點にあり、敦盛、殺生石等の如し其他大多數の謡曲は殆んど皆佛の力により精神的統一の境に入る、即ち成佛するてふ思想を歌ひしなり、この謡曲が如何に當時の人心に影響を及ぼせしかは不明なれど、兎に角當時の僧侶が努めて謡曲を作り、精神的統一の思想を世俗の間に傳へんとしたることは事實なり、或る者は日本の宗教を祖先教なりと解釋せり、然らば其祖先崇拜の意味、如何、西洋人の祖先を崇拜するは其祖先の靈に愛願して福利を得んとするなり、即ち實利主義の祖先崇拜なり、日本人の祖先崇拜の意味は然らず、佛教渡來以前は兎に角佛教傳來以後我國の祖先崇拜は實利主義に

るから、夫で昔公を祭つて、願くは自分の子も昔公の様な賢明な立派な人にならうとの親の心である、洵に昔公は理想的人間の模範、即ち雛形であつて、此昔公の人格を透して、吾々は深遠なる意味を味ひ、且つは教訓を得るのであります。

あらずして、或一種の深き畏敬の情を以て崇拜せり、諸君が故國に於ける祖先の墳墓に參詣したる時實利的の考が浮ぶと假定せば、うは最早日本人にあらずして猶太人的なり、眞の日本人は今少し深き感情に支配せらるゝなり、吾人が祖先の墓に詣する時靈の有無は兎に角、或るインビヅルの情緒に支配せられ、吾人と祖先の靈との間に或る血液を通ずる如き、即ち一種の結合統一あるが如き感あるは事實なり、英雄崇拜の如きも實にこの思想の影響に外ならず、又此結合的信仰が社會的に活動して、彼の今日世界に於ける赤十字社の事業が決してキリスト教の専有物にあらざるを示せり。

各方面に表はれ居るなり、則ち日本に於ける佛教の感化は精神的統一にありと云ふべし。

●偉人の訓誡

釋 雲照律師講話

満堂の諸賢、老納はこれより日本民族の佛心開發に就て、少し感想を述べて見ませう特に昔公の人格は老納の最も欣慕して措かざる所である。

一 思ふに、一般三月の節句に雛人形を飾り、餅や菓子やいろ／＼澤山に供へて祭る儀式があるが、彼の澤山な雛人形の中で、一番上席に位し、中央の本尊と成つて居らるゝは、抑々誰であらう、是は言ふまでもない昔原道真公である、此御方は小學校の兒童も知つて居る通り、學徳兼備位人臣を極められた、其の上深く佛教を信じ、佛教に由て人格を養成せられたる、理想的の人であ

二 昔公は御承知の通り、政治が上手で、位は人臣を極められ、不幸にして、冤罪を蒙られても、人を咎めず、天を怨みず、深く因果の理法を信じ神佛を信仰せられた、公が讃岐守に轉任せられた、仁和四年十二月、三千佛名會を修せられた、其の懺悔會の文の中に斯ういふことがある。

文祿の役敵味方多くの戦死者を回向し、又嶋津家が高野山に敵味方合葬の碑を建てたるが如き、死して後は敵味方なしと云ふ日本人の精神を表はし居るを見るべし、この他此精神は茶の湯、花道のうれに至るまで

我今爲レ吏居ニ南海ニ朝夕懇誠望ニ北辰ニ趨ニ拜宮門ニ或倭士ニ奉ニ行制旨ニ即、忠臣ニ會ニ前後禁ニ屠割ニ會之中間絶ニ並辛ニ顧悅ニ寒霜梳味ニ遇伽曉指井華神ニ城中遍滿善攝念ニ境内掃除雜染塵ニ香ニ出ニ善心ニ力用ニ火花開ニ合掌ニ不開春ニ歸依ニ一萬三千佛ニ

哀感二十八萬人云々。

とある此數行の文字は、如何に省公の人格の高きかを表はしてれる、公は身は人身と雖も、心は佛神の意を心とせられて居つたのである、公は實に教育界の本尊である、固より西事公の如くせよと云ふではないが其の高潔なる精神、崇高なる人格、熱烈なる信仰を真似るがよい、其の信仰の深かつたのは、九月九日の佳節に左の如く歌はれた。

一朝逢三九日、合眼獨愁臥、菊酒爲誰調、長齋終不破。

翌年配所に年を迎へられた詩に。

故人尋寺去、新歲突門來、髮倍春初雪、心添臘後天、齋盤青葉菜、香案白花梅、合掌觀音念、磨蘇不把杯。

とある、宜なるかな、千歳の下省公の廟は天神様として拜せらるゝことや、左の一首の歌は誰も承知してれる歌で、やはり省公の御歌であるが、此意味を誤解してれるも

のが多いから、一寸辯してねかねばならぬ

三 心だに誠の道に叶ひなば

祈らずとも神や守らん

此歌に就て、今頃の物質的學問のみした人達は、大に誤解してれる、それは、已れが如き誠の道に叶ふた者は、別段に神や佛を信仰し、之を禮拜する必要はないと云ふて更に傲慢不遜で、恭謙の美德を缺いてれる此心持がうも、大なる誤謬ぢや、此已れは誠の道に叶へりと思ふ一念が、即ち誠の道に外れてれる證據である、此事が分らぬは實に氣の毒である、何となれば歴代の天皇は天高しと雖も、之に踞り、地厚しと雖も之に踏すと仰せられ、戦々競々として天神神明を恭敬せられた、一天萬乘の君なれば、如何に頭を高くせらるゝも、決して何人も一言半句批判するものはなきに、併も歴代の陛下は、十方の神三世の佛陀を拜せられた、これが日本特有の靈界の花で

五二

ある、是れ有ればこゝろ國體の尊嚴が天壤無窮に傳はる所以である。

故に省公の此歌の精神は、謂ゆる至誠の精神が内に充ち、一舉手一投足が誠の道に叶ふときは、假令祈らずとも神は必ず守り給ひ、たとひ祈らずとも佛は必ず守り給ふのである、之れを誤解して神佛を信仰せなくてもよいと言ふは邪見である。

四

凡る信仰の念、敬虔の心のない者は、人間としての價値はゼロと言はねばならぬ、聞けば西洋人は新婚すると両親と別居すると、親を追ひ出す、無學で分らぬと親を賤む、謂ゆる孝經を以て母上の頭を打つ、何んと淺ましい譯である、學問の本旨はソンの仁徳帝に譲られた、帝は其意を體し租税を減じ、民を撫育し給ふた、高きやの歌は御製でないとの説があるも、實は天皇の精神を能く現はしたのである、文明文明と文

明萬能者に、是等のことは野蠻時代のこと、云ふ者があるかも知れぬが謙讓禮讓の爲り身を殺して仁をなし、位を讓られた美談は古今東西にも類例はあるまい、物質的文

明は進めば進むだけ、道徳の方はからになる、三十年前の話だが、和歌山縣の安田郡の或る山奥に、一間半に二間位ある直徑の楠があつた、中が朽ちて人の出入するやうな穴洞が出来ていたのを見た、斯くの様に皮ばかりで、腹の中が空になると役に立たぬ、人生の事も然りで、物質的の文明のみで、人々の精神が空洞になると何んにもならぬ、腐れば寧ろ新鮮のもの植へ換へたらよい、フタガヤの菩提樹も五六度植替た唐崎の松も植ゑかへた、斯の如く木が朽ちると新鮮のものと植へ替る通り、明治の道徳界には省公の様な、健實なる精神熱實なる信仰、崇高偉大なる道徳的精神の名木を植へねばならぬ、延喜天曆の名木を植へ付ければならぬ、之れ老朽が日夕東西に奔走

して、其方策を論じ、其の氣を諸賢の肝腑に吹き込んでねきたいので、覺悟す老朽をして努力せしむる所以である。

五

次に此度最爾たる小國の日本が、大國の露國と戦ひ、百戰百勝せし原因は、武士道と教育の力であると世論が一定してれるらしい、此教育の歩合は、我日本人は百に對し無筆は四五名位であらう、支那朝鮮は百中の九十は無筆である、又西洋諸國も三年前迄は百人中八名までは無筆であつた、されば日本が萬國に卓絶して比較的に文字の智慧あるは、簡にして萬事を盡すいろはがあるからぢや。

此いろはは文字としては頗る簡單で、而も日本の言語を集め盡して残りがない、之に由て日本の兒童の如何なる六ヶ敷文字も皆讀み下して滞る所がない、うれで現今の如く普通教育が進んで來た、されば此四十八文字は何を意味してれるかといふと、此

六

斯る有様であるから、倫理ぢや、道徳ぢやと講座を開いて、八ヶ問敷云ふも、更にきめがない、毎日の新聞を見たら能く分る殺す、盗む、姦通する、妄説を吐く、戯論

五三

を云ふ、悪口を云ふ、兩舌を云ふ、非利を
貪ぼる、打つ擲ぐる、邪説迷信を主張する
者がある、皆これ文字のいろはを讀むも、
無形の精神的いろは、即ち信仰の念がない
から、斯る有様となるのである、昔公の如
きは此いろはの真味をチャンと信仰し合點
して居られたのである、由て老親は此の生
けるいろは即ち佛教を再興し、道徳の挽回
を圖りたい、是が老親の天職である、此素
願が達せねば安んずることは出来ぬ、一
言にして言へば、佛教は公明正大なる天地
間の因果律より生れたもので、有限なる人
間の小智を以て彼れこれと差排することは
許さないものである、昔公の如きは、明に佛
法を一身に體得してられる、由て此いろ
はこそ皇國の教育の花、宗教の眞髓である
故に教育と宗教を二つに引き分けんとする
が如きものあらば、是れが猶人の頭と身體
を二つにせんとするが如きものである、故
に余は眞正なる教育の效果は宗教即ち佛教

の力と協力せなくては收むることは出来な
いと思ふのである。

世界宗教界七奇事

文壇博士 三宅 雪嶺

宗教界に奇事の多き事は擧げて數へられな
いが、而かも大抵一小部分に限られて、他
に影響を及ぼさぬ許りでなく、別段廣く知
られても居らぬ、今其比較的廣く知られて
居る中で七事を擧げて見よう。

(1)には眞宗の世襲的活佛である。僧侶の世
襲なるものは他にもないではない、規則で
定まつて居らなくても、宣教師の子は宣教
師に成ると云ふ様なものである。又活佛と崇
めらるゝも種々の例がある、例へば上帝の
代表者として靴に接吻させると云ふ様なこ
とは即ちそれである、が、然し活佛を世襲
にして子や孫やが只人でないと云ふ様に見
られて居るのは、本願寺程甚しいのはない
其法主が地方に巡教した時、湯に這入ると

異端邪説として排斥するものもあるが、多く
のものは初めから幸福を本位として其の爲
めになるものは何でも關はず皆取らうとす
る、忽必烈の時、儒教も佛教もモハメット
教も基督教も有つて平等に扱はれたが、人
が之れに向つて何れか一つを撰んだがよか
らうと云つたら、其答に、何れが善いか何
れが悪いかと云ふのは容易に定められない
昔を信じて置けば善いかに善いことがあるだ
らうと云ふことであつた、這は忽必烈の語
であるが、一般に其意味合が存して居る、
即ち福が來るとならば、何でも信仰する、
もと福徳を拜むので其の外ものは總て手
段として居る、一の宗教を信じて、其他を
斥けねばならぬと云ふとは、解し得ぬので
ある、此の方から見れば、只一宗に凝り固
まつて、其他は明かに福徳を授くるもので
あるに、其れを信せぬのは愚であるかに思
てゐる、通例宗教は一宗に限り其中でも一
派に限ると云ふ様に見られて居るのに、此

の方は凡て幸福から打算して、幸福の爲め
なら何でも御座れである、最も形式に拘泥
する民族の中、已れの幸福を主として宗教
の形式に重きを置かぬのは一の奇なる現象
である。

(2)にはバルシーの鳥葬である。バルシーは
人口が少なくて重に孟買に住んで居る。人数
から云ふと言ふに足らぬが、印度の中で最
も富んで居て最も事業を興すに巧みである
歐羅巴に留學して居るのも少くない、日本
の綿の取引は全く此手からである、我が神
戸にも住んで居る。なか／＼文明的の智識
を有つて居るが、死ねば鳥に食はすと云ふ
とに決めてある、所謂寂靜塔と云ふは即ち
これである。かこいの中に人を食ふ鳥が蓄
へてをいて、死んだ者は皆此の中に入れて
食はして了ふ、其の周圍は奇麗な花園にし
て置くのである。孔雀の類が飛んで居る。
孟買で一番見はらしの好い所は此の寂靜塔
の爲めに占められて居ると云つて、外人中

其の湯を蛤貝に入れて、一杯壹錢づゝに賣
つたとがあるが、其れ等は随分ひひいので
ある其れも、或る町又は村落限りのとなら
ば怪むにも足らぬが、兎に角日本で最も有
力で信徒も最も多くあつて東は布哇西は
韓國及び清國に布教して居ると云ふ程のも
のであつて、此處などあると云ふのは、
珍しいと云はねばならぬ、もと佛教は妻帯
せぬのが多いのに、妻帯したのは最も榮へ
て而も封建制度が頽れた後、尙門閥を維持
して居ると云ふのは一の奇なる現象である
(2)には支那の福德宗である。その宗旨でも
それだけが幸福を念として居る、地獄極樂
でも天國でも其意味である、が、幸福を本
位とする迄には至らぬ、或る宗教を信じて
居れば、他の宗教を信せぬと云ふので、實
に一を信すると其れに束縛せらるゝとも厭
はぬ、又如何なる事を以て誘はるゝとも其
れに應せぬと云ふとに成つて居る。支那に
も種々の人があつて、或る説を信じて他を

非難するものもある。而して其死骸を鳥に
食せると云ふのは如何にも野蠻の様に見え
るが、彼等自らは之れを怪しむものを怪し
むと云ふ有様である、鳥に食はせるのを殘
酷だとすれば、土の中に埋むるのも火で焼
くのも殘酷である、只自分の宗教では火を
大切にして、之れでしかばねを焼かぬと云
ふので、うれで鳥に食せるのであると云つ
て、平氣である神戶に居るものも仲間がふ
へたならば、こゝにも寂靜塔を建て様と思
ふと云つて居る。かく死骸を鳥に食はすと
を當り前にして居るのも一の奇なる現象
である。

(4)にはトルコ帝の足がある、帝はモハメツ
トの後で最も神聖なるものとされて居る
その昔からの教へとして、帝の踏む所は凡
べて領地であると云ふので、何れの地でも
帝が行けば其踏んだ所の地面は、領地と認
めねばならぬのである。何れの國に行つて
も、ソウ見るより外はないのである、各國

交際する様になつて、外から君主が見舞ひに来る、それに對して答禮しやうとして出かける、通り過ぐる所の足跡は皆領地と云ふことになる、これは六ヶ敷の事だと云ふので、答禮が出来ぬ次第である。先帝の時埃國皇帝が見舞ひに來られて、其答禮に就て評議があつた、と一しても帝の足の踏む所は領地であると云ふ教を破る事は出来ぬと云ふことがあつたが、帝は答禮に反對する凡ての議を斥けて、更らに他の意見の出ることを望んだ。後に出たものが云ふには、答禮は尤もな事である、然し古來の教へを破るとは出来ぬ、が、其教は足の踏んだ土とある、靴の上にもう一つ別の靴をはいて御出になつたならば、土を踏まぬことになるので、別段差支はないのであると云ふのであつた。ソコで云ふならば可からうと云ふので答禮することに決まつた。かゝる奇妙な解釋せねばならぬと云ふのも一の奇なる現象である。

(5)には羅馬法皇宮殿の治外法權である。昔は法皇の威權が帝王を壓する程であつて、外から政治上の關涉を被むらぬともあつたが其は昔のこと、最早時代の變つた今日思ひも寄らぬ様であるが、パチカノの宮殿に有つては依然として伊國政府の支配を受けぬのである、伊國には伊國の軍隊があるのに、彼の宮殿は瑞西兵を以て守つて居る各國は伊國政府に對して大使公使を駐在せしめて、別に法皇に對しても使節を駐在せしめて居る、伊國の君主は種々の手段を以て法皇の權を殺さうとした、今の宮城もそれは法皇の所有であつたのである、而して段々と其權を殺さした、到底パチカノに及ぶとは出来ぬ、羅馬は首府として不便な地であるに拘はらず、此所に政府を置くのも重に法皇に對すると法皇に劣らぬ事を國民に示さんことの考へからである、法皇の權は昔に比することは出来ぬが、宮殿内で嚴として一國の形を爲して居るのも一の

奇なる現象である。(6)には猶太人の希望である。猶太は既に滅亡して人民は諸方に散じた、其の人民は酷く卑しめらるゝと共に金儲け一方に掛つて既に至る所に金満家が出来て居るのである各方面に人物が輩出して、金満家許りでなく、大政治家も出て、大學者も出た、若し勢力を集めたならば優に一國を成すに足るのである。隨て猶太再興の計畫が數々起るのであつて、エルサレムに大本山を建て各地の猶太人を漸次其周圍に集めて地上に天國を建て様と云ふ希望である、之れを實行するの力も充分であるらしいが、然し容易に實行さるべくもない。或は到底實行の出来ぬのであると斷言して居るものもあるけれども皆其希望を捨てないのである。猶太人の事業に當つて最も現金的のものであつて、必ず利益の確實であるのを見て、始めて力を致すと云ふ風で、空想に動かさるゝ様などはないところか、何時も猶太再

興と云ふことを思ふて居るのは面白い。昔から猶太人は一種の希望を抱く癖がある。何時代にか救世主が出て猶太をして世界を支配せしむると云ふ様なことを信じて居る。また何度も救世主が出らうであつた、が、遂に出なかつた。基督教で救世主と見なす所のものは此方で救世主でないのである。何千年と希望を講いて居つて其れが達せられぬにも係らず、尙之れを捨てず、今も地上に天國を造らむと考へつゝあるのも一の奇なる現象である。

地勢に似たる所を發見して、うこで理想通りの都會を造らうとした、まるで他と交通がないのに遂に其處に町を造つた、殿堂は古代の式に依つて普通の會堂と全く形が違つて居る、自由に理想を遂行するつもりであつたが、鐵道が出来、交通が頻繁になつて來ると、他の各州との關係も免かれな中央政府では經典の如何を問はぬとしても一夫多妻と云ふを許すとは出来ぬとの事であつたが、此の宗徒は此れに屈せず、一夫多妻は我が信條である、之れを禁ずるのは信仰自由を禁ずるのであると云つて、あくまで争つた、其事から多くの女が獄に投せられた、如何なることがあつても従はぬと云ふのであつたが、其長老の重なるものが相寄つて神に祈つて、自今一夫多妻にするに及ばぬと云ふ天よりの訓示を得てそれで平穩になつた。モロモン宗徒は此の一條では負けたが、其他總てを信仰通りにして大いに事業を進めて居る。地形は實にエルサレ

ムに似て居つて、鹽湖は即ち死海である、如何にも善く似て居る。市中に電車多くして、凡て繁盛に越ぐ勢ひがある。もともと全く無一物で移つて來て、此れ丈けの家を建て町を建て、兎も角も大本山を造り得たと云ふのも一の奇なる現象である。此等は今思ひ當つた所を擧げたまで、ある、固より此の外別に七奇事を擧げるとも出来ぬではないが以上の七事は先づ奇事たるを失はぬとして良からう(宗教界)

● 讀 經 眼

日本大道社長 川合清九

始めて佛教研究に志す者は、何人も先づ其の法門の廣大無邊なるに一驚し何處から手を下さんかと思ひ惑ふ事である、抑も佛經は釋尊一代四十九年間の御說法を其の滅後に弟子達が筆記編纂したもので之を支那に翻譯して卷數凡そ五千五百卷もあり、一日十時間宛、斷問なく素讀的に讀み下すも

(7)にはモルモン宗徒の現實事業である。猶太人の富あり力あつて而して少しも其再興を能くし得ぬのに、モルモン教徒は殆んど彼等の爲し得ざる所を有して居る。新たな經典に依り、一夫多妻を善しとすると云ふ丈けでも所在の基督教徒に蛇蝎視されて有らぬる迫害を受けたのであるが、其れに屈せず宗徒相率ゐて煩累の及ばざる地に住まんとし、ロツキー山の中にエルサレムの

交際する様になつて、外から君主が見舞ひに来る、それに對して答禮しやうとして出かける、通り過ぐる所の足跡は皆領地と云ふことになる、これは六ヶ敷の事だと云ふので、答禮が出来ぬ次第である。先帝の時埃國皇帝が見舞ひに來られて、其答禮に就て評議があつた、と一しても帝の足の踏む所は領地であると云ふ教を破る事は出来ぬと云ふことがあつたが、帝は答禮に反對する凡ての議を斥けて、更らに他の意見の出ることを望んだ。後に出たものが云ふには、答禮は尤もな事である、然し古來の教へを破るとは出来ぬ、が、其教は足の踏んだ土とある、靴の上にもう一つ別の靴をはいて御出になつたならば、土を踏まぬことになるので、別段差支はないのであると云ふのであつた。ソコで云ふならば可からうと云ふので答禮することに決まつた。かゝる奇妙な解釋せねばならぬと云ふのも一の奇なる現象である。

約三ヶ年間の日子を費す割合なりと云ふ。況や文々句々一々精密に研究するに至ては一生涯之に懸り通しても、究盡する事は出来まい、加之、此の御經を印度支那で注釋した者が本經の倍もあり、又日本に渡來以後、各宗の祖師方の論作を加ふれば、殆ど數萬を以て數ふべく、海山充滿實に望洋の歡に堪へぬ次第で鈍根劣機の者は、倦み退屈して、途中に彷徨するも無理ならぬ事である。

釋尊が何故に、斯く澤山に六ヶ敷煩はしく面倒に御説きなされたかと云ふに、御經に人身に四百四病あり、人心に入萬四千(又無量無邊)病ありとある、此の無數の心病に適當せしむる爲めに、無數の療法醫藥を御示しなされたものが佛法である、砂糖交りの粉薬一服で直る腹痛位に生癢しい病氣もあれば、身體中しびれるやう劇劑を用ひても尙直り兼ねる苦しい重病もある、膏藥一つで直るやうな小腫物もあれば、ドデ

腹に大穴を穿けて臟腑を抉り出す切開手術の荒療治もある、日露戦争の負傷兵の中には態々二本の腕と二本の脛とを切斷して其れて漸く命を取り留めた者もある。此の如く病氣に千差萬別あるから、治療法にも千差萬別ある、心病療法たる佛法も、亦復た此の如し、心病の大小強弱淺深廣狹に依り對症療法たる教法にも、大小強弱淺深廣狹の千差萬別があるのである。されば御經を讀むに就て心得べき點は、其の説く處淺薄卑近にして、一向に難有も尊くも無く覺ゆる者あらば、其は心病の輕症者に用ひられたる療法と知るべし、又其説く處甚だ高尚幽玄にして、甚深微妙不可思議の感あるものならば、其は心病の重症者に用ひられたる療法と知るべし。又同一の病氣にても小兒と大人、女と男、強壯者と老衰者に依りて、其の藥の盛り加減手當ての厚薄が違ふと云ふ事を心得なくてはならぬ。又其病人には、父母妻子眷屬が有るか、王侯であ

るか、臣僕であるが、富貴者であるか、貧賤者であるか、愚者であるか、賢者であるかと、其の遺傳習慣 教育生活 職業嗜好趣味の果てまでも、一々觀察しなくてはならぬ、釋尊は衆生の機根を能く御觀察なされたの上に、御説法なされたから、少しも無駄は無かつたのである。彼の華嚴の會座にて、成佛得脱の出來なかつた連中は、諸り外科室へ内科患者が來、眼科室へ齒痛患者が往つたやうなもので、譬へば二階から目薬殆ど痛痒相關しなかつたのであるが、其れでも一代四十九年間の御説法で、其れに皆悉く成佛得脱した所以の者は、人々の心病に適當したる治療法が、其時に至りて、恰も善い案配にすつかりと利いたのである。扱釋尊の説法の會座に集りし大衆、常に八萬四千と云ふが、一代四十九年間は、八萬や十萬の數ではない、無量無邊の衆生を濟度なされたのであるから、御自身御一人では、手が間に合はぬ故に、弟

子達を助手に御使ひなさるは無論の事、文殊、普賢、彌勒、觀音、地藏、さては維摩詰など云ふ在家の居士迄も助手に御使ひなされた、其れでも猶難病者に持て餘し給うては、藥師、阿彌陀、大日、大通智勝、毗盧舍那など云ふ無數の諸佛菩薩を他方世界から觀請し備聘し來つて、顧問とも爲し相談役ともなされた、或は某病は某佛が専門で、某症は某菩薩が受持であるから、某々の患者は某佛の方へ往け、某々の病人は某菩薩へ往けと云ふ風に、釋尊が紹介し保證なされて所謂裏書證明狀の如き種類の御經もある、又患者に示しても一向に分けの分からぬ専門の醫師仲間丈の秘傳奧義を説いたやうな種類の御經もある。此の如く觀じ來れば一代の御經何一つとして有り難くない御經は無い、輕症を治療する法は、淺近なればとて、決して無益と云ふわけは無い、又重症を治療する法は、高尚だと云へば云ふもの、病症を癒す點に至ては、何れも

同一である、況や輕い病も捨て、置けば重くなる、重い病も療治次第で輕くなるに於てをや、故に一代の御説法を大觀し來れば決して甲を是とし乙を非とする如き宗派争的陋見は無くなる筈である、所謂相並び行はれて相戻らぬものである。(客觀)に置いて、三千年前に、釋尊が説かれたもので、且つ我が宗祖が布衍した如く此の一經丈が一番有難いもので、餘經は方便手段の末經のみと云ふ風に、固着するものあらば、其れも敢て深く答めもしないが但眼病患者が精琦水を用ひつゝ、揚言して世の中に精琦水程の妙薬は無い、此の薬一つあれば、一切萬病に効能ありと云はば、誰か其の愚を憐みさらむ、古人も依りて文解義者三世佛之儔とも誠め、又

とも警めてある、されば眞に佛經を讀まうと思はば、先づ釋尊を遠い過去の佛と認めず、現在吾が目前に在しつゝ、活潑各地に親しく吾れに説法し給ふと觀じて讀め「如是我聞」の「我」は、現在當處の「我身」なりと觀じて、讀んで見よ。必ず佛の微妙の法音滔々として、吾が耳根に徹し、吾が心に映徹するであらう。更に進んで「如是我聞」の「聞」を、我れに取つて返し「如是我説」と觀じ來れ、釋尊を向ふ(客觀)に置かずに、我れ自ら釋尊となり、法華なら、法華を我れが説くよと念じて讀め、さうすれば、我れ今法華會上に法華を説くのであるが、成程此處に集まれる聽衆に向つては、斯様に説かねばならぬ、此處は斯う、アヌコはアード、チャンと御經が我が心に乗り移り、御經と我れと釋尊と一枚に成つて、眞に讀經三昧に入る事が出来るのである。

一を讀むことを心得なくてはならぬ、一代の御経を綴横無盡に讀み破りても、要は心病を治療する處方書に過ぎぬ、いくら處方書に明達するも、其の藥を呑み其の病を全治させぬ以上は、何の効能利益も無い、終日他の財を數へて半文錢の分なした、法は活物にて文字は死物なり、釋尊も之を御懸念なされて、説法を、月を示すの指に喩へ又四十九年一字不説と云ひ、不立文字教外別傳と云つて、一代の説法を自ら抹殺なされたのである、扱て茲に至つては、人々自己の心地に印せる「無字の經」を讀むより外に道は無い、無字の經如何が讀誦せむ、道元禪師が、

知識は必ず經卷を通利す、通利すと云ふは經卷を國土として、經卷を身心とす、經卷を爲佗の施設とせり、經卷を坐臥經行とせり、經卷を父母とし、經卷を兒孫とせり、經卷を行解とせり、知識の洗面噴茶これ古經なり、いはゆ

る經卷は盡十方界これなり、經卷にあらざる時處なし。
と云はれた、是れ眞に諸經の心眼、辨道の標準である。

東西宗教の大相撲

文學博士 井上圓了

さて今日は東西各國の宗教が打ち寄りして大相撲を興行する時節となれり、是れ得難き時節なれば、願くは其勝敗を一見して、將來の宗教の何に定るやを知らんとを、先づ世界の宗教の種類は、十大教或は數十種に計れども、其今日現存して純然たる宗教の性質を有し、且つ社會に多少の勢力を有するものは六大教あるのみ、左に之を信者の數に應じて其名を列挙すべし。

- 第一 佛 教 信徒五億人
- 第二 耶 蘇 教 信徒三億五千万人
- 第三 回 教 信徒二億人
- 第四 婆羅門教 信徒一億五千万人

第五 猶太教 信徒七百万人

第六 火 教 信徒百万人

信徒の統計は諸説一定せざれば、余は且く二三の統計を對照して、大數を示せるのみ此六大教が皆亞細亞地方に起りしは、實に奇と謂ふべし、蓋し宗教は亞細亞の特産と稱して可ならんか、若し之を宗教の性質によりて分類する時は、二大教となるべし、則ち智力教と意力教なり、佛教、婆羅門教、火教の三種は智力教にして、耶蘇教、回教、猶太教の三種は意力教なり、前者は智力教と名くるは其性質元來理窟道理を本とし哲學思想によりて組織せるものなればなり、而して後者を意力教と名くるは、神の命令法律を基とし、服従實行を本意とするに由る、蓋し斯の如く世界の宗教上に性質の異なるを見るに至りたるは、人種の異同と教理の發達とに關係を有せり、先づ人種の異同とは佛教、婆羅門教、火教の三種は同一の人種、則ちアリアン人種中より起り、其人

種の特性は智力の發達にあり、古代希臘人種の如き、今日歐洲各國人の如き、皆アリアン人種にして、其古來學術思想に富めるは、元來智力性の人種なるに由る、之に反して耶蘇教、回教、猶太教共にセミチツク人種より起り、其人種は意力性にして智力性にあらざるを以て、古來何等の學術も、其人種中より起りたるを聞かず、唯一種の命令的精神を以て活氣否殺氣を人間社會に與ふるを以て其特性とす、回教徒が其教を弘むるに、劍と可蘭とを以てしたるは、其一例と見做して可なり、次に教理の發達とは、佛教も火教も共に、印度の古典毘陀經より轉化したるものにして、毘陀經は婆羅門の本經なれば、佛火兩教とも婆羅門より直接或は間接に變化したるものなり、而して婆羅門教は最も智力性を胚胎せる宗教なれば、之より轉化したる宗教も、亦智力教の宗教を組織するに至れり、佛教は婆羅門諸派の教理に反對して、遙かに其上に超

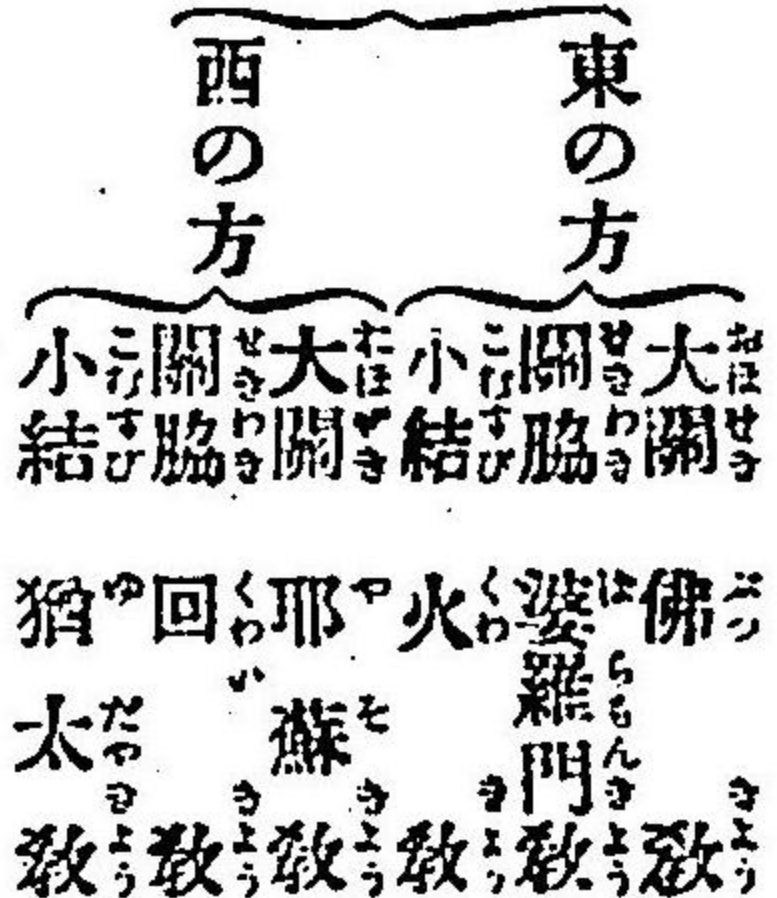
絶せる眞理を開發し來れるものなれども、歴史上の發達に於ては、婆羅門の教理より轉化したるものと云はざるべからず、火教は其年代詳かならずと雖も、之を佛教に比するに稍舊きものなるべし、而して其教理は佛教の如く、婆羅門と直接の關係を有せざるも、矢張毘陀思想の方向を轉じたるものなるべし、故に其性質又智力を帶ぶるに至れり、之に反して耶蘇教及回教は、其源猶太教より起り、耶蘇教は猶太教の嫡子、回教は猶太教の庶子なるが如き關係あるも、共に猶太教の一神的命令教の身分變體に外ならず、是れ現今の六大教が、自然に智力意力の二大種に分るに至れる所以なり、今其二大教を年代の前後に應じて、列挙すると左の如し

智力教則ちアリアン人種教

- 佛 教
- 婆羅門教
- 火 教
- 猶太教

意力教則ちセミチツク人種教
回 教
耶 蘇 教
佛 教
婆羅門教
火 教
猶太教

宗 教 取 組 番 附



此の如く東西兩教の取組、自然に定まりたれば、是より第二十世紀の青天白日に當りて、一大勝負を世界の土俵の上に決するに至るべし、勝負の數は就れに歸するや、今より確定し難しと雖も、雙方の事情を比較對照するに於ては、稍々判知するを得べし若し信徒の數を以て較すれば東の方、西の

方より多きと一億人なり

佛 教 五 億

東 婆 羅 門 教 一 億 五 千 總 計 六 億 五 千 百 萬

火 教 百 萬

耶 蘇 教 三 億 五 千

西 回 教 二 億 總 計 五 億 五 千 七 百 萬

猶 太 教 七 百 萬

此の數によりて勝負を判すれば、勝利は東の方に歸せざるべからず、然るに佛敎等は全く亞細亞の微弱なる國に信徒を有し、耶蘇敎等は全く西洋の富強の國に信徒を有するを以て、其勢ひ西の方却て勝算を有せざるべからず、然るに更に第二世紀の天象を觀測するに社會は益々智力道理の世界となるは必然の勢なれば、宗教も亦智力道理の宗教にあらずんば、實際に生存すると難きに至るべし、果して然らば世界の機運は智力敎の爲めに、其道を啓きつゝありと謂ふべし、機運は天なり、人力の動かすべきにあらず、故に余は勝算の七分は、智力敎にありと信ず、佛敎に志あるもの一杯を

揚げて、其前途を祝さざるを得んや。

● 生活の趣味

加藤 咄 堂 述

生活の趣味と云ふ題で話をいたします此人間のくらし、生活と云ふのはくらしでありませうが、吾々が日常暮して居りますことを、楽しみがあつて吾々が暮して居るか或は苦しみで毎日々を送つて居るか之を一つ考へて見なければならぬ。若し苦しみを以て送つて居るものであれば、さうかして此苦しみを通れる工風を考へて見なければならぬと思ふ。吾々が日常此世の中を渡つて居りますのは、果してさう云ふ意味の生活をして居るのであるらう、苦しいと思つて世の中を渡つて居るか、楽しいと思つて世の中を渡つて居るか、抑々如何なる考を以て吾々が生れてから、死ぬるまでの間、營々として働いて居るのでございませう。斯う考へて見ますと、苦しいとも

楽しいとも何とも思はずして世の中を送つて居る連中が一番多いのである。之を無意味の生活と名付ける、意義のない生活。さうして暮して居るか譯が分らぬ。何の爲に働いて居るか、唯働かぬやア喰へぬから働くと云ふ。何故喰ふか、喰はなければ死ぬからと云ふ。それなら喰へば死ななくとも濟むかと云ふと矢張り死ぬ、何の爲に働いて居る。考へずに居ると分つたやうな顔をして居る。襟胸に手を置いて考へて見ると働いても死ぬ、働かなくても死ぬ、喰つても死ぬ、喰はなくても死ぬ、何の爲に吾々日々汗を流して働いて居るのか殆ど分らない。分らないならばさうだつて宜いが、分らない此人生に於きまして、自分の思ふ通りに仕事が出来たいと云ふ考から、人をも押除けて、所謂優勝劣敗、弱肉強食、權利ちや義務ちや、裁判ちや警察ちやと騒ぎ廻つて、左なきたに苦しい人生をば益々苦しめて、さうして何の爲にやつて居るか譯

が分らぬ。

諸君、是が最も多くの人の生活の方向でございませう、我が我がと云つて働いて居る、我見我慢を振立て、働いて居るが、其の働く目的は何かと云ふならば、一日だけでも安樂に暮したい、一日たりとも長生をしたいと云ふけれ共、樂あれば苦しみがある、苦あれば悲みがある、生れると云ふことがあれば死ぬると云ふことがある。思ふに任せぬ浮世に何を苦んで騒ぎ居る、何を樂しんで迷ふて居るのである。さて考へて見ると吾々のやつて居ることは實に無意義なる生活、虚妄なる生活、虚偽りの譯の分らぬ生活を吾々は致して居るのである。諸君は分つた生活をなすつて居らつしやるかも知れぬけれども、能く考へて御覽なさい、吾々のやつて居る多くは實に無意義の生活、虚妄の生活何の爲に吾々は働かばならぬのか、何の爲に喰つて行かにやならぬのか、何の爲に權利を擴張せなければならぬのか、何の爲に義務を履行せなければ

ならぬのか、何の爲に義務を履行せなければならぬのか、うんなことは分らぬが唯やつて居る。うこで唯やつて居ると云ふ中にも二通りの意味がある、さう云ふ譯で唯さうやつて居るかど云ふと、さうやらなければ世の中の人に悪く言はれるから、止むを得ずやつて居ると云ふ連中がある。斯うなると大分人間の生活が道徳的になつて来る。自分の慾から考へて見ると、人を押除けても探倒しても自分のしたい事をしたければ共、さうする譯にいかないのは、社會的制裁と云ふものがあるからである。世の中の人に悪く言はれる、悪く言はれるのは餘り好くない、成べく人に好く言はりたい、好く言はれたいから自分の心ではいやであるけれ共、先づ道徳を守つてやらう、善い事をして行かふと云ふのが、世の中の多くの人の先づ道徳を守つて居る第一の動機である。是が今大宮先生の御話になつた他律的の生活、人に悪く言はれるのが辛いからや

つて居る。人によく言はれたいから道徳的事をやつて居る、本當の心から言へば撲り倒してやりたいたが、こゝを辛抱して居ると已れのことを求めて呉れるだらう、うれで道徳を守る、是れ他律的に道徳を守つて居る、嫌だけれ共守つて居る、今西洋で道徳の行はれる第一の原因はと云ふと、矢張り此社會的制裁、他律心。若も悪いことをすれば紳士らしい行をしないものである、セントルマンとして爲す可らざることでありと言はれるのが辛いから、厭々ながらでも道徳を守つて居ると云ふのは他律的。うれはまた本當の道徳的生活とは言へぬ、もう一步進みました生活が是が眞の道徳的生活。然らば眞の道徳的生活と云はれるのはどんなのであるかと云ふと、我れがと云ふて踏倒した所が、此世の中と云ふものは共同の生活である、互に持ちつ持たれつして此社會と云ふものを爲して居る、社會は共同生活であつて我れ其社會の一人と生

れたる以上は、世の中の爲め人の爲めに働いて行くのが人の道であるから、世の中の爲め人の爲に働かねばならぬと考へてやつて行く生活を名けて之を道義的生活、道義的生活と云ふ。

此道義的生活は面白味のある生活と云ふことが出来ませうか、面白味の無い生活と云ふことが出来るであらうか、世の道徳家先生は、道徳を守つてやると云ふことは面白い、社会は共同生活であるから、世の中の爲め人の爲を計つて、さうして善い行をして行くこと云ふことは面白味があると言はれるかも知れませぬが人間の心のドン底を漚して出して、さうして考へて見るならば、道徳を守つて居る人でもです、それは他律的に人によく言はれよう、悪く言はれたくないこと云ふ根性でなく、自律的に、是は爲さなければならぬことであるからと思つてして居る、爲なければならぬことであるからと思つてすることは楽しいことである

共朝起きねばならぬから止むを得ず起きると云ふのは是は道義的生活、寝て居ると云ふ事には、起きねばならぬ。人に約束をして守ることは辛いけれど、守ると云ふことが道徳であるから、いやだけれ共守らねばならぬ、是は道義的生活、諸君、毎日朝寝をしつた人が、朝起きる時に喜んで起きませうか。喜んで起きなければ、起きにやならぬから起きる、仕方がないから起きる、斯う思つて居る。けれ共若し今日は休みで芝居を見に行かう、或は遊山に行かう、物見遊山に行くと云ふ日になると其日はどんな朝起きさせます、どんな朝起きさせます。(拍手起る)何時も學校へ行つたり商賣をする折に起きるはいやだが、今日は芝居を見に行くことが出来る、遊山に行くことが出来ること云ふ折には、もう三時くらいが開いて寝られない。(拍手起る)何でありませう、楽しんで朝起きられる。吾々が若し芝居を見に行く折、或は遊山に行く

るかいやなことであるか、せうでせう。道徳家先生は楽しいことのような顔をして居る、實際人の心の奥を考へて御覽なさい、道徳を守つてやるのはいやだ、いやだけれ共道徳は人間の守るべきものだから、守らなければ成らぬと思つてやつて居る。せうでせう、人間たるの義務を重んじてやつて居る、義務を重んずればもう亂暴な者。道義的生活と云ふものは義務を重んじて、人の人たる道を盡すと云ふことは吾々の務であるから、いやであるけれど共やつて行く、人に慈悲をかけること云ふことは餘り嬉しい事ぢやない、成べくならば自分の方へ深山取つて、人には少なくやりたければ共、それは道徳ぢやない、道徳では人に多く與へても自分の方は少なくしなければならぬから、辛ければ共道徳を守つてやらなければならぬ。是が道義的生活、一名義務的生活。義務的生活、随分立派な覺悟であります、我れ道の爲に道を行ふ、自分の命

折に、朝自然に早く起きられるやうに日常の折に早く起きられたらばせうだ、忠義をする、孝行をするのはいやだけれ共、義務であるからすると云ふのぢやない、實に芝居を見に行く折のやうに、物見遊山に行く折のやうに、忠義孝行、總ての人の世の行ひが楽しく面白く、愉快にやる事が出来るならば、之を名けて宗教的生活、趣味ある生活と云ふのであります。(拍手起る)さうならなければ本物ぢやない、いやだけれどもやる、人が見て居るからやる、見て居らなければやらぬと云ふのでは、本當の宗教的生活、趣味ある生活とは言はれない。内心から自然に面白くなつて、歡喜勇躍、何事をするにも實に面白い、面白味を持つて云ふ、此面白味とは何ぞや、此趣味と云ふことはどう云ふことでありますかと云ふと、此趣味と云ふことは美です美しい、あの美と云ふことに就て人間が享ける所の心の状態、之を趣味と名ける分り易く

を捨て、も人を助ける、それが面白いか、面白くないけれ共人の務であるからやらねばならぬ。大抵の生活は斯うであるのであります。諸君が果して道徳を行ふことは面白く思つて行つて居るか、苦しく思つて行つて居るかと云へば、苦しい、いやだけれ共是は人の爲さなければならぬ道であるからすると云ふ是が道義的生活。

私の言ふ趣味のある生活、面白味のある生活と云ふのはろんな義務の生活ではございませぬ、いやであるけれど共すると云ふのぢやない。せんなのである、面白くして楽しんで居る、總ての吾々が道徳を行ふ此一舉手一投足、手を舉げ足を舉げる其事が實に面白くてやる。世の中のため人の爲にすることが、いやだけれどもやるんぢやない。それをやるのが非常に面白くなつてやると云ふのはどう云ふことだ。諸君、朝起きをするのですな、朝起きすると云ふことは有りがたいものぢやない、いやだ、いやだけれ

面白味と云つても宜しうございませぬ、美と云ふこと、此美と云ふことは美學の上に於て種々の議論がございませうけれど、姑く美と云ふものを二つに分けることが出来る。美を二つに分けると、一つをサブタイムと云ひ一つをビュートイと云ふ。サブタイムとビュートイと二つある。諸君が同じ景色を見せして、ア、美しい景色だと云ふのに自然二通りある。どう云ふのが二通りあるかと云ふと、一つは丁度今頃に山へ登つて見ます、秋の山はもう木が枯れて仕舞つて、岩が兀立して居る、千仞萬丈壁立する所の岩、其岩の所へ瀧が掛つて、殿をも碎け落ちなん心して

空に轟く山の瀧つせ

と云ふやうに、ズーツと瀧の落ちて居るのを見てア、愉快であると思ふ、實に面白く思ふ、是も美でありませぬが、又山路来て何やら床し葦草

行くれて山路を歩ませする折、春の末で

さいませう、野に一本の華の花が美しく咲いて居るのを見、あゝ美しいと思ふ、うれも美でありませう。此の後に見ました美を名けてビューライと云ふ、前に見ました美を名けてサブライムと云ふ、之を翻譯して一を壯美、壯なる美と云ふ、一を名けて優美、優しい美と云ふ、斯う二つある。優美と壯美。人の競争をして居る有様を話で聞き交しても、丸は霞と飛びしきる、砲煙弾雨の中に手柄を立てた、あゝ愉快だと云ふ是は即ち壯美です、サブライムである。年は二八がにくからぬ、花の顔ばせ霞の眉、立ては芍薬坐れば牡丹と云ふやうな美人が愛へに沈んで居る有様を見て、あゝ美しいと云ふのは優美である、美に二つある。さうでせう、人間の美にも優美と壯美とあるが、自然の美にも優美と壯美とあります。優美と云ふのは即ち實に美しい状態でありませう。壯美と云ふのは壯烈なる状態である若し人間に喩へて言ふならば男がです、男

の非常に美しき所は、サブライム壯美である、女の最も美しき所は優美である、此優美若くは壯美を心に受けませう折に趣味と云ふものを感ずる。そこで私はこんな美の話を話をするのではありませぬが、さて此優美です、優美と云ふことの最も善々の精神、心の中の最も優美なるものは何でありませう心の中で最も優美である、麗はしいものは何であるかと云へば、私は之を稱して同情と云ふ、シンパシー、思ひやりであります。思ひやりの心、人が互に思ひやり合ふと云ふ事程、私は人間の心に最も美しいものは無いと思ふ、若し人が我れが〜と云ふ我見を踏破つて仕舞つた、互に思ひやる心を以て仕事をして行かざるならば、何時でも春風胎動たるがき優美の景況を見ることが出来る。此美しい優美の状態、此優美の状態の邪魔になるのは何かと云ふと我れが〜と云ふ我見であります。一切吾々の此面白い趣味ある所の生活を面白く

くするのは何であるかと云ふと、我れが〜と云ふ我見、一切の悪は我に依つて起る吾々が我見と云ふものを踏破つて仕舞ひ、我れも彼れも同じものであると斯う思ひましたらどうでありませう。更に分り易く云ふならば、己れの躰を愛するが如く人を愛することが出来る、自分の躰を可愛がるやうに人を可愛がる事が出来る、さうなれば我れと云ふ考は無いのでありますから、我が躰を思ふやうに人を思ふことが出来る又人を責めるやうに—あの人は斯う云ふことをした、いけない、いけないと人を責めるやうに自分の心を責めることが、出来ませう。今の世の中の人、吾々互がやつて居ることは逆でありませう、己れを愛する如く人を愛することが、出来ないのである、又人を責める如く己れを責めることが出来ませう。一認めて行かざるから、我れが〜と云ふ根性が先に立つ、己れが〜と云ふ根性を打破つて

仕舞へば、茲に同情の面白味が起る。人間の世の中の争ひの起る原は何かと云へば、此我れが〜と云ふ根性、我れは善いがね前が悪い、或る處に斯う云ふ話がある、昔話に、夫婦喧嘩をする家がありました、隣の家は七人暮でありませう、けれども喧嘩をせぬ、隣りは二人暮しだけれども喧嘩ばかりして居る、毎日々々飯を三遍喰ふけれ共、喧嘩は四遍づゝしなれば寝られぬ、片方は七人暮しだけれ共少しも喧嘩せぬ。さうして毎日其夫婦喧嘩を七人暮しの家の人々が止めに行つた。うで或時、私の處では毎日喧嘩をするのに、よくあなたは怒りずに止めに來てくれる。何故私の家ではこんなに喧嘩をするのでございませうと云ふて問ふた。さうすると其七人暮しの家の人と言ふには、我れはね前の家は善い人許り寄つて居るから喧嘩をする私の家は悪い人間許り寄つて居るから喧嘩をしない。それは可笑しい、さう云ふ譯でございませう

マア考へて見なさい、私の家では何かいさかひが起る、争ひが起りさうになると、親子の間ならば是は親父さんが悪いのぢやない、私が悪いのであると云ふ、又親の方はいやれ前が悪いのぢやない、私が悪かつたのだと斯う云ふ、夫婦ならばイヤ亭主が悪いのではない、私が悪いのだと妻君が言ふ妻君がさう云ふかと思ふといやれ前が悪いのぢやない、我れが悪い、兄が弟に對してれ前が悪いのではない、己れが悪い、ナニ兄さんが悪いのではない、私が悪い、皆が悪い〜となつて仕舞ふから、そこで喧嘩が起らない、れ前の處はどうだ、れ前の處は善い人ばかり寄つて居る、私は善いけれ共れ前が悪い、私は善いけれ共貴方が悪い、そこで喧嘩が起る。(拍手起る)此の私は善いけれどもあなたが悪いと云ふのは何、我見、此の我と云ふものが總ての争ひの本になる。

とに就て、面白き話の語がある。それは落語やら或は佛話に出て居る話でありませう、是は大抵通常よく世間で言ふて居りますこと、佛教から出で居ることが多いです。例へば普請と云ふ字などは、普く請ふと書いて普請。普請と云ふのはどう云ふことかと云ふと、詰りて寺を建てませう折にうらから中から普く金を集めて來てれ寺を建てるから、普く請ふと書いて普請。それが遂に誰でも、金を貰はぬで自分で建つても普請と云ふ。或は馬鹿と云ふ字の如きも何から出たと云ふと、是も佛教から出で居る馬鹿と云ふ言葉は天竺の言葉、是は大宮先生の方が詳しい話であります、天竺の言葉でボア、翻譯名抄に莫迦と書いてある、それが本になつて日本で阿呆な人を馬鹿と云ふやうになつたのであります。よく佛教の中から出たことが、世間の通稱語になつて居る。藝者や云ふ言葉も、道具と云ふことも皆さうであります、是は一々言ふ

て居ると日が暮れやすから省いて置きなす
世間の人がよく言ふ松山鏡と云ふは御話、
之は御経から出た。何と云ふに經かと云ふ
と、雜傳論と云ふ御経がある、此雜傳論
經と云ふ御経の中に斯う云ふ語がある、或
處に長者がありまして——金もちがあり
まして、一人の妻君を迎へた、或時妻君に
向つて、藏の中に酒が造つてあるから其酒
を取つて来い。其時分の酒は米で拵へたの
ではありませぬ、木の實で拵へた酒、それ
が藏の中に置に入れてある、それを取來れ
と命じた。うゝで妻君は唯々として諾し、
藏へ入つて壺の中を開けて見ると、其處に
自分と同じやうな、實に嬋妍窈窕たる女が
其中に居りました。是は何んだ、自分の影
が寫つたのであります、酒に自分の影が寫
つたのであります、うれを見て、是は私
が此處へ嫁入をする前に他に妻君を求めて
其妻君を藏の中に隠して置いて私を迎へ、
私に斯う云ふ邪見の思をさすのであると、

其蓋を開き壺を眺めて涙を流して、うれか
ら亭主に向つて、貴方は實に酷い、私の前
に妻君を迎へて、うれを壺の中に隠して置
いて、さうして私に出して来いなど、云ふ
のは無躰であると言つた。亭主はうんな馬
鹿なことがあるものかと云つて、飛んで行
つて其蓋を開けて見ると、立派な男が其處
に一人入つて居る。うゝで大に怒つた、實
に怪しからぬ、ね前は外から男を引摺り込
んで、此藏の中に入れて置いて、さうして
私にさう云ふことを言ふのである、と云つ
て大に怒りました、互に夫婦争ひをして居
る所に、一人の修業者、是は婆羅門の修業
者であります、其修業者が来て、夫婦喧
嘩の聲を聞いて、何故に前方は争ふかと云
ふと、斯う斯う斯うの次第、さうか、已れ
が先づ其壺の中を見てやらうと云つて、其
壺の中を見ると、自分と同じやうな修業者
が一人其處に居る。うゝで其修業者が言ふ
のには、ね前方は修業者を一人此處に隠し

て置いて、已れの學力、已れの修業の力が
どの位あるかと云ふことを験さうと思つて
わざと喧嘩をしたに違ひない、無禮な奴で
あると云つて歸つて仕舞つた。デ喧嘩は依
然として繼續致して居ります。(笑聲起る)
其處へ一道士あり、佛敎の修業者が参りま
して、其いはれを聞いて、是は影である、
唯影を見て争つて居るのであると云ふこと
を考へまして、明然として嘆じて言ふには
あゝ世の中の人々が已れの姿を已れと見て、
互に争ふて居るのは實に斯の如きものであ
る、我れ汝等夫婦の爲に壺の中に入つて居
る人を見せてやらうと云つて、石を取つて
其瓶を割つた。割付けると中から酒が滾々
として流れて、男もなければ女も無かつた
佛は之を噂話として、皆自分不起る我見
我れが我れがと云ふ根性、我れが變つて映
る姿に迷ひに迷ふて居る所を悟らせんが爲
に此御経を作つたのであります
善し惡しのうつる心の水鏡

よく見れば我姿なり

自分の姿に迷ふて居る。(拍手起る)是が諸
君も御承知の話の本になつて居る。其論話
をよく味はつて見ても、吾々が此世を
面白くなく争つて暮すも我れである、其我
れ、我見と云ふものを叩き破つて仕舞へば
どうでありませう、我れも人も同じこと。
人の善を見て譽める折に、自分の心の中に
人の善いのを妬む心が起りませぬか、人の
惡い事を責めた折に、善い心持であるとい
ふやうな氣が起りませぬか、此の人の惡を
責めて善い心持であると思ひ、人の美を聞
いて嫉み妬みの心が起ると云ふのは、實に
此我見と云ふ角が固くなつて居る。此我見
を打破つて仕舞つた時に出る心の働さ、之
を同情、思ひやり、慈悲の心と云ふ。此同情
思ひやり、慈悲の心を以て世の中に對しま
したならば、世の中に何の面白くないこと
がございませう。うきこと辛いことがあつ
ても、自分の氣に入らぬことがあつても、

彼の人はずうであらふと思ひやつて行き、
我心が人に同情をする、思ひやると云ふこ
とは、人間の天より享け得たる所の、本來
有つて居る所の最も美しき心である、何故
之を人間が素より享け得たる所の最も美し
き心であるかと言へば、諸君が芝居を見る
折にさう云ふ感じを起します、義太夫を聞
く折にさう云ふ感じを起す、小説を讀んだ
折にさう云ふ感じを起すか。小説を讀んで
面白くと思ひ、義太夫を聞いて面白くと思
ひ、芝居を見て面白くと思ふのは、面白い
芝居か悲しい芝居か何方だか考へて御覽な
さい。大抵、實に面白い芝居である、面白
い義太夫であると思つて感じて居るのは、
笑うやうなことよりは泣くやうなことが多
い、英國の或詩人が、古來傑作と言はる、
小説は、多く悲哀の小説である、悲しい小
説であると言つた。實際吾々が芝居を見て
面白くと思ふのは泣くことに多い、實に私
は涙が溢れて面白かつた、彼の義太夫は實

に上手だ、本當にね前も泣いたが私も泣い
た、實に面白かつた、泣いて面白くと思ふ
のは可笑しいけれども或人の歌に
泣きもせて泣真似するを見て泣いて
泣かぬ顔する芝居見る人
泣くと見てもない、太丈夫聲を生やして
泣いて居つちや可笑しい、うゝで泣かぬや
うな顔をして實にオ、面白い、何故悲しい
芝居を見て面白いか、是です、ハルトマン
と云ふ美學者が非常に論じまして、吾々が
悲しい芝居を見、悲しい所の小説を讀んで
面白くと思ふのはさう云ふ譯かと云ふと、
其氣の毒なと思ひ、哀れなと思ふ折に、我
れを忘れて向ふのやつて居る者と自分が
ひたりと一緒になる折に、自然人間の心の
奥の其又奥に持つて居る思ひやりの心が現
はれて、茲に言ひ知れざる愉快を感じるの
である。(拍手起る)斯うハルトマンが言つ
て居る。實に慈悲の心と云ふものは、人が
自然の心の中に有つて居る。此思ひやり、

私は人の行為については、全軌向上と向下と二つあるとするので、向上といふのは段々實在に近いで行くのであつて、向下といふのは、段々實在を離れる、……全く實在を離れるといふとはないが、之を漸々遠かるのです。實在を遠かると云ふのは、小我が自分一個の私心のまゝに働いて、理想を段々離れて行くので、即ち悪い行為をするといふのです。向上の方は、段々實在に近いで行くのであるから、これは理想を實現して行くことです。然し理想といふものは、主観的には之を完全に實現するに出来るけれど、客観的には、決して完全に之を實現することが出来ない、例へば阿彌陀であるとか、神であるとか云ふ理想……完全な理想、こう云ふものを考へるとは、主観的には出来るけれども、客観的に我々が實際完全な理想と一つになるといふとは到底出来ません、若しそれが出来るならそれは理想ではない、理想は何處まで行つて

も理想で、無限に我々に實現せられないものでなければならぬので、これが無限の實在であるわけなのです。こう云ふ無限な理想は客観的に人格として存するわけではないのです。なせなれば、人格は已に或る限られたるものでなければなりませんから……ところがロツエなどの議論では、亦ろの無限なのが人格だと云ふのです。人々には有限の人格で、無限の人格を理想とし、之を目的とするのだといふので、耶穌教などの議論は、こういふ説で餘程力を得て居るのですが、私の此等と大に説を異にする所は、人格と云ふとは、有限の上から得た概念で、有限を離れては何の意味もないものだといふとにあるのです。實在を人の行為の軌範として、大我と云ふ名稱を附けた所で、其の大我と小我とは、勿論共通の點がないではない、それは倫理と云ふ點です。實在を倫理的に寫象した時には大我と云ふ、小我も亦同じく倫理的要求を以て居

るのであるから、此の點についていへば、倫理的と云ふ上では二者共通のところがあるとはあるが、然し亦大に異なる點がある、即ち一方は有限で一方は無限である之を混同してはいけません。若しロツエの様に、無限の人格的實在があると云ふならば、一昧それはさういふものであるか、試みに言つて見よと言つたところが、とても言ふとも出来ず、また無限の人格と云ふものは、考ふるとも出来ないのです。私の説は、彌陀の救済といふ様な説と、餘程類似したところがある。それは向上的には我々は念々刻々に邪悪の思想を去りて實在に近づくことが出来る、理想が實現されて行く。煩惱即菩提、生死即涅槃と云ふ様なもので、煩惱の雲を掃つてさへ仕舞へば、其處に直に實在の光が輝くのである。それで我々が理想に向つて一歩々々進めば進むは、自己充足が得らるゝので、即ち我が我の本身に近づけるのであるから自己充

足、即ち悦樂の境に達するわけですが、此の道理を譬喩的に云へば、彌陀の救済と言つてもよい、彌陀は即ち實在であるから……然し彌陀を人格的の實在とすれば、それは最早迷信であります。佛教で言つても真如と云ふのは即ち實在であつて、あれは決して人格的なものではない。實在を人格的に説くと云ふとは或は方便としては……愚民を導く手段として、却て便利などがあるかも知れませんが、然しそれは決して哲學的ではない、……ばかりでなく、大に迷信を増長する根源となる。私は實在を人格的に説くと云ふとは、實在を以て通常の人の様に眼も鼻もある様なものと思ふ迷信を起させる本であると思つて、此の點からも人格的實在の説に反對をします。

對ではありません。絶対は勘定の出来るものではない、一と二との區別の境はない、即ち平等なもので、それが即ち實在です。それであるから實在は唯一と云ふけれども數の上に於て一二と相對的に云ふ意味に於て、唯一と云ふべきものではない。斯ういふ平等なものは、人格的と考へることがとても出来るとでないのです。將來の宗教ですな……私は宗教は倫理と同じだと云ふ説ですが、或る人はこう云ふとを言ふのです。宗教は宗教、倫理は倫理と區別して、之を混同せずに説明をせよといふのですが、此等は私の説を誤解して居るのです、私は倫理と宗教は一つだといふのですから、之を區別するとは出来ません。圓了さんなども、大變こゝを間違へて居る様ですが、つまりみんな道徳と云ふものを非常に淺薄なものに考へて居るのです、何だか道徳といふと、唯外形の禮儀作法か何かの様なものばかりで、深遠な形而上的の

根底を持つて居るものは倫理でない、道徳でないといふ概に言つて仕舞ふ……精神の慰安とか安心立命とかいふ者は、宗教の持ち前で、道徳の關せんどころだといふ様にいひますけれ共精神の慰安を得られない、安心立命の出来ない道徳ならば、それは眞の道徳ではない。眞正の道徳は決してろんな淺薄なものではない。深遠な根本の基礎に立つて居るものでなければ、今後の人の行為を律して行く力がないのです、若しこゝにいふ私のいふ様な道徳であつたならば、宗教に代つて人心を支配する力があるので、最早宗教は此の外にはいらない、こゝに云ふ道徳は即ち將來の宗教といふのです。宗教と云ふと、誰でも人は既成の宗教をすゝめ出す、佛教とか、耶穌教とかいふものどすゝ思ふ、それが間違ひの本です。宗教は何も耶穌教や佛教の様なものばかりではない、また必ずさう云ふものでなければならぬと云ふ理由は少しもありません。佛

教や耶穌教以前の宗教で見ると、即ち自然教と云ふので、此等の宗教は總べて妄誕不稽の迷信が大部分を占めて居つて、道徳的分子と云ふものは、實に僅かに其の附屬となつて現はれて居る。それが耶穌教、佛敎の様な即ち文明敎になると云ふと、迷信の部分が非常に減じて、道徳が宗教の要部を占むる様になつて來て居る。こゝをも一歩進んで、私は迷信的分子をすつかり取つて仕舞つて、道徳即宗教としようといふので、これが私の所謂理想敎です。

爾了さんが「讀賣新聞」に「宗教改革案」と云ふ者を出しましたが、あれは宗教改革案ではありませんが、唯佛敎の制度上の話です。且つ宗教があの様にして、政府の力を借りようと云ふ様になつてはもうだめです。ルールの新敎も、國敎の様になつて、政府の保護を受ける様になつてからは、カトリックと同じ様にだめになつたので。……なんでも宗教は自由競争に任ずるのが一番

よいのです。腐敗するものはどしどし極端まで腐敗して仕舞ふ、潰れるものはどしどし潰れて仕舞つて、そこで始めて肥料の中から麥の芽が出る、油やたる、麥の穂が現はれて來るといふわけなので、ううでなければ宗教上の活氣といふものがない。政權の保護を仰がうといふ様なものは最もつまらんとす。 (新佛敎)

大日本世界敎略義

川面凡兒口演 樂水筆記

第一 人生の目的

個人としても、家庭としても、國家としても、他に秀絶るの人格、家風、國體を期しつゝあるのであります。個人、家庭、國家としては、各自特有の性根を發揮して、世界を發達せしめつゝある者にして、單に其の個人家庭國家ばかりを發達せしめつゝある者でないといふことを知らねばなりません。

七四
智識ばかりで、學問、又は經驗ばかりで或は金銀ばかりで、人格、家風、國體の成立つものではない。

誰か金山銀山書棚を崇拜して、人世經驗の聖者や、俊傑やと、仰ぐ者がありませうか。

人間は生活するばかりが目的でない。人生の目的としては、別にありうる目的を遂行するが爲に生活するので學問經驗財貨等は、生活に必要な條件たるのであります。勿論、忽にするこゝとは出來ません、然れども、學問經驗財貨等を以て、人生經驗の目的なりと誤解してはなりません。

人生としての目的は、自由、平和、幸福を増進せんとするにあり。而して、その自由、平和、幸福とは、秩序ある自由、平和、幸福であります。秩序なくしては、平和も、自由も、幸福もありません。その秩序ある自由、平和、幸福を増進せんとするには、政治、法

律、理財、經濟、數學、理學、化學、生理學、衛生、文學、美術、倫理、道徳、哲學、宗教等、ありとあらゆる經驗なくしては叶はぬものであります。

然れども、人は萬能でなく、一人にて總てを爲し得べきものでない。故に家庭を組織し、國家を組織し、あるゆる團體を組織して、各自専門に研究し、各自特有の性根を發揮しつゝ、人生唯一の目的たる平和自由幸福に向上しつゝあるのであります。

第二 人生最高の目的

人生は複雑なり人間は萬能にあらざる。雖何れの人も、家庭も、國家も、均しく共通に有する所の希望あり、目的あり、是れは外でなく、神に對するの信仰である。

人間としては、人生の由て來る所、天地萬有の由て來る所を尋ねて已まざる者で、その由て來る所の根本とは神であります。世には此の根本を以て、空想とか、精力とか、理性とか、意思とか云ふ者もと迷斷

するものあれば、それは誤解であります。人間は空氣に化し、精力に化し、理性に化し、意志に化するを以て満足するものでない。空氣とか、精力とか、理性とか、意思とかは、人類活動の一部分を抽象して、名稱たる者に過ぎません。ほんの、人間が天地萬有に觀照しつゝ、抽象りたる一部分の名稱である、かゝる一部分の片体片名を目的として満足する人間ではありませぬ。

空氣とか、精力とかを以て根本とせば、人間には空氣以上、精力以上の根本あり、理性とか、意思とか、を以て根本とせば人間には理性、意思以上の根本あり、寧ろ、意思も、精力も、空氣も、理性も、人類活動の一部分でござります。

人類もし、空氣也、精力也、意思也、理性也とすれば、老少男女、賢愚貴賤、均しくこれ空氣なり、精力なり、文明も野蠻も同じく理性なり、動植物均しくこれ精力なり、意思なり、何も相互に相争ふて、家庭

國家世界を経綸し、各自の成格を發顯すの必要なし、親もなく、子もなく、君もなく、民もなく、人畜萬有の分際を區別するの必要もない、自及若しくは入水して死するも、根本の空氣として、千古萬古に傳はるぢや、亦衣食住に狂奔はるの必要はない而も人間は其にて満足し得らるゝ者ではありませぬ。

人間が秩序ある平和自由幸福を希望して止まざるものは、空氣たらんとするものでなく、理性たらんとするでなく、精力又は意思たらんとするでもない、全く神たらんとするのであります。

神は人生宇宙の根本にして、最も完全なる平和自由幸福を發揮したまひつゝあるものであります。人間が平和自由幸福を欲するものは、その實に神たらんとするのであります。神は人間豫想の大極で、いかに圓滿無上を希望する人間でも、神に達すれば満足いたします。神より以上を豫想すること

とは出来ません、是れ神は人生宇宙の根本と云ふことが知らるゝでありませう、人間が、より多き平和自由幸福を希望して已まぬのは神より出てたる身なるが故に、うの神たらんことを期して已まれぬからでありませう、念々其身の進歩を欲するは、人間が其本性本体に立歸りて神たらんとする兆候でありませう。現在にても、未來にても自由平和幸福のより多く獲らるゝのは、神となるにありませう。

去れば、人生最高の目的とは、神となるにあり、人と神との合体同化して、一体となるのにありませう。人間は一步一段、高き石段に昇りて四圍の人々を瞰下してさへ心地の愉快ものである、常に衆人に超へたる識見を胸に懷きて、世に處すれば、更にそれにも優ざる愉快のあるものでありませう。人々常に仁人君子義人烈婦たることを期して、仁人君子義人烈婦となり、賢たり、聖たるを期して、賢者聖者となり、更に神た

るを期して、神たることを得るものとせば人生模範の人として、人の神として、他より、いかに尊敬を拂はるゝでありませう。さりとて、個人としても、家庭としても、國家としても、うの人格家風國体はいかにでありませうか。

第三 神人の合一

神人合一は人生最高の目的で、人が神と感應道交し、人たる資格を進めて、神たる資格になるのでありませう。凡人より仁人君子義人烈婦となり、賢となり聖となり、更に神となるのでありませう。神とは人間向上の標準で、神を標準として人を神に化すので在る、人が神の如くなるのでありませう。神となるとは、獨り未來に於てのみならず、この世からにして神となるのを云ふのでありませう。この神人合一の目的を達するには、生活せねばならず、生活すると共に自由を要します、平和幸福を要します、政治、法律、財政、経済、理學、

化學、生理、衛生、文學、美術、倫理、道徳、哲學、宗教等あらゆる百科の研究と實行とを要します。此等は神人合一の目的を達する肥料であります。故に神に對する信仰は、政治家でも、實業家でも、博士先生でも、其は何人でも、萬有と共に均しくなくてはならぬものでありませう。うれで、何人でも自己を神とし、世界を神の世界とせん爲にこころ、向上進歩しつゝあるのであります。凡愚の人類として安んじ、野蠻の世界として安んずるならば、何も向上進歩する必要はありません。人間が向上進歩しつゝあるのは、神の如き人、神の如き世界たらんとするからであります。

この信仰なくては、眞實の赤誠が全身に燃ゆるものでない、千古萬古を感動せしめ、他に敬虔の念を發せしむることは出来ませぬ。世界開闢以來、種々なる主義目的を主張もし、實行もしたる人あり、家あり、國ありと雖、後世千古萬古の下、滿腹

敬虔の至誠を發し、人類最高の模範標準として崇拜せらるゝものは、必ずや、神人合一を人生最高の目的として、うのあらゆる經綸を茲に集注大成したる「人格」「家庭」「國家」がうれなのであります。

第四 個人家庭國家世界の基礎

一時は特殊の勢「黄金政權等」を以て一代を恣にするにありませう、風前の燈に似たり、黄金政權等の盡くれば、人々悉く散して、亦我用を爲すものなし、是れ人生の目的「最高の目的」を誤りて實行したからである、黄金や政權ばかりでは悪魔である、神となることは出来ませぬ。故に個人家庭國家世界としては、いづれも神に對するの信仰を基礎とせねばなりませぬ、信仰より統一せられたる人格家庭國家は、斷じて動搖ものでない、動搖のは信仰が破るゝからであります。學者宗教者等に、亂行の生ずるのは、信仰が薄らぎ行くからであります、家庭の破るゝも、國家

の亂るゝのも、うの始めに於て、神人合一の信仰と實行とが薄らぐからして、人々已に神でなく、家々、已に神でなく、國々、已に神でなく、悪魔と變じゆくからであります。

人生に神人合一と云ふ信仰がないならば、いかに殺風景でありませう春に花なく、秋に實なきと一様であります。而も春として花あり、秋としては實あり、人間としては信仰あり、以て神の神たる根本造化の稜威が仰がるゝのであります。

且、神と云ふことは、人生宇宙の根本なるが故に、人々直に了解しかねると共に、人生とは左まで關係のないやうに思ふ者尠からねど、若し神と云ふ信仰がないならば、人々は何故に生れ、何故に生活し、何故に死するかを知らず、一に唯だ衣食住と名譽利權とに醉生夢死するばかりで、畢竟はうの生活「光榮ある生活」へ「爲すこと叶はざる者となりませう、人生とは我利々々

的に器械を發明し、金銀を貯蓄し、運搬するの意味ではありませぬ。必ずしも、神に對する信仰神となると、云ふ信仰を基礎とせねば、其人格家庭國體は野蠻となり、決して他を感動せしむる事は出来ませぬ。

第五 人類自然の性行

世には、智識あり學問ある人々にして曰く、我等は自己獨立の精神に富み、自己獨立の事業を爲す、亦神を要せず、人の力を要せず、神を信する如きは、薄志弱行の徒なりと、彼等は自己一人さへ健全なれば足れりと自負する者である、自己一人位の健全を誇りとするならば、熊や、虎は彼等よりも健全であります、憐むべし、彼等は、熊や、虎を氣取りて自負するの白徒である。天地は一体也、萬有は同根也、相互に關聯するもので、一物として孤獨の生活を爲し得るものはありませぬ、されば自己の健全なるを期せば共に以て四圍の健全を期さねばなりませぬ。彼等は何ぞ、家庭を自己

に化し、國家を自己に化し、世界を自己に化し更に宇宙を自己に化してここに、大なる自己としての大健全を誇らぬのちや、例へば家族皆病み、主人獨りらの健全を永く保有することが出来ませうや。彼等こそ却て小なる自己に安する薄志弱行の徒であります。それ唯、自己を健全ならしむるには、四圍を健全にする必要あり、是れらの相互に團結して、家庭を組織し、國家を組織し、その家庭、その國家を健全ならしめんとする次第である、神とは外ではない、個人としての神、家庭としての神、國家としての神、世界としての神、宇宙としての神、更にその神としての根本なる神を云ふのであります。神としての神は、大なる神なり、根本なり、この大なる根本の神に達せんが爲に、少なる神より段々歩々と進行するので、これは是れ人類萬有自然の性体として、發顯しつゝあるのであります。

第六 國民統一の根本

天皇は日本國、日本國は天皇であります。而して亦天皇と臣民とは、一心一体である。これは、その信仰が同一不二で天皇の信仰する神の主体と、臣民の信仰する神の主体とが同一不二であるからであります。信仰が同一なる故、同心なり。國土法律も同一なるが故に同体なり、獨り法律の爲に形体上の臣民たるのみでなく、信仰としても精神上的の臣民である。形体に無上至尊と仰ぐ天皇は精神上にも無上至尊と奉ずる天皇である、天皇としては、形体上に日本民族を代表するのみならず、精神上にも日本民族を代表して居るのであります。大日本國が何時にても、亦、何の争にても、直に舉國一齊の實を發揚することの、出来るのは、全くこの信仰の同心同体なるからであります。健全なる國民統一を舉げんとすれば、君主國でも、共和國でも、上下同心同体の信仰でなくてははいけません。同心同体の信仰は、建國の大基礎であります。

大日本國は、日露戦役以來、一躍世界に雄視し、列國は其威力を驚歎しつゝ、俄然強國視するに至り、奧國の氣象は、今や乾坤を推倒せんとす。是れ偶然の出來事ではなく三千年餘の昔より醗酵しつゝ、今日絶大の光輝を發したものであります。その由て來る原因は、神人合一の信仰で開闢以來上下共に、同一信仰の下に同心同体たりつゝあるからであります。其は健全なる國民統一と云ふことは、同心同体の信仰より成立つもので、上下の信仰が一致せぬば、健全なる國民統一と云ふことは行はれず、舉國一致の實も發揚することは出来ません。英國が國民統一するに就て「エドワード家の爲に起つ」と云ふも、英國國民の總ては「エドワード家の爲に起つ」と云ふも、英國國民の總ては「大英國の爲に起つ」と云へば起ちませぬ。「大英國の爲に起つ」と云へば殖民地に至る迄、總ての國民が起ちます。その「エドワード家の爲に起たない」は國民と皇帝とが信仰を異にするからで、新教舊教の信仰が異なるからである。大英國の

爲に起つのは、同一の領土に住し、同一の法律の保護を受け、同一にその領土を擁護するの權利義務があるからである。それで英國國民は皇帝と英國とを別物に視て居ります。それで、國と國との争に於ては、大英國の爲に起つとするも、信仰の争としたらば、必ずしも大英國の爲にも起たないばかりでなく、却て戈を倒にして、大英國にも反抗するである。國旗に反抗しても、教旗を擁護するであります。教旗の前には斷然國家も皇帝も認めない。それで、其争の如何に依り英國では何時でも、健全なる國民統一と云ふことは行れない。これは英國のみでなく、佛獨露でも、合衆國でも、波斯、支那、印度でも、世界列國悉くこれなのであります。

第七 教權政權の分立、及、其一致

世界茫茫、國を建つる者多しと雖、信仰ある民族は國家なく、猶太教基督教、回教、教等の如きうれである。國家ある民族は信仰なし、歐米各國の如きうれである。されば信仰、民族は國家を有せんとし、國家は信仰を迎へんとす、英、佛、獨、の如きうれである。彼等は國家あるも信仰なきが爲めに、基督教、回教を迎へて信仰し、遂に以て教權政權の對立を生じ、兩々相對して争はねばならぬに至りました。建國の根本が政權と教權とに分裂しあるが爲めである。獨り我が日本國は古來より信仰あり、國家あり、その國家と信仰とは、亦、一致して分裂せず、是れ常に國民統一の健全なる所以であります。

第八 日本民族の特色本領

人生宇宙には根本あり、根本としては動くべきものでない、動くものは根本とするに足りません。日本民族の祖先は、能くこ

の間の消息を体察得て之を人世に應用し、「天壤無窮の皇基」を建設し、國民一切の信仰行動をうれより割出しつゝあります。亦根本としては、孤立すべきものでない、萬有を吞吐攝理すべきものである、故に日本民族は、世界のあらゆるものを吸収もし彈撥もしつゝ、攝理つゝあるのであります。儒教を吸収するも、湯武革命の説は彈撥し以て克く儒教の仁義忠孝を我に同化して全からしめました。佛教を吸収するも、小乗寂滅の教は彈撥し、遂に克くの大乗教理を我に同化して全からしめました。湯武革命の説、小乗寂滅の教を彈撥したのは、建國の大經たる天壤無窮の皇基と衝突するからであり矣。儒教の忠孝が其美を全ふし、佛教の大乗教理が發達したのは、日本民族に宇宙の根本たる、天御中主大神、人生の根本たる天壤無窮の皇基と云ふ大信仰と大實行とがあるからであります。この大信仰が發顯して、仁義忠孝を同化攝理し、大

乗教理を同化整理したのである。日本民族にこの大信仰がなかつたならば、仁義忠孝も發達せず、大乘教理も發達せず、支那印度と共に、儒教も佛敎も名ありて實なきものとなりつゝ、あるのでありませう。後世子孫たる我等大和民族は、先人の遺志を祖述して世界のあらゆる哲學宗教科學等を吸收し、彈劾し、遂には以て悉く我に同化し攝理し、支那印度に模範たりしが如く、世界列國に模範を示さねばなりません。是れ大日本世界敎の興り来る所以の一事由であり、徒に彼等の眞似を爲し、彼等の啓後を追ひ、日本民族の本領を失ふてはなりません。先人の如く他の模範となり、世界列國を感化攝理するの大覺悟大實行がなくてはなりません。

第九 人生宇宙の根本

宇宙の根本は、人生の根本に影響し、人生の根本は、人生百般の行動に影響すれば先づ以て宇宙の根本を定めねばなりません。

大罪あり穢もする。ろこを悔い改め、穢ぎて穢ひて神に謝すれば、また神となるのである罪も穢も我より招き、我より救ふ也穢と知るは神に遠かれれば也、救ふと知るは神に同化すれば也。神より云へば神より我を罰し我を救ひ給ふなり。いづれにしても人間としては、神を根本標準として之に同化するを期せねばならぬのであり矣。されば亦大神の萬有を吐き且つ呑み更に攝理するが如く、自己成格には大主体としての威嚴を有し而もその宏懷雅量は、大神の萬有を同化するが如く、儒教も同化し、佛敎も同化し、世界一切の文物制度を同化して拒むことなし、自由民権も同化し、立憲政体も同化し、理學化學より一切の文物制度を同化し、日本民族としては古今共に、狹隘固陋の頑態なきと共に、亦以て自己大成体たるの威嚴を失墜したることなし、常に以て人生宇宙の美を全ふするに餘念なき有様であります。必ずしも、他を拒まず、寧ろ

然るに、支那は宇宙の根本を解釋して、「天」若しくは「上帝」と名け、印度は「ドヤウス」又は「梵天」「佛陀」と名け、巴比倫は「ベルス」と名け猶太は「エホバ」と名け、亞刺比亞は「上帝」、斯波は「ゴダ」、希臘は「ゼウス」と名けたると共に、其の名くる所の者を以て、唯一無上の救世主と奉じ、他は悉く邪神と爲し、迷信と爲しつゝありませ、是れ必竟、昔は山河隔れて他あるを知らず、獨り己のみを信じたる僻見にして名稱こゝろ異なれ、其實は同一なる者であります。各自の民族が、各自に人生宇宙の根本を自覺して、ろの根本に各自の言語を以て名稱したるに過ぎず、其實は同一也、同一の宇宙也、同一の根本でこゝろありませ、只ろの解釋實行に高卑深淺あるに過ぎませぬ。

一方が我名稱の神ならば、他は外道也、惡魔也と云ふならば、他は亦、反對して、汝の神は外道也、惡魔也と云ふであります。

進んでも探りて我に化しつゝあります。故に支那土耳其の如く頑僻固陋ならず。さればとて、自己主体たるの威嚴をば失はず、故に歐米各國の如く、輕舉狼狽して他に信仰を求め、全然我の生命を托すると共に、基督敎の如き狹量なる信仰に陥るには至らざりき。いかに光榮ある日本民族よ、汝の祖先は神人合一の信仰と實行とを以て、上下共に現神として、人生宇宙の美を全ふし人類最高の模範者たる大責任を垂れつゝありき。後世子孫たる者は、ろの遺傳をより多く煥發せねばなりません、神の人たる實を顯はし、神の國たる實を顯はし、世界列國をして神たらしめねばなりません。

第十 日本民族の責任

然るに維新以來の劇變と共に、一部の臣民中には、全然自己成格と云ふことを忘れ他の成格のみに酔ひ、徒に歐米各國の學說教義に迷ひ、民族の何物たる、人類の何物たる、國家の何物たる、世界の何物たる、うのされば共に惡魔外道となりませす。一方が我神は眞なりと云へば、一方も亦我が神ころ眞なれと云ひませう。さすれば共に眞の神となりませす。交通なき昔なればかゝる狹隘固陋の見あるも致方なし、而も、已に既に相互に交通して一世界たるの今日は、今日相應の信仰解釋實行がなくてはなりません。最早神の眞偽を争ふの必要なく、唯ろの信仰解釋實行を比較研究して、其の優劣するを期すべきであります。

我等日本民族は、いかに光榮ある民族よ昔の昔よりして、宇宙の根本を解釋し、之を尊びて、天御中主大神と名け奉りこの大神の活動の体たる天地萬有をば、八百萬神と尊稱すると共に、人間をも、直にろの八百萬神の一に加へ、生れながらの神としてある、本來汚れたる身でなく、迷ふる身でなし、罪の体でもなく、三毒五欲の體でもない、生れながらの神である、我々の神たるの身を忘れて曲事を爲さば、ろ

更に宇宙の何物たるをば辨せず、一に只新を追ひ、奇を街ひつゝ、個人家庭國家世界を賊ひつゝあるものがあります。是は獨り彼等の罪でなく救へざる者の罪でもありませす、極端なる自由民権説は已に過ぎ去りましたが、今は亦衣裳を變じて、戀愛神聖主義となりては親疎るべきを唱導し、自己主義となりては黄金崇拜を歌ひ、特に基督敎の如きは、宗義としても、學說としても固陋にして、漸々世界の識者に忘れられつゝあるのみならず、亦以て日本民族の信仰とするには足りませぬ。日本民族の信仰は、彼を同化するに足るも、彼としては餘りに狹隘にして、我に化するの智見は、程遠きものであります。而も我國前途の發達を妨害せんとする者、多くは基督敎に投じて企畫する者少なしとせず、勸語を講議し、兵役を拒み、軍紀を亂り、國民統一を破らんとするが如き、常に彼等の教徒に出るは

實に感むべき次第であります、抑も是れ基督教信仰の狭隘なるからしてこの弊に陥るのでありませう。日本民族は獨り基督教を排する者にあらず、只今の教義の我國体に合し世界に通ずる者たれば、如何なる教義にても寛容するのである。彼等は今の名に迷はず、今の實を取り、エホバの神を天御中主大神と信じ基督教徒、更に基督教以前の預言者をも共に以て八百萬神とせよ、さすれば、日本民族は、今の名によりて其實を没せざるなり。

日本民族は、基督は勿論、世界列國の預言者を悉く宇宙根本神の發顯体として、八百萬神として、敬意を表し、其徳を賛美するの宏懷雅量あるものであります。獨り基督教は如何、我國の大小神社を拜するの勇氣にあらざるや。それは嫉妬の神の怒に觸れ、油の如き地獄に陥ると云ふ狭隘なる信仰あるからである。エホバの神は、獨り基督のみを唯一の子とし、均しく人生宇宙に

貢獻したる世界列國の神仙聖賢をば、迷信者とする乎、さりとては餘りに其信條狭隘なり、固陋なり。未だ以て人生宇宙の根本神を解し得ざる三千年以前の信仰なり、斷じて日本民族の大信仰に同化するに足らざると共に、世界に於ける將來の信仰とするに足らざるものである。猶太一國が神の國でなく、基督一人が神の子でもない、世界列國悉く神の國也、一切人類總て神の子であります。日本民族たる者は世界に率先して先づ彼等を同化すると共に彼教に走る者を警戒して教へ且救ふ所なくてはなりません

今日の本に於いて、救へず救はずありつらば、貧者、病者、失意者を始め一波一波と波及し、罪なき青年男女までを誤らしむるであります。漸々彼の信仰に化し去らば、大日本民族の禍根であります。世界人類の大禍根であります。大日本民族として申せば、實に由々敷大事なると共に、人類として見渡せば、亦以て世界の大事であります

ます、世界人類をしてかゝる狭隘なる信仰に永く墮落せしむるには忍びません、大日本民族は先づ同胞を救ひ、人類を救ふの大責任があるのであります。他國あるを知らざりし昔の信仰としては基督教も可なるべきも、世界一國たるの今日は、此の如き狭隘なる信仰を寛容することは斷じて出来ません。

第十一 公開 狀

もし、基督教を主として云へば、彼等は彼等の信仰を以て、唯一無上の者と確信して居るものでありますれば、今の信仰を以て、大日本民族を救はんとし、はるく海洋萬里を渡り來りて、貧者を助け、病者を慰り失意者煩悶者を救ひつゝあるのであります。ブウス大將の如きは、老軀を提げて、この度不完全なる日本人の思想信仰を救はんと廣言して來り、今の心術、今の行為は、何ぞ夫れ真切なる、一見以て感謝すべく決して邪道也兇賊也として痛罵す

べき者ではありません。各自其信仰する所に向て實行すること、感る大慶の至りに有之候。

然れども、我等大日本民族より言へば、彼等をして日本民族をかくまでに誤解せしめたる罪を反省せねばなりません、日本民族は、精神的信仰も、肉体的行動も、世界に比較して左程不健全なものではない、開關以來、心体不二一致の全身の大信仰、大實行ありあらゆる宗教哲學科學に超絶する大信仰、大實行があります、而も今の信仰實行は、總ての哲學科學宗義を拒む者でなく、唯、今の大日本的に同化せざる限りは世界一般に通せざる限りは其存在を許さぬばかりである、故に彼等基督教徒に向ては、左の如く申し入れ度く候。

與基督教徒 書

拜啓、御厚意辱なし、左迄御心配被下間敷候。人類の状態としては、一部不健全の分子ある事、世界列國通じて免れ難く候。貴

國等にも其分子は不尠候。先づ以て自國の不健全なる分子より御救ひ候らへ、御厚意は千萬辱なしと雖、我等日本民族としては貴國等の他國他人に迄同情せらるゝが如く我等も亦貴國の不健全なる分子に深く同情を寄す。貴國等が貴國の不健全なる分子を他所に見て、貧に病に苦惱せしめながら、來りて獨り我等同胞を救はるゝ事不忍見候。我等は維新以來、國家多忙にして、百般の制度未だ整頓致し兼候へども、我等同胞の事は、我等保護可致候。特に信仰の實行としては、開關以來傳統致し居り候。其信仰實行は、個人家庭國家世界として、更に宇宙として最も適切至高なり、人類一般に實行せざるべからざる者どころ確信仕居候。あらゆる科學哲學宗義も、日本民族の信仰する所に觀照一致してこそ初めて完全なる實行に達する者どころ存候らへ、旁以て御安心有之度候。いづれ貴國人等が多年科學的御誘導としては、厚く御禮可申出候。尙

寄同胞 民族 書

同胞の一部分は、今の信仰實行ども、不健全にして、貧に悩み、病に悩み、職なきに悩み、或は資財あり、學ある健康体の者にしても、其老も、若きも、人生宇宙の歸趨を知らず、上下共に煩悶狼狽しつゝある者尠からざるは、已に御承知の事と被存候。儘にこれあるが爲めに外教は來りて其信仰を鼓吹すると共に、貧者を扶けて職を與へ病者を看護して新たる、生命を與へ、老者

を誘ひ、青年を導き、その煩悶を慰藉しつゝ、有之候。いかに基督教が狹隘固陋なる信仰なりとも、全然信仰なきに勝るべく、まして貧者病者孤獨者等の其身を救ふ者あるに會せば、うれいづれか相率て投せざらむ他教他人すら遙々海洋萬里を渡り、其信仰を以て、財寶を以て救ひつゝあるものを、同胞民族として何條之を傍觀するに忍ぶべきや、勿論、同胞中には已に救済事業に貢獻しつゝありと雖、未だ少数に有之候。同胞に不健全の分子あるは、日本民族の耻辱なり、まして之を傍觀しつゝ、他教他國の人に委すること多しとせば、耻辱の上の耻辱と被存候。更に他教他人の慈善事業に感して、茫然の信仰を寛容しつゝあらん歟

の信仰は狹隘固陋なる信仰にして、獨り日本民族の前途を攪亂するのみならず世界の前途を殘賊するに至るなり、左れば、國家に屬する民族としても世界に屬する人類としても、之を傍觀するは、不親切極まる

と共に自家の天職責任を怠る者にて可有之候。自己の健全を期せば、四圍の健全を期し、家庭を健全にし、國家を健全にし、世界を健全にせざるべからず、自己一人の生活を以て安んずべからず候。間接なりとて世界を無視し、國家を無視し、家庭を無視し、同胞を無視するは、遂に以て其身の生活さへ爲すこと能はざるに至るべく候。是れ豈に日本民族の面目日本領ならんや。我等同人は實に此に憂念する所あり、敢て苟に同胞一般の反省を促し申候。特に日本民族の信仰の如きは、獨り基督教に對するのみならず、佛教、回教を始めとして、あらゆる宗教、哲學、科學に比較し、その根本觀念に於ては、實に超絶する所あるを確信すると共に、吾人の祖先が、大日本の信仰を以て、白雲の向伏す限り、世界一般に八十綱打かけて普及せしめんものと實行し來れるに則り、勵精刻苦、之を内に實行して、更に外、世界一般に實行せしめ度く存

居り候。是れ實に三千年來祖先の遺傳が相續發して今日漸く世界一般に發顯普及すべき時機の到來したる者と被存候。吾等は同胞と共に、個人として、家族として、國民として、更に人類としての最高模範を個人家庭國家世界に示さんとする愚考に有之候。幸に御考慮の上、國家の爲め世界の爲め、御奮發有之度不堪希望候。妄言多謝。以上拜具。

第十二 大日本世界教

以上第一より第十一は、大日本世界教としてのほんの一部分の信仰解釋實行を述べたるに過ぎません。大日本世界教として、世界列國いづれの人種民族でも、其信仰解釋實行は、東西古今の宗教學說實行を總合一すると共に、世界列國に超出する所の信仰解釋實行でなくてはならぬと云ふのであります。然りうの信仰解釋實行は、いづれの國家、いづれの家庭、いづれの個人をも慰藉し救済し得る者にして、一方に

は通ずるも、一方には通せぬと云ふが如き狹隘固陋の信仰解釋實行では不可なりと云ふ意味であります。これも、昔の昔は昔の昔より、山河隔隔して、一地域を爲し、まして東西各自、其地域には地域相應に、その信仰解釋實行は折々四分五裂すると共に、また折々總合一の歴史は、一時代は一時代よりして進歩しつゝあります。然れば、東西列國相互交通して一世界たるの今日は亦昔時一地域の比ではない故に今日の如く、列國相互に信仰解釋實行の分裂矛盾するは、世界精神として容許べきものでない必ず之を總合一する者であります。大日本世界教は、先づ其世界精神を代表し、東西古今の宗教學說を増補大成し、その信仰解釋實行を總合一する者であります。其内容の如何は昨春發刊「大日本世界教宣言書」、大日本世界教要義、及稜威會宣言なる者あり、庶幾くはるの一端を知るに足るべく、あらゆる東西古今の宗教學說の缺陷

を擧げ、更に之を總合一し、増補大成したる全信仰解釋實行を示してあります。宗教と科學とは衝突する者ではありませぬ靈魂も科學的に示して三世聯續を證明します。一神多神汎神萬有神無神なんどの口論なきに至ります。唯心、唯物、心物二元、經驗、合理、概念、觀念、單子、原子、怪疑等の立論も更に判然すべくこれ等は左の表にてうの一端を會得ありたし。

自觀 自觀中の他觀 大自觀 大自觀中の大他觀

表 觀 裏 觀

他觀 他觀中の自觀 大他觀 大他觀中の大自觀

以上十觀とす、而してうの一觀毎に亦悉く表裏二觀あるが故に三十觀となるのでなくうの一觀毎に亦復三十觀を具足するか如く八億無数の眺めとなり、更に大超觀あり、大神觀、稜威觀、英靈觀等あり一寸一口には申入れ兼ねます。

明治四十年夏六月六日 稜威會同人拜述

宗教に於ける願と信との關係

在大學院 文學士 吉田修夫

宗教とは何んなものか、色々定義も立つてあるう。けれども、今は之を詮議して行く道がない。たい自分の信する所を一言すれば、こうである、即ち宗教とは神或は佛と稱する宇宙の理想的靈能と人との關係に於ける誠である。此の關係に於ける宗教上の主眼即ち人の方面より神に對する時、人の心は神と合一せんとする憧憬心となり、人に對する客體即ち神の方面より人に對する時、神の心は人を神に合一せしめんとする救済心となる。

此の憧憬心と救済心が融會即加する誠の風光是れ即ち真宗教の天地、宗教の眞風光である。こゝに憧憬心とは即ち神に對する衆生の信心にして、救済心とは人に對する神の本願心である。私はこゝに之を宗教に於

ける願と信と稱して、其關係の如何を説いて見やうと思ふのである。詳しく謂へば神の願心と衆生の信心とは本来一つである乎或は又た違つたものであるかと云ふと説いて見やうと思ふのである。苟も人たる自覺を得たるもの誰れか純圓三昧の生活を欲せざるものがあるか。けれども中々容易のことではない。定水を凝らすと雖も識浪頻りに動き、瑜伽三密の觀念を凝らす草庵の月の前にも、妄念の霧なほ立ち迷ひ、三諦一諦の妙理を窺ふ羅洞の霞の中にも、情慾の猿あざりくるふのである。況して平凡なる衆生の生活に於てをやである。昏々として人生苦惱の衢に迷ひ、或は憎み、或は嘲り、或は傷む、斯の如きは實に人生の常態ではないか。一身を投げ出して神即佛を打つ仰ぎ慕ひまつる赤子の信なくんば、たとへ觀理の妙に入るも、純圓の生命ある光明の生活には中々入り難いのである。

水流のほとりに、青樹木は、期に至り

て實を結び、葉も亦た凋落ないのである。眞に信心を發起し、信心に充つる人の生活は正にかくの如くである。而も信なき人の生活は、さながら風に吹き散らさる、糞糖の如く、荒地に横ふる朽木の如きものである。信の光發揮せざれば、光明の人生を見ることが出来ない。信は是れ我等一切の煩惱邪惡迷情を焼き盡し、我等をして光明の人たらしむる光である。潮満ち来れば、淡湖の水すべて鹹水となる。如來にいつきまつり、神を慕ひまつる一念一心の信水、胸に潮し来れば、必ず淨聖の神心發動し來るのである。理想の靈界か即身眼前に展開し來るのである。

信は是れ法藏第一の寶である。迷妄の人生を轉じて、本覺理想の光明に合せしむるものは信である。煩惱の人生を脱却して、如來藏に入らしむるものは信である。生死流轉の大海を度脱して彼岸神境の風光に接せしむるものは信である。信は是れ罪業の

人生を聖化して、神子佛子たらしむる大道である。常住の靈殿法域に安住する唯一の道である。

「我は復生なり、生命なり、我を信する者は、死ぬるとも生べし。凡て生きて我を信するものは、永遠も死ぬるとなし」

是れ實に基督耶穌の教である。信は誠に有限の人生をして、久遠不朽一實境に入らしめ、神の當位に坐せしむるものである。

「念佛のひとば、即ち是れ人中の好人なり、人中の上々人なり、人中の希有人なり、人中の最勝人なり」

「信心よるこぶ其人を、如來とひとじと説き玉ふ。大信心は佛性なり、佛性即ち如來なり」

是れ實に親鸞上人が實驗せる信心の法話である。信はげに佛花を開く力がある。神子の光を現する力である。佛其ものたらしむる妙不思議力である。華嚴經には「信は道の元なり、功德の母なり」と曰ひ、寶積

經には「信は是れ佛の子なり、是故に智者は應に常に信に親み近く可し」と曰つてある。誠に信心の水間熟し花開きて神を見奉り、信を以て我等は初めて涅槃永遠の都に能入し、而かも涅槃の都に止住せざるものとなるのである。菩提清涼の月は常住婆娑即密嚴妙樂の世界を照らして倦まず、我等衆生の心に信湧いて、水澄み行かば、菩提の月圓かに現じて、理具の面目を顯得し客觀に見たる神と主觀の我とは最早不同の二物にあらず、佛と人と二にして不二、不離にして等同、畢竟客觀の神と主觀の我とは一体に歸するのである。然り信は神となる光榮の湧く源泉である。

凡うこの信に種々ある。或は自力の信あり、自力中の他力の信あり、或は自力中の自力の信あり、又た他力の信あり、他力中の自力の信あり、或は他力中の他力所謂純他力の信がある。然れを前述の如く解する吾人の宗教觀に於ける信仰の道は、自力で

もなく亦た純他力でもない、亦た自力も捨てず、他力をもおまざるものである。自力は他力より、他力は自力をもち、自力と他力と相合し、相融會して、流露せる中道圓滿の信である。神と人と、佛と衆生とは、親子一体なりと正覺せる親子の妙方法門の大信心である。吾人の宗教觀は畢竟此の見地に立ち、宗教上に於ける願と信との關係を此の見地によりて解決せんとするのである。

宗教に於ける願とは、神の救濟心で即ち神の誠である、親の大御心である。信とは人の憧憬心で、即ち衆生の誠である、子の至心である、子たるもの、神に對する願心である。此間に於ける神の願心と衆生の信心とは、決して異なるものではない。救はんことを願ふ心は、救はれんと欲する願心と即して居るのである。若し救はんとする願心と、救はれんとする願心(信心)とが、本來異りたるものであるならば、其の願心と

信心とが結合する場合は、絶對的に、はた永久に起らないのである。されど神と人と宗教的關係を正覺し來れば、神即親の願心と人即子の願心とは一であり、子の信は親の願となり、親の誠は子の誠、親の大御心は子の願心となる、兩者は常に相離れず、相待ちて、宗教の妙趣は光現するものである。此間の消息を解せずして宗教を云々するものが、現代の宗教者に頗る多いが、甚だ遺憾に堪わないのである。古來神の願と人の信とを一如であると見て、其所に立脚し、宗教態を建立したのは、基督の宗教「所謂基督教にあらざり」眞言教及び觀音教と淨土教とである。

約翰傳に於ける基督は極力「神と人とは不離不二のものである」と云ふ見地に立ち、其の一代の法輪を轉ずるに倦なかつたのである。即ち神と人とは親子有親の關係に見たのである。此の親子觀は世上の親子的關係の眼では、到底信解し得られない。

宗教上の親子観は二者不二の親契を強て説明したる言ひ顯はしにすぎないのであつて基督が「ア、父よ」と叫んだ靈眼には、本來神と人との間に一髪の異を見ざる所の正覺である。佛教にては通じて「心と佛と衆生との三は差別なし」と喝破して居るのである。此の觀理を宗教的に發達せしめて、親子一如の妙趣を光顯し來つたのが、眞言宗淨土教觀音信仰である。誠に佛と衆生、神と人との結縁は親子一如である。世には此妙義を疑ひ、此秘義を信解せないものがある。此れ神の廣大性を天上に祭り上げ、我等を地下に埋めて考ふる不覺の結果である。迷ふて居るからである。無明の世界に執着するからである。一度無明の黒幕を取り去りて見よ、そこに明鏡の如く輝くものがあるではないか。神を信する、神を見る、神を悟るとは、誰れが見るのであるか、即ち主觀の我ではないか、主觀の我を離れて神を見るとは出來ない。即ち我に即して客觀

に見るのである。其客觀の神が主觀の我に異りたるものならば、我と云ふ意識の内に神の示現を直覺するとは出來ない。然り信する我と信せらるる佛とは、本來一法性の上の相對である。即ち我は法性の風姿、眞如の風姿を具して居るのである。強て神と人との區別を現象相對の上より説明すれば兩者は迷悟一髪に隔りに過ぎない、衆生とは無明の境に迷ふて居る間のもの、神とは法性の天に光り玉ふものである。其間一枚の黒幕を存じて居ると説明するの外はない。詮する所、兩者は一性の上の異名である。二なりと雖も二心は畢竟一つである。基督の所謂「父と吾とは一なり、吾を見しものは父を見しものなり」と喝破し、釋尊の所謂「天上天下唯我獨尊」と覺するのである。實に是等は正覺である。我等の心の鏡と神の心の鏡とは、本來只だ一鏡である。其異なるが如きは、我等は裏に向つて我が眞性の妙體を見ない、故に無明である。こゝ

に罪業は起るのである。佛は常住表に向つて宇宙に活かし玉ふのである。故に活きたる光である。神と人との分別は一明鏡の向背の神秘的消息に存じて、元來理具の體の上に於ては、是れ即相して一如の二相二義にすぎないのである。

日蓮曰く「衆生は寤覺の十如是なりと雖も、一念の無明眠るが如く心を覆ひ、生死の夢に入りて、本覺の理を忘る。佛は寤覺の人の如く、生死の夢に入りて衆生を驚覺したまふ。其智慧は夢の中にて父母の如く夢の中なる我等は子息の如し」

毘婆沙上人曰く「九界の色心同じく五智を備へて而かも森羅たり。然らば則ち四曼の聖衆は本より五蘊の假身に住して而かも常恒なり。三密の諸尊は常に九識の安心に居して無邊なり、一心即ち諸法なれば佛界衆生界不二にして二なり。諸法即ち一心なれば佛界衆生界二にして不二なり。又た是の心即ち是の佛本來一體なり」

と、我等本覺の窟を以て、我等の眞性を糾せば、劫火も燒かず、洪水も流す能はず刀劍も切ると能はず、弓箭も貫く可からず生死を超越せる心法である。實相の光、本如の壽命、心性の中に藏せらるる、神蓮台である、實に我等も亦た一個の所謂如來藏である。此の妙理を解し來れば、神と我等と本の故にも、末の故にも親子である。此の本末の親子断じて是れ一如不離の宿縁を有するものである。此の妙理を神解せずんば到底佛陀や基督や龍樹や親鸞や弘法やポーロや日蓮等の宗教、即眞宗教の妙趣を味ふとは出來ない。神と人佛と衆生とは如何にして感應道交するとが出來るか。前に述べたる通り、宗教は神と人との關係に於ける誠である。即ち神と人との關係によりて成り立つるのである。而かも神と人とが本來別物ならば、神人抱擁の妙趣は何によりて光現するか。我等基督教徒が神人合一の妙法門を光宣する所は、一切人類の心中に常住

不變の神の像に即相せる一如の姿を信するからである。若しこれの妙義を認めずして、神人合一を鼓吹するものあらば、其は基督の衣を被れる偽せの基督教者である。春の時來つて風雨の縁に逢へば、無心の草木も皆な萌け出で、花咲き榮ゆ、秋の時に至りて月光の縁に値ねば草木悉く成熟し實りて人類を長養す。我等か宗教心の信を實りて神を打ち仰げば、神は來りて攝取し開いて神を打ち仰げば、神は來りて攝取し玉ひ、昇天の光榮に入るのである。是れ實に我等に其光榮を得べき因あるからである。信は是れ因を開發成就する緣心である。眞に神の内に如來藏の内に、我等の心は含蓄せられ、神の心は我等の裏に聖藏せらるるのである。我等か至上の本尊は、我等か神純大圓の體である、相である。我等は其本尊の殿在したまふ神聖の本尊である。我等の色身は即して是れ本尊を安置し奉る莊嚴の靈龜である。ポーロの所謂神殿である。ポーロの「我儕の生命は神の内に藏しある

なり「梵網經の「汝は當成の佛我は是れ已成の佛なり」と云へる、誠に不朽の妙覺である。

我が宗教觀上の神、至上の本尊は、原因結果の律より計算し上げた所の、彼の舊約や、ある基督教一派の唱ふる眞如純理の理ばかりではない。かゝる解釋の神では斷じてない。されど宇宙の内に在し宇宙を貫き、三世十方に普遍して、而かも宇宙の上に活かし玉ふ三世十方萬有の善絶妙理の一實在者である。基督の宗教では、「父なる神」と云ひ、眞言宗では「大日如來」と云ひ、觀音教では「觀音菩薩」と云ひ、淨土教では「無量光佛」と云ふのである。此一實在者の壽命は久遠其智慧は廣大無碍其慈悲は普遍不捨光明一切を照らすものである。我等衆生を救はんとする親心を轉じ玉ふ所のものである。

太古の昔より人は神を感じ、神を崇拜して來た。けれども大方は我等と本來異なる

活物と思ひ感ひ、今もなほ此の感に執着するものが多い。されど神は我等と一なる大慈父大悲母にて在すのである。げに神は我等の大御親にて在すのである。既に神と人とは一如不離親子宿縁の關係にあるとす。宗教に於て、其安心門に於ける願即他力と信即自力とは二種の異なるものではない。即ち宗教に於ける安心は自力信の一行によらず、純他力信の偏によらず。願と心との一如不二の妙力神でなければならぬ。

宗教は所詮神と人との關係であるとは疑ふ可らざる一大事實である。されば神を無視すべからず、人を排すべからず、人を卑くめて、神を天上に祭り上げる可からず、神を立て、人を没すべからず、神と人と相即して宗教の妙徳を味はなければならぬ。一に偏して宗教は成立せず、妙徳は味はれないのである。則ち宗教に於て一度び神の願が活動し來れば、即して人の信起り、人の信か起れば、神の願は即して來るのである。

故に宗教の安心は、自力門の「悟る」一念でもなし、他力門の「頼む」一念でもなし。御親の神と、子たる已神と、互に合體して「一になる」親子一如の妙念であつて、神の願と衆生の信とは相即して異ならず、願は衆生の信であり、神は佛の願である。親慈が「大信心は佛性なり、佛性即ち如来なり」と曰へる、實は這般の妙諦を色讀したる叫びである。即ち宗教上の願と信とは二而不二不二而二の關係である。

こゝに願とは前述の如く、神の大御心である。其神の大御心とは、吾等一切衆生を救はんとの大慈悲心である。基督教でも、眞言教でも、浄土教でも、觀音教でも、皆「神即佛は愛なり慈悲なり」といふのである。此愛此慈悲とは何ぞ、是れ即ち佛か一切衆生の救済に向ひ玉ふ妙心妙力である。妙心是れ本願心である。妙力は本願力である。神の愛佛の慈悲とは、其本願心其本願力の異名である。「神は愛なり」慈悲

心是れ佛なり」是れ實に神のやる漸なき痛切の思召を表現したるものである。げに慈悲とは天地衆生を救済せざる可からずといふ深妙の念力、久遠劫來の御親の聖願である。佛は實に曠劫この方、天心地心のれがこより靈妙身を動かして、我等一切の救済に御心を砕きたまひ、砕き玉ひつゝあるのである。基督耶穌の弟子ヨハネは、這般の消息を色讀して「神は其の獨子を降し玉ふ程に世の人を愛し玉へり」是れ即ち神我等の御親か御心を砕き玉ふ本願を心得したるものである。舊約詩篇、新約聖書、法華經、觀音教々典、秘密教典、及浄土教典を一讀すれば神の願心の廣大なるとか分かる、特に觀音經、四福音書、大無量壽經を誦めば如何ばかり神か我等一切衆生を救ひ、神の都の究竟の妙を樂はしめんとして妙なる御心を砕き玉ふ本願を現現して、殆んど餘す所かない、其無量壽經四十八願の敘述の如き、天地の活ける御親の願心を表彰して盡

せりといふ可きである。吾儕は此等の教典を通じて、神の大願心を直覺するのであるが、又た基督と佛陀の一代の芳躰によりて一層明かに神の願心を仰き奉り、心得するところ出るのである。親の胸に慈愛の湧き立つは、子を我として愛するからである。神の愛は吾等を無明生死の巻より救はんとの大願でなからうか。基督の救済、佛陀の轉法輪、是れ實に我か活ける神の久遠の本願の精華と云ふべきである。神は永遠の昔より、東に西に、幾多の聖者を起して、其救済の本願を現現し玉ふた。然し乍ら、神は最も其本願を基督によりて光現し玉ふたとは、基督教徒の信仰である。約翰か「其の獨子を降し玉ふ」と云へるは、其意味である。此外に「獨子」と云ふ意義あるべきでない。或る基督教の一派か、此言を證として基督と我儕とを別物にせんとするは、基督の宗教には斷じて外道である、僻見である。又た佛教者の信仰より云へば、佛の本

願は最も佛陀色身の芳躰に光顯せられてあるといふのである。要する所、救済は神の本願である。前に願心は不二であると提唱した所の「願」とは、此の活神の本願である。此天地の活ける神の願ありて、吾等の信は意義を深奥にし、其目的を完成し、圓極せしむるのである。

然らば「信」とは何であるか。即ち此神を我と一なる御親と信じ奉り、此御親の大願心大御心に歸敬歸命しまつる心である。即ち神のものの、神の當體のものを求むる心である。天地の活ける御親を打仰ぎ、其の御心に如一ならんとする心である。生死一切全身を任せ奉る妙心である。倫理的に云へば、即ち理想に憧れ、理想と合一せんと欲して、無限に進む向上の至心である。吾儕の胸底を敲けば、實に這箇の妙心朗として響き、法然として湧き出るのである。此心、所詮の義は、神に對する我等の誠である願心である。久遠此方やむにやまれぬ

所願である。吾人は之を心と云ふのである。吾人は、這般の願と心とは、極力一如不二のものであると提唱するものである。即ち神心(佛心)と已心(衆生心)とは不二であると主張するものである。一絶對の相對である。此客觀的の一絶對に隨順する所の主觀的の信心一心不乱なる時、即ち其の客觀體の願心と主觀體の信心はたど打合ふた時打合ふた當の一人に於て、斷じて二つのものではない、例せば一に一を乘じて一となるが如く、主觀も客觀も一体である。是れ即ち本來理具の上に一であるからである。故に事理相の上にも一つである。されば眞の信心か我に起つた其刹那には、既に神の願心か光現したのである。即ち願と信とは、離して考ふるとは出來ない、一つである。親鸞上人が、安心決定抄に、最もよく是を開顯して居る。曰く

「佛の功德も、もとより衆生の所に機法一體に成せる故に、歸命の心の起ると云ふ

のは、始めて歸するにあらず、機法一體に成せし功德が衆生の意業に浮び出づる南無阿彌陀佛と稱するも、稱して佛體に近くにあらず、機法一體の正覺の功德衆生の口業に現はれる也。信すれば佛體にかへり、稱すれば佛體にかへる。

と、是れは眞宗の人々の、以て純他力主義の開顯する所であるか、夫は文の皮想に拘泥したものであつて、其眞根に横はつて居る思想を詮じつめないからである。純他力と云ふ時は、全く人を佛體より別なものに見て、全く人を否定し埋没して居るのである。然し乍ら「信すれば佛體にかへり稱すれば佛體にかへる」と云ふ、其「信する」と云ふ本體は佛と不二の我である。故に佛と云ふ一面に偏すれば、純他力と解せらる、けれど我と云ふ一面に偏すれば自力とも解せらる、故に其中道に立つて解すれば、明かに自他一如の開顯と見るべきである。此事は此文の次にある自力他

力日輪の文に照らし釋するとか出来る(此点に於て種々考へたいとがある、けれども追かなひから後日に譲るのである)要するに願と信と兩者相待ちて、宗教の天地は花開く、信あつて願なければ如實の本願の實現を見ることが出来ない。神は圓慈の母、圓智の父である。我等一切は此の圓智圓慈の眞の愛子である。我等か此の御親を知るは同一地の所在であるからである。故に我佛の親は圓智圓慈の親の願、神の願は其圓智圓慈の愛子の信、即して不離でなければならぬ。一如でなければならぬ。佛

信と已心とは一、信は願に順乗して一如本覺の都に還るのである。例へば放蕩息子が孝子となれるか如きものである。此子の孝心は、親の毎日の願信と、此放蕩兒の孝心との、はたと合したる所現である。子の發心を否定して親の願のみを認むるを得る乎決してうんな道理はない。親の慈願による

と固よりであるが、子の發心をも認めなければならぬ。然り親の願と子の發心(即親の心を信したる心)と二者不二である。願のみによらず、發心のみによらず、一を立て、一を没すべからず、兩者は相對の二つである。親の願力願心にのみ偏するは、純他力の法門であり、子の發心にのみ偏するは、自力の法門である。此兩者は宗教を圓かに解したるものではない。自力他力合一の神祕、これか宗教である。宗教の救はるに成就するのである。此間の消息をば、法華經新約聖書の放蕩兒の譬喩、又は觀音經等の最もよく光顯する所である。(讀者は就て味はれんとを望む)

衆生の信は願の一靈能によらず、神の願は信の一靈能によらず、換言すれば宗教即ち我等の眞風光は願と信との何れかの一の上の所現ではない、即ち願信二物ではない、彼にして此、此にして彼、實に中道圓滿一實一如の妙諦に味はるゝものである。神は

とこの生命である、亦た普照の光であるされを其常世の生命、其普照の光か、吾儕の救の生命、救の光明とならざれば、寧ろ宇宙に斯の如き神は在らざれである。又た宗教心ある人間に何等の要はないのである。然れども神は本來我と一味の實在である。其無量の生命、其普照の光りは、是れ吾等を元の一如に救はん一途の本願の相、本願の力用である。誠に救といふ神の本願なければ我等の信は起らなないのである。基督か「父もし引かざれば人よく我に來るなし」と曰ひ、ポーロか「汝等の信するは神の大なる能の感動に由るなり」と曰ひ、親鸞か「法機一体の所に成せし正覺の功德に由る」と曰ひ、又た淨土教者か「佛の引接」と云へるが如き、皆是れ其間の消息を流露したものである。然り信は願によりて起る。否な信は神の願心の外のものではない。けれど其一面に執してはならぬ。實に神の願は衆生の信なくして、妙顯するものではない。信す

る我に、神の願力願心を受納する信根なくば、本願如何にして活動し來るうか、現動し來るうか。基督か「我を信するものは餓へず恒に渴くとなし」と曰へる、其餓へしめず、渴かしめざるは神の本願である。然れども其本願は、之を信し、之を受けざれば成就せなし。信すれば、稱すれば、佛體にかへる。佛體にかへらしむるは、佛の本願である。けれど之を信じ、之を唱へなければ、成就はせなし。信すれば、稱すれば」と要求する神、即佛の本願は、衆生に其の本願を受納する信根を認めるからである。宗教は衆生の永生其ものである。其の永生は願心はたと合したる妙力の上に光現するものである。願は信の本、信は願の本、願は信の冥、信は願の顯、願は信に合して、救済の天地救済の本懐を現し、信は願に乗じて、復活新生の神境に妙相を現するものである。觀音經には面白く説法してある。曰く「念彼觀音力、釋然得解脱」と

此に念とは衆生の信即自力、念せらるゝ「觀音力」とは願心の籠る所、即他力である。是れ自力の信と他力の信と合一し、自他一如の妙力を示したもので「釋然得解脱」は其妙果である。誠に神と人との結縁は靈しき靈の縁である。神の弘誓強縁の本願に信の法帆をかゝげて、吾等は生死の大海を度脱し、彼岸光明の風光に浴し、大自在の靈趣に交融するを得るのである。誠に願の本體と、信の本體とは別体にあらず、願と信と一即して離れず異せず、願信一乘として妙樂の世界は即土に現するとか出来る、然り我等の妙心は神の本願の桂樹に花咲く法花である、神の妙願は我佛の妙心に光顯するのである。然り宗教に於ける願と心とは一にして別の力用ではない。

あ、我等の解脱、我等の昇天、我等の復活は、神の引導を待つ、而かも我等一切の衆生を解脱せしめ、本覺に醒めしめ給ふ神の曉の鐘は、久遠の古より今に打ち續けて

而かも日毎に法音ははがらかに響き渡つて居るのである。其慈悲の光明は、宇宙に普遍して隈を残さず、我等は常に我等の妙信をたゝねて、神の本願に乗じ、願信一如の妙庭に安心を建立すべきである。

袖ふり合ふも多生の縁、一樹の蔭二世の結縁を生ずるのである。神と我と是れ本來親子有親の妙不可思議なる宿縁、有り難き久遠劫來の御計畫である。此宗教の妙諦を親得信解すれば、踊躍の法喜、獻身の決定勇猛の精進、心にけり湧かざるよかあるうか。こゝに聊か宗教に於ける願と信との關係を説く。

眞佛降誕の時所

大内青樹述

演題は「眞佛降誕の時所」といふのを出して讀いた、是は大分厄介な話で、御話をしやうと思へば餘程時間を費はなければ出来ませぬから唯解題だけを申し上げまうことで

これは釋迦如來の眞佛の志願を以て仰せられた法華經の壽量品の上での御考である、本當に一心に佛を見んと欲して身をも命をも惜まないのである、で、所謂信仰が必要である、唯信仰と云つても我は斯う思ふと理窟が分つた位ではいかぬ、充分な修養を積んで、さうして始めて所謂、自ら身命を惜まざる時がなければならぬ、さうなれば我及び弟子——釋迦牟尼佛ばかりでない、八萬を率ゐて共に靈鷲山に出でん、靈鷲山といふのは釋迦如來が法華經を説いて、一心に修業を積んでござる所、其靈鷲山といふうんな所に出て貰つても仕事がない、何千里も隔つた印度の靈鷲山といふ山の上に出て貰つた所が仕方がない、我々の眞佛の現はれる時といふのはいつであるか、所といふのは何處であるか、それを研究して置きたいのである、それが今日降誕を祝する所の釋迦如來に限りもなく御恩を戴いて居る其御恩に報ずるの一端であらうと思ふ。

毎年四月八日に降誕會の勤めのございまするのは今更申すまでもなく釋迦牟尼佛が此娑婆に肉體の御誕生をなされた日を御祝ひ申上げるのである、所が今は眞佛であるから肉體の御誕生を御祝ひ申すばかりでなく御互ひの平生謂ふ所の法身佛の本體の上を言ふので、其法身佛なるものは有るものであらうか無いものであらうか、それが我々の上に何時降誕されるのであらうか、即ち其時所を言ふて見たい、今日御降誕會を勤めらるゝ所の釋迦牟尼佛如來は何處で御降誕があつたかといふと、二千有餘年前印度で四月八日に御降誕なされたので、時も所も分つて居る、然るに其釋迦如來が全く釋迦如來と御爲りなされたのはいつである、其釋迦如來に御爲りなされた時が眞佛の靈現した時である、悉達太子といふ王子が蓋毗尼園で御生れなされたといふことは取消すことは出来ないが、眞佛の降誕するといふことは皆悉く降誕の期節に合はなければ

我々御互の心の働が宇宙の眞理に一致する事實がなければならぬ、書物の上で理窟が分つたのでは駄目だ、今日此降誕を祝する所の御釋迦様十九の時に花見に出られた、出掛けた所が途中で以て恐ろしい老ばれた爺さんに遭はれた、もう腰の曲つた白髪の敏だらけの海坊主みたやうな爺ひであつたらぬでア、は何だぞと云つて問かれた、御供の人はあれは老人と申すものでござると云つて答へると、ヘテさうかと思はさうに仰しやつて、誰でもア、なるものか、誰でもア、なりませすと申上げたと云ふことである、斯ういふことであつたら其馬鹿さ加減が分らぬので、十九になるまで世の中の老人が居るといふ事實を知らぬで居つたのは、阿呆か馬鹿者か自分は老人にならない積りかなにかで居る、然るに其次に花見に御出掛けになつた、其時には老人位でなくて病人を見た、又其次には死人を見た、其度毎に御釋迦様が驚かつしやる、あれは何ぢや、

ばならぬ、之を御話するには眞佛とは何であるか、語をかへて云へば宇宙の眞理とも云ふ天地萬物の本體本性である、それは無死無生なもので、降誕の時もなければ入滅の時もない、けれどもそれが形に現はれた時はどうなる、宇宙間を見渡しますれば山もあれば川もある、花もあれば水もある、獸もあれば鳥もあれば虫もある、即ち萬物がある、それが眞佛所謂釋迦牟尼如來には降誕も入滅もない、併し其姿が現はれた時はどうである、ちやんと春になれば花となつて降誕する、秋になれば紅葉となつて降誕する、山にあつては高く登つて降誕する水にあつては長く流れて降誕する、皆其時所が必要である、我々御互ひ人間はどうか我々人間と眞佛佛の關係はどうか、法華經の中には一心に佛を見んと欲して自ら身命を惜まざれとある、それが即ち眞佛降誕の時である、其時に我と言はれたのは釋迦如來が仰せられたやうではあるけれども、う

あれは病人といふものでござる、あれは何ぢや、あれは死人といふものでござる、うれでは矢張り死なねばならぬか、十九になるまで世の中に病人のあることも死ぬといふことのあるもの知らずにござつたといふ話なら御恩である、所が我々は隣のお婆さんや向ふの爺さんの死んだといふことは知つて居るが、自分のことは分らぬ「今までは人の死ぬのと思ひしにれぬも死ぬのか」とつたまらん」と、さうさうも後れて言つても仕方がない、即ち悉達太子が十九の歳に始めて眞の佛が釋迦牟尼佛の心の中に宿させられた、それで終に三十の御年まで十二年の間胎内にござつて、三十の年の十二月八日の朝、曉の明星のキラ／＼昇るのを御覽なさると同時に忽然と御生れなされたのが眞佛降誕の時である、即ち宇宙萬物を照らす曉の明星といふ星がキラ／＼と光つた、其光りと釋迦如來の御心の光が一致冥合して

なく今日はホンの大要のことで止めます。
(右は日本佛教青年会の催す、種々講義會に於ける居士の演説の大要を筆記したるもの未だ校閲を経るに遺らざる文責全く記者にあり)

婦人と社會事業

法華博士 小河滋次郎述

私は只今御紹介を戴きました小河と申す者で御座います。今日は固らず本會に招きを受けまして、誠に私の光榮として厚くお禮を申すことで御座います。私は昨年の夏公務を以て外國に參り其序を以て重なる各國を旅行して先頭歸朝いたしましたのでござります。

往復も極めて短日月の間で御座りましたので、すから別段土産話にする程の材料も持つて居りませぬが多少僅かの間に私の見聞致したことで御婦人方の參考に成りはすまいかと思ひますことが有りませぬので、其一斑を掻き摘んで話をいたして見たいで御座います。
私の外國に公用を持つて參つたと云ふの

とがある、所謂水際立つて、うれから後胸の中が呀へへして騒りが少しも無くなつたといふことがあるものらしい、さうではなくていつといふことなく、所謂霧の中を歩く、しらすの間に袖をしぼるやうになることもある、又説教を度々聞いて濕ひは見なければも絞るやうにいかぬのである。是は一概に言はれない、それで禪宗あたりの祖師方は各々傳記がありますから多くは何月幾日にどういふ事柄に依つてといふことが皆書いてある、即ち時と所とが明かに分つて居るのである、之に外の宗旨から言ふたならば念佛觀法の上から成就するといふやうなことがどの宗派でもあるのであります、其時節に我々到着するといふことを朝な夕なに心掛けて、眞佛降誕の時所といふものを自分で發見する時を得たのである、それを詳しく御話することは自分も面白く感じて居りますから、材料も多少持つて居るけれども、持たぬものは時間、據る

二つとも云へぬればひとつも言へぬ事實が起つた、即ち我々の働く心と釋迦如來の御心とが一致した時である、禪宗の或る禪師が、逆も此世一生に悟ることは出来ぬと覺悟なされて、生々世々、生れ變り死に變り、いつまでも修業の力を積まなければならぬと、山の中に這入つて獨り坐禪觀法修業に心を注がれて居られた、さうかして眞の佛を拜みたいといふ一心、或時等を持つて庭を掃いてござつた、山の中の庵室、誰れ人も居らぬ所で唯庭を掃いて居られると其等の先に掛つた瓦礫、それが帚の先で列ねられて竹箒の竹に行つてガチツと當つた誠に肅然として物の音のせぬ時、唯サラリサラリとする竹箒の音を聞いて居る時、うのとき自分の精神は宇宙の眞理と正に合躰せんとした時期である、其時にカッチと瓦が竹に當つて豁然として悟を開いた、斯ういふやうに外の學問でも藝術でも、いつか知らぬ自ら膝を拍つてハツと思ふやうなこ

と申して宜しからうと思ひます。既に外國に於いて立派なる社會事業が婦人の力に依つて成功したと云ふことであつたなら我帝國に於いても果して慈善事業の必要があり又之れを發達進歩させるのが必要とするに何うしても御婦人の力を借りなければ成効は出来ないと思ひます。尤も此事は外國の例を引く迄も無く既に吾が國でも婦人の力で色々の慈善事業、愛國婦人會、赤十字社、篤志看護婦會等種々の事業が起つて居るので御座います。現に着々實效を擧げて居る、猶又戰爭時代に當つて御婦人の力に依つて種々の慈善的救護事業が經營せられまして之れが出征軍人に對して非常の後援となつた、此の度の千古未曾有の戰捷の効果を收め得たに就て國民の後援が與つて方ありといはれたれば婦人の經營の勞も亦た確かに一般國民の感謝に値すべきものであります。斯の如くに既に我國に於きましても活例が御座いますので、すから將來

の勢力の社會事業に大なる力を持つて居ると云ふことを感じました。御承知の通り今日西洋各國には婦人の單獨の力で經營して居る事業が澤山御座います。又假令表面上は婦人の經營に成つて居らぬ、男子に依つて經營されて居るものも、段々其事業の實質に就いて調べるに其裏面に於いては婦人の潛勢力の極めて強く活動して居る事實を見ました。すべての社會事業殊に慈善事業に就いて私が調査致しますに第一に指導を受け調査の材料を得たのが婦人の力でござります。ハンガリアでも、オーストリアでも、獨逸でも、此慈善事業に就いての材料は其大部分婦人の力に依つて蒐集したと云つても宜しい様で御座います。夫れに依つて私は婦人の力の社會事業に付いて偉大なる力を以て居ると云ふことを見留めました。今日西洋各國が社會事業、慈善事業の殆ど完備の域に達したと云ふことに就ては少くも婦人の力が與つて最も多きに居る

は匈牙利亞のシタベストと云ふ都府で萬國の監獄會議が御座いました。之れは萬國の監獄の改良を目的として世の犯罪なるものを減少或いは豫防することを研究するため設けてある萬國聯合の會で御座いました。其會に我が帝國政府を代表して參つたのが私の主なる要務でござりました。其序を以て此事業に深き關係を持つて居る種々の社會事業、即ち貧民救濟或いは出獄者の保護事業、若しくは不良少年の感化事業、或いは之れに關した禁酒問題其外勞働者の保護問題に付いて各國の實況を調査いたしました。尤も斯う云ふ事柄は餘程社會の各階級に從つて廣く研究を遂げなければ成らぬので僅かの日月の間にするのは餘程困難で御座いますので、充分の調査をしたと云ふ譯では有りませぬが、段々各方面に渡つて其道の人々に廣く交際をして何程か材料を蒐めた考へでござります。斯う云ふ事業に就いて段々深く調査して見ると益々婦人

に於いても婦人の力に由て此慈善事業の一層の發達を見る事が出来やうと思ひます。否、將來に於て婦人の力を待つにあらざれば必要なる種々の社會事業は到底完全なる發達成功を見る事は出来なからうと信ずるのでござります。

御承知の通り今回の日露の戦争に依つて日本の國威を外國に輝かしたと云ふ事は實に非常なものであるでござります。其事は既に皆様方も大抵御承知で御座いませうが、實際彼の地に遊んで其實況を見るに及んでは、誠に豫想の外に廣く高く日本の國威が揚がつて居ると云ふことを感ずるので御座います。今日は西洋各國の人が上下を通じて一般に日本に對して非常な注意を拂つて居ります。又日本の國情を研究する事に非常に苦心して居ります。日本が僅かの年に於いて長足の進歩を遂げて文明強國の仲間入りをしたのみならず、外國の文明を輸入し列國中の最強國として各國か

ら恐れられて居つた所の露西亞に對して連戰連捷の効果を收むるに至つたと云ふことは實に不思議に驚くの外なく、實に日本人は偉大なる國民であると云ふことを深く感嘆して居るのでござります。夫れがために各外國人は何うして日本が斯う云ふ文明富強の國運を發展せしむるに至つたのであるかと云ふ其原因に就て之を見出さうと頻りに苦心して居るやうであります。公私を問はず種々の種類の集會の席には必ず日本の事が引合ひに出るのであります。其話す所を聞いて見ますと現在今日の日本でして居る事は何でも日本國の強い原因である即ち日本に於ける文物制度を始めとして倫理、道徳、風俗、慣習、是れ等總べての事柄が、皆綜合して日本の國を斯く立派の文明國に成し得たのであると云ふ様な感じを以て日本人の行つて居る事は何でも善い事のみであると思つて居るやうであります。恰度明治初年の我國に於て、若くは尙ほ今

日に於いて彼の所謂外人崇拜熱、外國人のして居る事は凡ての事が模範に成る事と思つて居つたと同じことで、今日の外國人の眼から我國を眺めて見ると日本人のして居ることは總べて皆模範とすべき善い事柄のみであるかに思つて居るのではなからうかと想像し得られます。其二三の例を申しますと、私は萬國監獄會議に臨席の序でを以て恰かも同時に同ヒブタペストに開かれ、萬國禁酒會議にも出席いたし、又其後ウイナに開かれた萬國労働保險會議にも臨み、其他獨逸に於ても婦人方の經營の下に設立せられて居る幼少な小供の保護事業を目的とする協會があつて其協會の總會にも出席いたしましたが、是等の種々の集會何處へまゐりましても必ず日本のことが引合ひに出る面かも其引合ひが毎も有力なる活例となり、之れに依つて非常に聴衆を感動せしむると云ふ實況であります。即ち先づ第一が禁酒會議此會議の開會當日

に於いて會長のフラーネル此人は瑞西人で歐羅巴に於ける有名動物學者でまた社會學者であります。此人が開會の大演説を演りました。演説の要旨は、無論禁酒の必要を唱へたのであります。而して其禁酒の必要を述べる例に日本に於ける節酒の實例を引合に出したのであります。即ち此日本の國民が露西亞の強國と戦つて連戦連勝の奇效を收めたのは實に世間の人が不思議に感ずるところであるが、段々其原因を聞いて見ると一向怪しむに足らぬ即ち日本に於いては禁酒又は節酒の美風が一般に行はれて居る結果である、之れに反して露西亞は極めて飲酒の悪風の盛んな所であつて兵隊が戦争に臨むにも先づ酒を飲んでからでなければ勇氣が出ないと云ふやうな有様である、即ち泥酔の國民である、之れに反して日本人は酒を飲まない、従て其軍隊に於ける軍人の規律は極めて嚴肅に且つ眞面目なるものである、日本の軍人は戦場に臨

んで酒を飲むと云ふやうなことは絶無である、其證據は東郷大將が旅順の閉塞隊を送るに當つて水盃をして其行を盛んにされたこと云ふ事實に就て見るも明らかである。此事は日本の新聞にも載つて居りましたが外國の新聞にも載つて居つたと見えます。此水盃と云ふことが即ち日本に於いて昔から武士の間に行はれた有事の場合に臨んで酒を絶つと云ふ美風を證明する者であつて軍人が戦場に臨む大切の場合に當つては固より生命を抛つた覺悟を持たなければ成らぬのであるから、其人が酒の力を借ると云ふ様な事であつてはいかぬ極めて眞面目にして最も純正なる勇氣を振はねならぬのである、即ち渴を醫するに水は飲むが酒の如き眞勇を害する毒物は一切飲まぬと云ふことを昔から武士の習慣として戒められて居る證據である、是れが即ち日本の軍人の強理由で酒を飲まぬと云ふ事が日本軍をして露軍に勝らしめたる所の重なる原

因である、と而う云ふ風に水盃の儀式を解釋して夫を以て日本の禁酒國であること云ふ例證に適用致したのであります。此例證談は非常に滿場の列席者を感動せしめました、單り聴衆のみならず新聞などの上にも盛んに書き立て、日本の文明富強の偶然ならざることを稱賛いたしたのであります。其後又ウイナで開いた萬國労働者の保險會議で御座います、之れは色々の方面から労働者を救ふために適當なる保護の道を開いてやると云ふ目的の會であつて、私も委員として列席いたしました。本會に於きましてもまた亞米利加から出た委員の人の演説の内に日本では未だ法律規則で労働者を救済保險しなければ成らぬと云ふ必要を見て居らぬ、即ち而う云ふ様な入釜しいものは設けては無いけれ共、労働者は自然に厚き保護を社會から受けて居る、即ち日本の労働者の生活は決して歐羅巴や亞米利加の狀況など、は比較することが出来ぬ、日

本にあつては何んな貧乏人でも多くは一つの家庭を以て居る、勞働から歸れば自分の家庭に於いて妻子團圓の間に清き楽しみを得ると云ふ餘地を持つて居るものであつて何れも其分に安んじ其業を娛んで居るから少しも社會に對して不平と云ふやうな事を持つて居らぬ、又上下の懸隔も非常に甚だしくは無くして勞働者と社會上流の人の間は極めて能く融和して居る、試みに上流の家庭に遣入つて其家庭に於いて婢僕が如何に其主人から扱はれて居るか云ふ有様を見れば無いかと思はれる程親睦して居る、殆ど下女だか令嬢だか分らぬ位に親睦して居る之が歐米などであつて見ると上流社會の者は無暗に品格と云ふやうなことに重きを置いて居るが爲めに、主人が召使などに對しては必要の用務の外は容易に言葉交ふると云ふやうなことはない、其間の關係は誰れが見ても極めて冷淡のものであることが見へ

る僅かの危念をしても直ぐ損害を金銭で償はせる、又は何か心得違ひでもすると用捨無く告發して之を裁判沙汰にする云ふやうな始末である、而う云ふ風があらざれば行はれて居るので御座います、日本では之れと反對に主人と婢僕の間は極めて圓滿であり、之れは單り主僕の間ばかりでは無い、社會一般の狀態が而うで御座います。即ち下層のものを上流の人が始終善く保護して居るから勞働者も其分に安んじて社會に對して不平を持つて居るものなれば無い、然して其勞働者が一朝國家に事ある時に當つては其國のために盡す、兵隊となつて身命を擲つことを辭せぬのでございませう。然るに外國なんかは始終下層の人が上流の者を怨んで居る様なことに成つて居るから其者が戰爭に出ても果して國家のために身命を抛うつ覺悟で働くことが出来るや否や、是れは誠に覺束無いことござります、之れに反して日本では上下の結び

付きが善く出来て下層に怨嗟の聲が無く且つ常に其身は君恩に浴して居ると云ふ考を持つて居るから、一朝事があつて戰爭にでも出ると忠勇義烈の働きをすることに成る夫れ故今回も露西亞に勝つことが出来たのである然るに露西亞は其反對であるから敗北るのは當然である、其れで御座いますから何うしても日本の如くに社會は平常の日にあつて厚く勞働者を保護せねば成らぬ、即ち此勞働保險事業の如きものは國家の富強を進める上に就き最も有力なるものであります云ふやうな事を述べて是れも非常に滿堂の喝采を博したのであります。夫れからモウ一つは先刻れ話をしたペルリの婦人會の招きを受けて列席した時の所感のことでありませう、其所でも矢張り日本

つて居るやうで御座います、外國人から見ると未だ而う思つて居る、日本では小供を育つるに牛乳を以てすると云ふやうなことは無い、何んな上流の家でも生母の乳汁を以て育てる事に成つて居る。乳兒でも持つて居る婦人であると少しも其兒を膝から離すやうなことはない、これが外國なごでは御承知の通り實際社會にでも顔を出すやうな所謂上流社會の婦人であると小供なごの養育の事は乳母任せと云ふことに成つて居つて主婦の手許に於いて世話をする云ふやうな事は殆んど無い様で御座います之れに反して日本では小供を自ら鞠育すると云ふ事が上下を通じて母たるもの、當然の務めとなつて居る、兒を養ふとは親に如かず、親の愛情を以てすると云ふことがさうしても小供の發達のためにも美し譯である、而うかと云て愛に溺れる様な事は決して無い、年頃に成ると小さな小供を學校に送る外國の上流社會では大概家庭に教員を招聘

いて家で授業をさせるが、日本であつて見ると余程上流でも小さな小供を學校に朝夕送迎をして遣る。單り學校に遣るのみならず、學校に行く前に朝早く起して其小供を冬寒い時分でも夏暑い時分でも、柔術や劍術の稽古に遣る（日本では盛んに而う云ふ事をやつて居るものと思つて居るらしい）而して一時間なり二時間なり済んだ後に學校に遣る、其學校に遣るにも、東京ならやを歩るいてみると分る、極く寒中でも小さな小供が帽子も冠つて居らぬ、中には足袋も穿いて居らぬものも御座います。夫れから極めて薄い綿服を着て居るので、外國人から見ると何うして之れで寒氣を凌いで行くことが出来やうかと思つて不思議に感ずる位である、日本人は斯くの如くにして小供を蒸陶して居る。而う云ふ風に小供が小さい時分から天然の氣候と戦つて充分身體を鍛へるから、日本の小供と云ふ者が壯健にうだつ、又其壯健に育つた小供が兵隊

や軍人と成つて出る、夫れ故に滿州の惡るい季候に向つて即ち天然の強敵と戦つても勝つことが出来たのである、夫れで向後は外國人も宜しく日本に習つて子供は母自らが養育の任に當るべきである、また小供に餘り厚い衣服を着せて大切にすると云ふ事を廢して矢張天然の季候に打ち勝つて、之れに堪へることの出来る様な身體を養成するには足袋も穿かせず帽子も冠らせないやうにしなければ成らぬ、と云ふ様な極端な話までして非常に日本を賞讃した様な次第で御座います。若し是等のことが日露戰爭前、數年前のことであつたら、外國人が日本の斯う云ふ習慣を見て何う評したであらうかと云ふと、日本は野蠻の國である、誠に未開な國であると云つて笑つたに相違無い、現に我々日本人として、斯かる習慣は野蠻の遺風であるかのやうに思ふて將に改めやうとして居るにも拘はらず、歐羅巴人は之を認めて善き習慣である、日本を文

明富強國たるに至らしめ、日本兵を忠勇ならしむるに至つた原因として此美風を採用し模倣せんとして居るのである、彼れの眼には今日日本人の間に流行はれつゝある事は凡べて善い事のみである云ふ様に思つて居る、つまり平たく申せば彼れは我國を買ひ被つて居ると云つて宜からうと思ひます斯う云ふ風に段々日本の事に就いて研究する事が追々盛になりつゝあるので御座いますから、若し將來に外國人が日本に来て研究すると云ふ事に成つたら、或ひは是迄本國に居つて感じて居つた事とは意外に思ふやうな事が起りはすまいかと思ひます。若し而云う風に成つては日本に對して同情を以て善く解釋して居つた丈けられ丈け深く失望して失望の餘り悪評を下し悪聲を放つやうになりはすまいかと思つて深く將來に就いて警戒をしなければならぬと思つて居ります、此外猶日本の事に付いて研究を試みつゝある者は到る所に非常に多いの

でありまして、私があちらに居る時分に日本の慈善事業、即ち、愛國婦人會とか赤十字事業のやうな事に付いて書いたものを持つて参つて之れを各國の有志家に分配したものであります、何れも深く感動を起さしめたやうでありますが就中婦人の事業の開けて居ると云ふ事には一層嘆息を深からしめたやうであります、では婦人問題女權擴張問題と云ふ様な事が盛んで御座いました是れも文明進歩の結果を信じて居つて文明國には必ず婦人問題が盛んである婦人の働らさが發展せらるべきものと思ふて居る、愛國婦人會などで婦人が盛んに働らさつゝあると云ふことは即ち日本の眞の文明である證據であると判断したやうであります。

と慈善的の事業又教育的の方面次に社會事業の方面で御座います。つまり女子は社會的の教育者である、或ひは社會を保護救済する天使である、と云ふやうな學者もあつて女子の天職として而云ふ社會的事、即ち慈善事業なんぞに盡すべき本分を以て居るのであると云つて居ります。殊に社會事業と云ふものは其性質として、之れを一家的事業で御座いますモウツ廣めて云ふと地方的の事業でございます。既に一家的或ひは町村的地方の性質を持つて居るものであるとすれば、女子は一家の内政を掌るのが本分で御座いますから、社會的慈善事業もやはり婦人の力に依つて全うすべき者と思ひます。凡べて社會の仕事でも玄關的の仕事と勝手向の仕事とが御座いますが、慈善的のとは即ち勝手の仕事でございますから、夫は婦人のすべき働きであらうと思ひます。夫故貧民救済事業なんぞに就ては、女子を

公の機關として用ひるやうな事にして居る所が御座います。例へば孤兒を保護するに云ふやうなことに就いて、町村に其機關があるとその委員に女子を採用する、又貧民救助に關して調査委員とか保護委員とか云ふものも御座います斯う云ふものにも成るべく女子を採用するやうに成つて居る、殊に貧民事業に就いて模範として各國で手本として居るのは、獨逸のミルヘルヘストエルベルフェルド、システムで御座います之れ等の成功した所以も主に女子を用ひて居るのが大原因であらうと思ひます。是等の證據を見ても何うしても社會事業は女子の力を借りなければ成らぬと云ふ事が分ります。又婦人の方が社會事業に其身を委ねらるゝと云ふ事は單り社會を利する、即ち他人を利すると云ふためのみならず、女子の側に成つて見ても其婦人自身の地位を高め、又婦人の將來に其身を處せらるゝ上に非常な助けを成すものであつて、利他

の一面には自己に利することが多くあらうと思ひます。即ち今日婦人方が色々の事に力を盡して夫れがために自分の地位を高めた事が大きいものであらうと思ふ。實は私の述べました之迄のとは全く前置であつて監獄であるとか、勞働者保護だとか禁酒問題に付いて婦人の方の現に外國で力を盡したに在ると云ふとに就いて深く御話をしてみたいと云ふ腹案を以て居りますが、大分今日は時間を経過し、猶ほ御會の方にも種々の時間の御都合もあるやうで御座いますから今日は是丈の御話に止めて下さいます。若し又他日機會があつたら悦んで此次のことを聯續して話もいたして見たいと思ひます今日は之れで御免を蒙ります。

宇宙を悲觀するものは來れ。人生に煩悶するものは來れ、曇茶の風光は汝を慰藉し現象即實在の救済は汝を救済せむ。看よ。日月清明、吾を照らし、山河大地、吾を育み、爛熳たる百花は吾を慰め、嬉々たる鳥聲は吾を樂ましむ。宇宙何の悲觀すべきかあらむ、人生何の苦惱すべきかあらむ。之れを悲觀し、之に苦惱するものは、自ら宇宙を達觀し人生を看取るの明なきの徒のみ。請ん暫らく我宗の教ふる所を聽らしめよ。

我が宗は此宇宙を以て靈妙なる大日遍照の當體とし、此人生を以て莊嚴なる兩部曼荼羅の顯現とす。曼荼羅とは梵語、輪圓具足の義なり。絶對の眞善美、輪圓具足して、凡ての偽惡醜に絶し、森羅萬象は悉く無碍の光明を放ち、萬有の活動、皆な自由の眞趣にあらざるなしと説く、蓋し此宇宙を以て死物とし、其人生を以て無意義なるものとなすの盲者は、いざ知らず仔細に此

自覺的活動

一、緒言
風土宗豐山派 釋慶淳
高等學院教授

活動を自他共離の四方面より看取するもの
誰か其靈妙に驚かざらむ。この靈妙なるもの
之れ無限の空間に亘り無限の時間を貫け
る大日遍照の當體なり、兩部曼荼羅の顯
現なり。曼荼羅の風光、常に朗かにして、
寶相真如の月は不斷の靈光を垂れ、菩提涅
槃の風は常住の薫香を送る。これこの風光
抑も何の處にある。徒らに之を他に求むる
の愚を學ぶ勿れ。究竟して自心の源底を覺
知し、實の如く自身の數量を證悟する所
其處に秘密莊嚴の輝きあり、うに兩部曼
荼羅の光あり。此の自心の源底を覺知し、
實の如く自身の數量を證悟する所、之れを
本有の光明といふ、吾人一たび此光明に接
觸するの時、現身速疾の覺道に、成じ
永遠の生命、こゝに獲得せられ、不滅の信
仰、こゝに成就し、身は鎮しへに無限の靈
域に逍遙することを得む。此際何の苦惱か
あり、何の煩悶かあらむ。吾人の苦惱し煩
悶する所以のものは實に此自心の源底を覺

知せざるにあり、自身の數量を證悟せざる
にあり、之れがゆゑに、本有の光明煩悶の
雲霧に掩はれ、苦惱の風雨に隠れて一切處
に遍在する曼荼羅の美觀を認知する能はざる
のみ。此自心の源底を覺知するを金剛界の
曼荼羅と名け、此自身の數量を證悟するを
胎藏界の曼荼羅といふ、此金胎兩部の曼荼
羅は萬有の顯現にして又これ吾人の本來具
有せる自性清淨心たり、心淨ければ佛土淨
し、悶れる人、惱める人、希くは汝が煩悶
の雲霧を拂ひて此洋々たる風光を看取せよ
道は遠きにあらざる、直にこれ汝が身心にあ
るにあらざるや。日月照らせども盲者之れを
見ず。思惟らく日月光なしと、これ光なき
にあらざる、見る能はざるなり。宇宙は微妙
の靈體を面前に示し、天地は莊嚴の美を咫尺
に現すこれを、認知せざるは罪、彼れに
あらずして我にあり。心眼を開いて先づ自
己が身心を見よ。救ひの手既に汝が眼前
に下り、慰めの聲は既に汝が耳邊に滿つ。

一〇四
悲哉、我が耳聾して此慰めの聲を聞かず
我が眼盲して此救ひの手を見ず。徒らに煩
悶し苦惱して即身頓成の妙義を味はざるこ
と。
二、宗 要
曼荼羅の風光、豈に他より來るものならんや
心眼を開けば、其處に輪圓具足の美あり、
秘密莊嚴の妙あり。大日經疏にいふ、「此の
曼荼羅を名けて淨と爲す、一切衆生の自心
は本來清淨なるを以てなり、而も無明蔽覆
するを以て了知すること能はず、若し此心
を淨むれば即ち是れ曼荼羅處なり、餘處よ
り來るにあらざるなり」と、されば其所謂即
身頓成の靈體なるものも亦唯だ身に光明を
放ちて虚空を飛揚する如き神怪の意味を有
するにあらざる。一向に一切智を志求し
必らず普く法界の衆生を利益するの本誓を
以て無限に活動するの義に外ならざるなり
我が宗の説く所、高尚幽遠、乾坤を盡くし
六合に浴く、之れを仰げば愈々高しといへ

とも、亦實に活世界の活運動と些毫も相違
せざるなり。想ふに密宗の教義、一言に盡
すこと、もとより難しとすへども、其要を
いへば三句五點の法門に過ぎたるはなし。
三句とは何ぞ、大日經にいふ、
佛言、菩提心爲因、大悲爲根本、方便
爲究竟、
と、菩提心を因と爲し、大悲を根本と爲し
方便を究竟と爲す、此三句は實に宗教の極
致を明し、人生活動の大本を示せるもの、
五點とは何ぞ、發心、修行、菩提、涅槃、
方便爲究竟これなり、之れを三句に配すれ
ば實に左の如し。
菩提心爲因 — 發心
三句大悲爲根本 — 修行
方便爲究竟 — 菩提
涅槃 — 方便爲究竟 — 果

究竟を以て目的とするや一なり、發心、修
行は因にして、菩提、涅槃、方便爲究竟は
是れ果、而して中に就く無限の利他を意味
する方便を以て究竟と爲す。方便爲究竟、
これ活動の福音なり。向上の靈光なり。此
靈光豈に他より來るものならんや、即身成
佛、必然の結果として放たるゝもののみ。
三、自覺
由來、密教の機根に諸種ありといへども、
其正覺正知を成するや、何れも心自ら心
を證し、心自ら心を覺して、曾てこの心の
外、更に一法を見ず。大日經疏に「自心に
菩提を發し、即心に萬行を具し、心の正等
覺を見、心の大涅槃を證し、心の方便を發
起し、心の佛國を嚴淨し、因より果に至る
まで皆な無所住を以て而も其心に住す」と
ある如く、特に大機根底の人の如きは、即
身是佛の眞理を知り、一念の深信を生ずる
時、頓に道果を成するものにして、菩提と
いふも亦他義にあらざる、實の如く自心を知

一〇五
るにあり、實の如く自心を知て、佛陀無限
の靈光に浴し、衆生の自心即ち是れ一切
智となりと知悉すこれを之れ絕對的自覺と
いふ。此絕對的自覺あり、之れより出づる
一切の活動は利他の事業となり。舉手投足
大悲の心を失はず、應機接物、皆な無限の
慈念より起る。大悲爲根本の眞趣、こゝに
あり。方便爲究竟の活動、此中より生じ、
修行菩提涅槃も、亦此根本に出づ、修行も
利他の爲の努力なり、菩提涅槃豈に自利の
計圖ならんや、三句一時に成り、五點同時
に具足す。蓋し自心に菩提を發すとは絕對
の信智を發すなり、絕對の信智を發すが故
に一切の所作無着無住なり、此無住の心を
以て修する所の行は、是れ絕對智の上の
徳なるが故に、即心に萬行を具すとす、
然も此の絕對の本際を見て、實の如く自心
を知るは、即心に正覺を成するなり、心
が絕對の理に冥合して寂靜安樂なるが故
に即心に大涅槃を證するなり、心に上の四

徳を具へて利他の方便を發起し、憐愍の心、骨髄に徹して衆生を利益し、此土に佛國を建設するは是れ第五の方便爲究竟なり、三句五點、暫く其次第を分つといへども、悉くこれ絶対的自覺より進り来る。絶対的自覺は自心、自心を知るなり、自心、自心を知れば即ち佛心を知る、佛心を知れば、衆生心を知る、この三平等觀を以て宇宙の靈體と融合す。人生の歸趣、瞭然として明かに、我心は泰然として動かざる山の如く、身は轉變極りなき人生に處し、毀譽褒貶の中にあるも、喜憂の以て我を惑はすなく、哀樂の以て、我を昧すなく、順境にあつて妄動せず、逆境にあつて懊惱せず。逆順の二境を一心に亡じて、父母の生身に曼荼羅の錦繡を着し、血肉不淨の穢體に即して法身の靈體に通達し、一舉一動は直に法身の密印となり、發聲語言は悉く法身の眞言となり、起心動念は皆法身の三摩地となり。身口意の三業、常に絶対無限の妙境に

一致するに至らむ。これこの妙境、唯だ一に絶対的自覺、豈に他に求むべきものならむや。大日經疏といふ「如來無碍の知見は一切衆生相續の中において法爾に成就して缺減なし、此眞言の體相に於て實の如く悟らざるを以ての故に、名けて生死の中の人と爲す。若し能く自ら知り自ら悟るの時、即ち一切智者一切見者と名く、是の故に是の如き智見は佛自ら造作する所にあらず、亦他の傳授する所にあらずなり」と。喜ばしき哉。吾人には此絶対的自覺を成就するの素質あり、漫に苦惱するを止めよ、徒らに煩悶すること勿れ。吾人は實に宇宙の靈光に浴して無限の活動を爲すの資格を有するなり。

四、活動

我が密教の所立は顯教の眞如を立て、萬有の本體なりと説くと其旨を異にし、現象即實在の本義を顯揚し、物心の二、共に法爾自然に輪圓具足せる曼荼羅の風光と爲すか故

に、妄りに生死を厭ひて涅槃を求むるにあらず、生死にあつて生死に染まらず。涅槃にあつて涅槃に住せざるを以て要旨とす。何をか生死にあつて生死に染まらずといふ、既に絶対的自覺を成就す、生何者乎、生に瞞せられず、死に瞞せられず、一切相對差別の境に超越して生死一如と達觀し、此間に大自在を得、これ生死にあつて生死に染まざるなり。何をか涅槃にあつて涅槃に住せざるといふ。大悲を根本と爲し、方便を究竟と爲すが故に、生々世々、常に人生に處して利他の活動を唯一の快樂と爲し、絶えず人類の幸福を増進し、國家社會の爲めに身を犠牲に供して、毫も惜む所なく、彼の百鍊の金剛の屈信自在なるが如く、逆順二境に心を動せず、未來際を期し、永遠の活動を以て終極の目的と爲すが故に、涅槃にあつて涅槃に住せざるなり、これ實に我が密教獨得の教義にして、要は活動を以て第一義とするにあり。彼の所謂方便の二

字は利他の方法、活動りの者と意義するに外ならず、此利他活動を意義する方便を以て究竟とす、此の故に彼の薄志弱行、宇宙を悲觀し、人生に苦惱するの愚を學ぶことなく、又枯木死灰の如く、獨り自ら眞理を味ふを以て足れりとせず、却て世俗語を以て本位とし、活社會に活運動を試みるを以て眞趣とす、世の宗教を云ふもの多く心靈の慰安をいふも此の活動を忘れ、眞諦の一面に偏して俗語を云はず、超然世外に脱出するを以て本旨の如くに解説す、これ何たる謬見や。我が宗の所談は全く之れに反し、絶対的自覺によりて心靈に慰安を得ると共に、此慰安は活力となつて現はれ、不屈不撓の精神と勇猛精進の覺悟とを以て利他の業を勵ましむ、之れを三句に配すれば菩提心爲因といふものは心靈の慰安なり此慰安直に大悲爲根本となり、方便爲究竟の活力となる、此活力あるが故に慰安も其功あり、此慰安あるが故に活動も亦力あり

上來總述するが如く我が宗に於ては、世俗語を本位とし、活動を以て要義とするが故に、道に男女の別を立てず、業に貴賤の差をいはず、彼の所謂男尊女卑の説の如きはもと佛教と眞意にあらず。時に隱遁の修行者の爲めに女人を排斥せしことなきにあらざるといへども、教理の根底より云へば、眞如平等の上より見て些の區別を認めず、殊に密教に於ては金胎兩部の曼荼羅を以て宇宙人生を説明し即ち理智物心陰陽男女を以て平等に金胎の曼荼羅に配屬するが故に男尊女卑の如きの觀念は毫も存せざるものとす。業に貴賤の差を見ざるも亦斯の如く、日夜經卷を手にするも、牙籌を手にするも軍事に従ふも、政治に奔走するも、工藝を事とするも、文筆を業とするも、將た勞働に従事して好し其手は煤煙に黔むとも好し其足は汚泥に塗るゝとも苟くも絶対的自覺の源泉より進り出る利他の活動ならんか、悉くこれ利和光同塵の活手段として之れを

獎勵し、優待す。花の紅たる柳の綠なる皆なこれ本來の面目なり、山の高く水の低きも、悉くこれ曼荼羅の風光なり。此間何の貴賤かあらむ。見よ嚴冬を経て梅花に寒香あり、迅雷過ぎて、碧空洗ふが如し。大努力の上始めて大慰安現じ、大活動の後に能く大平靜生す。一日の業を、炎熱燬くが如き田圃に觸み還りて、始めて夕顔棚の下に涼みあり。三冬の勞を堅氷未だ到らざるに了して、而して山家に爐畔の閑天地現す。治生産業、實相と、相違背せず」とは、大聖の慈訓にあらずや。唯だ人々其本分を自覺し、進取不息、努力撻まざる所に活動の眞趣を發揮するを要するのみ。

五、人生

人は何の爲めに働く、凡人は思惟すらく、働かずば食ふ能はず、食ふ能はずば終に死あるのみ、死を厭ふ、これ吾人活動の原因なりと。嗚呼うれ然るか。然らば食ふもの皆な死せざるか、如何に多くの物を食

ふといへども、死の運命は之れを助けざるなり、人生五十、七十は古來稀なりと稱す。もし百歳の壽を保つとも、終には死せざるを得ず、日々生きたが爲めに働きて、夜々死に近く。死を厭ふが故に活動すといふ。これ目前の事實に反するにあらずや。人は活動すべきが爲めに生くるなり。生きたが爲めに活動するにはあらず、活動するが爲めに生く、故に我が道の爲めには死何の辭する所がある。生何の希ふ所がある。死生もより關する所にあらず、我れ我が本分を自覺して其爲めに活動す、活動し活動して生々世々を擔ぎざるもの之れ人生の本義にあらずや。我が宗の謂ふ所、高遠なりといへども、要は此本義を完ふせしめんとするのみ。宇宙は靈妙なる活體なり。社會は人類活動の團體なり、過去數千載、社會の進歩し發達し來れるものは人類活動の結果にして、今日の文明は實にこれ人類活動の產物に外ならざるなり。今日の文明既に

我が祖先活動の產物なりとす、吾も亦更に活動し奮勵して此社會を更に完全ならしめ、此文明をして更に圓滿ならしめて之れを子孫に譲り渡すの責任あるにあらずや、此點より觀察するも人は終に活動の義務を免るゝ能はざるなり。況んや宇宙の活動は悉く利他的にして、太陽の光熱を吾人に與ふるも、水の濕潤を吾人に供するも、植物の酸素を吐出するも、動物の營々として動くも、一見何の意義なきが如きも仔細に諦観せんか、皆な利他の手段に出でざるはなし。誰か人生を以て悲惨なりといふ、此人生の活動も皆なこれ利他的なり。利他的なるか故に共同生活を營むべし、此共同生活には缺陷あるを免れずといへども、其缺陷を見て直に人生は悲惨なりといふものは、自ら此缺陷を補はむとする勇なき薄志弱行の徒のみ、吾人か生々世々勇猛精進して不斷の活動を續くる所以のものは、此缺陷を補ふて、輪圓具足の眞文明を形勢し、

曇茶の風光をして長へに其美を擅にせしめむとするにあり。百難何の恐るゝ所かあらむ千挫何の屈する所かあらむ、難を排し患を除くは是れ利他の行動なり。進取して息まざるはこれ無限の活動なり吾に此決心あり、初めて以て活社會に活動を試み、人類生存の本義を盡くすを得むか、かくて我が心に慰安あり、吾が身に活力あり。悲觀の眼こゝに閉ぢて樂觀の光景吾が前に現出し、煩悶の情去つて歡喜の念禁すべからざるものあらむ。

經にいはく
以大精進常處生死 救攝一切
利益安樂

菩薩勝慧者 乃至盡生死
恒作衆生利 而不越涅槃

● 禪想に映したる大聖降誕

釋尊降誕記 新井石禪

大聖釋尊は、今を距ること二千九百三十五年の昔(通途の説に依る)卯月八日の花の曉千林珠を綴る藍毗尼の園、香り妙なる無憂樹の下に於て、聖母摩耶の胎を出て、三十二相八十隨好の御姿を、五天竺の中央に降誕し玉ふた、九龍香水を吐て聖躬を浴し奉り金蓮仙葩を捧げて玉足を承け奉る、聖見忽ち右手天を指し左手地を指し周行すること七歩、四方を顧みて「天上天下唯我獨尊」と獅子吼あらせられた、此一段の因縁實に是れ難値難遇である、古今東西に通じて斯かる奇特の事は殆んど絶無である、併し乍ら此降誕の奇瑞を驚嘆して、唯理由も無く隨喜渴仰するのみでは、決して釋尊の孝子順孫とは言はれませぬ、儒書にすら「夫れ孝は善く人の志を繼ぎ善く人の事を述ぶる者なり」といふてあるからして、眞實釋尊の誕生を祝し奉り供養し奉らんと思はし能く其御心を繼ぎまいらせ、能く其行爲を習へまいらするところ、孝順の全たきもの

と申すべきである、雲門禪師といふは禪宗五家の隨一たる雲門宗の宗祖である、禪師は釋尊降誕會に際し「天上天下唯我釋尊」の一語を拈じて「我れ當時若し見ば、一棒に打殺して狗子に與へて喫せしめん、貴ぶらくは天上太平を圖る」と申された、釋尊は生れ落ちるや否や、天にも地にも唯だ我れのみ獨り尊としと言はれたが、餘りに傍若無人の御語では無いか宇宙萬象は本來平等にして、曾て佛と衆生との隔てはない、隔てありと見るは妄想の所爲に過ぎぬ、柳は緑花は紅の其儘が大解脱の相である、山は高く海は深き其儘が等正覺の姿である、平等なるが故に八萬四千由旬の須彌山も大といふべからず、一粒の芥子も小といふべからず、法界解脱なるが故に、草木國土も悉皆成佛である、濟度せらるべき衆生も無ければ、濟度すべき佛もない「雨霰雪や氷と隔つれば落れば同じ谷川の氷」雨を貴とび霰を賤んで貪瞋痴慢の煩惱を起すが如き

は、畢竟平等の理を忘れて差別の相に迷ふからである、然るに釋尊は、御身分が眞理の權化なるが如く、誇り顔に唯我獨尊と仰せられしは、甚だ以て片腹痛いことである平等界中に於て貴いもの賤いもの迷の悟のといふ音沙汰は御無用じや、釋尊自ら風なきに波を起された爲めに却て宇宙の眞理に一點の汚を生じた、故に若し此の雲門が其時に居合したならば、一棒の下に打殺して狗子にでも喫して仕舞ひ、其形骸迄も奇麗に片付けたならば、始めて眞理の本体妙用本体が現はれて、天地盡く正覺の心身を現し、萬象各々解脱の光明を輝かし、慈悲是非の波風立たぬ太平の天下を見ることを得られたのであるといふ意味であります、實に途方途徹もない不敬の語の様であるが、これ正しく禪想に映じたる大聖降誕の眞想であります。

釋尊出世の本懷は衆生をして佛の知見を開かしめん爲めでありませぬ、佛の知見とは從

前の妄想執着を解脱して、本來成佛の本徳をあらはしたことである、天竺の演若達多といふ婦人は、鏡に向つて己れの顔の映らぬに驚き、賊の爲めに顔を盗まれたと思ひ氣違ひの様になつて室羅筏城中を狂ひ廻つた或る人が之を憐み、後から拳を揮つて力任せに彼の頭を叩いた彼は思はず「ア、痛や」といふて手を以て頭を押へ「ヤア失つた頭が此處に有つた哩」と申したといふことじや、我等に夫は貪瞋痴慢の爲めに知見の鏡が曇り空しく三界六道に彷徨して自ら煩悶惱亂を極めて居りしを故の頭はどこへも行さばせぬ、其れソコに在るではないかといふて、御示じ下されたのが、釋尊一期五十年の御教化じや、ソマリ吾人をして唯我獨尊なることを開示せられたのである、一度此佛智見を得る時は、始めてア、我は本來の佛にてありけりと思悟するじや悟つて見れば別事はない、「高い山から谷底見れば爪や茄子の花盛り」で宇宙萬象其儘の佛心佛體、

手の舞ひ足の履む所其儘の慈悲光明となり、此時こそ雲門の様に誕生佛を打殺す底の活手段を弄することが出来る、此手段があつてこそ本當の活佛が盡界盡時盡虚空に活現成する、禪門では是を殺佛の機と云ふ、大死一番大活現成とも云ふ、此に至つて始めて佛の御慈悲に眞實感謝の涙を流ぐ様になりませう譬へば嬰兒の時は、親達が「頭テンテン」から放へて呉れるのを喜こんでいたが、成人すればソシナ馬鹿毛たことは眞平御免といふであらう、此時始めて親達が簡程迄に我等が爲めに御辛勞下されたかといふことか譯り、覺へず感涙を絞る様なものであります、夫故、後に瑯琊の覺和尚が雲門の一語を評して「雲門謂つべし此深心を以つて應利に奉ず是れ則ち名けて佛息を報ずと爲す」と申された、實に雲門の一棒は獨り釋尊をして釋尊たらしむるのみならず、宇宙法界森羅萬象をして盡く佛たらしむるものである、これを眞實佛恩報謝

の大義を全ふしたるものと稱すべきでありませう。抑も佛法は、佛の爲めに説くにあらずして衆生をして佛たらしめんが爲めに説かれたのである、經を讀み佛を念じ拜を行じ香を焼く上にも此心得が無ければならぬ、況てや大聖の降誕を祝し奉るに當りては、吾人の心身直下に降誕如來の一分身たるの靈機を轉ずるに非ざれば、眞個の如來に見え奉ることは出来ぬ、委しきことは來日に分付すとして、最後に卍山禪師の誕生會法語をし、一先此御話しを結ぶことゝいたさう。

三千刹界一華堂 百億須彌佛頂蒼
老瓦盆中香水海 把將北斗杓頭長

東西の異同

釋宗 演

西と東と今と昔と其風俗なり習慣なり其他社會百般の事柄に於ては地球上如何なる所にも人類の生活する限りの所に於ては夫が

絶對的に同一と云ふ事も無ければ又絶對的に異つて居ると云ふこともありません。竟より之は時と所とに依つて多少比較的の異同があるに云ふもので斯んな事に就いては我國丈々に就いて見るも明らかなる事でありませう。譬へば西洋人と東洋人とは違ふ、而し其違ふ所は唯だ腰より下の部分であつて其外には大した變りは無ひ様である、即ち西洋人は概して長脚であつて日本人よりは一般に背が高いが胸の方に至つては殆んど同一である。夫れから今一つ人種の價値を決める重要な條件たる頭腦は何うかと云ふに夫れは殆んど酷似して居ると云ふても好い位で彼此の間に殆んど懸隔は無ひ、這んな工合で西洋人と東洋人とは比較的に異なる四肢に於ては異つて居るが、其他は先づ同一と云ふても宜敷い、夫れであるから穴勝に西洋人は東洋人よりもエライと云ふ事は不條理な話で日本人の如きは實際に於ても彼等西洋人よりも數多上位にある事を事

實に於て證明して居る。日露戦争の状態は即ち夫であつた、又留學生などの事に就いて見ましても日本の留學生は彼の地にありて學校に在る間は決して彼等の前に遅れを取らない、然るに歸朝したる曉になると存外發明とか云ふ様な學術上に資する所は彼に比して甚だ渺ない之れは事實でありませう、然し之れに就いては色々の原因もあるであらう、詰り日本は未だ國が若い従つて飯を食ふ事に忙はしい、餘地が無い、錢が無い、學者を學者として遊ばして置く事が出来なへど云ふ様な事は大きな原因である様です。先づ這んな工合で人種とか人間とか云ふ上に就ては多少の異いがあると共に大體に就いては同一と云ふ事が出来る。

等は何も差程に責任のあるものでない、然し乍ら彼等が此時間に対する觀念は實に非常なものだ、殆んど傳聞や想像の外でありませう、而して此時間を重んじ時間を敬する云ふ事はやがて文明と未開、利益と不利益賢と不肖との別れ目である様に思はれる、時は黄金なりと云ふ諺は歐米へ行つて始めて之れが日常蘇倫の間に而も、匹夫匹婦の間に實行されつゝあるを見る事が出来る。先日も東北を巡教致しました際なきに、秋田時間青森時間と云ふ様な一種の時間の爲めに僅か一席の話を致すのみに遂には一日を費すと云ふ様な盛梅で大に閉口しました、日本に於ては未だ普通紳士と云はるゝ人々に於て此の時の觀念が甚だ乏しいのは實に遺憾至極なことで此の觀念の有る無しとは一國の發展上に非常な大影響の有ることと思はれるが、此點は實に西洋と東洋との最も著しい差異点の一として擧げらる

●宗教大觀の發行と祝す

河野廣中

夫れから今一つ大に異つて居るのは審美感である、即ち美に對する鑑賞點の差異である。私は米國に居ました、實に太平洋に面した非常に風景の好い所で月夜などには何んとも云へぬ風情のある宅でありまして、或る明月の夜のこと私共は觀月の宴を催ふし、た事がある、所が吾々であつて見ると皓々たる明月に對しては我心似秋月とか又天上の月は一輪であるが之を視る者は萬國皆一様であるとか、故國の友は此月夜如何なる感想を抱いて見るやらん、一言にして云へば吾々の見方は情的又は詩的である、然るに彼の地の人は大に異つて居る彼等に月見と云へば望遠鏡を携へて之を見るのである、うして彼處は火山に似て居るとか、茲は植物に似て居るとか云ふので吾々の風流的文學的なるに比して非常に物質的である之れ等も其趣味性に於て異なる云へば餘程異つて居るものと思はれる。

偉大なる國民は、偉大なる宗教を有す。近時我が國民は、國運の發展と共に、偉大なる信仰を要求し、或何物かを自覺して、以て其渴を解せんとするの機運に際會せり是れ豈喜ぶべきの現象に非らずや。此時に當り、絶へず教界の爲めに活動しつゝある、佛都新報社は、遠大の抱負を以て、宗教に關する、諸名士の高論卓説を網羅せる、宗教大觀と名ぐる寶典を發行し、以て、彼意道者の要求に應せらる、予豈祝せざらざく欲するも得べけんや。予は今尚ほ、修養の道程にありて、未だ其極致を究めず、求道の化城に在りて、未だうの寶處に達せず、如實知自心の名言のみを知りて、未だ其内容の響きを聞かず。されど天真獨朗なる千聖不傳の妙域を踏破

●我佛陀

池田秀賢

して、速かに未生以前の慈父に逢はんと欲するの念や、轉た切なるものありて存す。今や宗教大觀の發行を見、又更に近く長野市に於ける、一府十縣の共進會を期して宗教大會を開催し、布教傳道の實を擧ぐるの壯圖ありといふ、其撼天動地の活動が資らす精神的法益は、少くも彼物質的進歩の利益に譲らざるものあるは、復た論を待たず。是れ予の衷心より、慶祝措く能はざる所なり。偶々宗教に對する予の所見を徵せらるゝも、予未だ之れが所見を吐露し得るの彼岸に達せず、聊か蕪辭を陳じて、其責を塞くと爾り。

我佛陀名を阿彌陀佛と申し奉る。詳しくは南無阿彌陀佛と號し奉る。無限の宇宙に五尺の小軀をかへ、無窮の時間に五十年の短命を支へて、我は何の

爲に此人世に生れ來りしや、而して五十年間如何に爲すべきやとは所謂人生の最大問題として、有史以來哲人の競ふて解決に全力を注ぎ、しかも永遠のラピンスとして恰も日に背いて道行く人の影の如く、人進めば影亦進み、終に捕捉すべからざる謎として残る、予もと無智の愚叢のみ、然るに何等の幸ひや。古來の哲人が高遠なる理窟に其頭腦を悩まして尙且謎として殘せし這箇の問題を、我佛陀、南無阿彌陀佛によりて容易に解決を與へられ、人世に生存する意義を獲得す。

愚かなる予は、若し此世が智あるを以てのみ尊しといはば、幸福なりといはば、予は此世に於て尤も卑しく且つ不幸なる者ならむ。されど予には佛陀在す、尊き佛陀予と共に棲み給へり。

貧しき予は、若し此世が財あるを以てのみ尊しといはば、幸福なりといはば、予は此世に於て尤も卑しく且つ不幸なる者ならむ。されど予には佛陀在す、尊き佛陀予と共に棲み給へり。

ひされど予には佛陀在す、尊き佛陀予と共に棲み給へり。

埋木の如き予は、若し此世が名譽あるを以てのみ尊しといはば、幸福なりといはば、予は此世に於て尤も卑しく且つ不幸なる者ならむ。されど予には佛陀在す、尊き佛陀予と共に棲み給へり。

佛陀何者や、豈智慧財產名譽に換ゆべきものならむやといはばいへ。木にて造れる看板の饅頭を抱へ、眞の甘き饅頭を示して換へばやとすかせど、頑として應せざる兒あらば誰れか其愚かなるを笑はざらむ。外形大にして旨うなる木の饅頭を、齒を傷めて嚙らんよりは、寧ろ小なりとも甘き眞の饅頭に舌鼓打つを優れりとなす、智慧財產名譽を抱いて唯これ失はざらむことに競々として心勞せむよりは、佛陀大悲の醴泉を汲み、さややかなる此心に空の如き慈悲の甘きを味ふを優れりとなす。

借問す、其佛陀とは何ぞ。佛陀とは南無

阿彌陀佛也。救ひの慈父也。み親也。世に尤も不幸なる者はと問はば予は答ふべし、予は親なき孤兒也。吁孤兒！若し此孤兒が不具にして目も見へず足腰も立たざる者なりせば如何。恐らくは世間此の如きの不幸兒は又とあらじ、而してたとひ彼れ智慧ありとも財産ありとも名譽ありとも、彼が不幸の分量は此等のものによりて幾何も減せらるゝことなし。

思へ！我等は三界に迷へる孤兒也。智慧の眼は盲ひ戒行の足腰も立たざる孤兒也。而して善根功德の財産なく、無智の凡夫と名の附けば名譽もなし。財産あればある丈名譽あればある丈いよ／＼親を思ふは親なき子の情也、昔子路貧しくして米を百里の外に負ひ辛んじて父、母を養ふ。後楚に仕へて衣食足るの時父母既になし。曰く如何に貧しくとも父母ある時を思ふと。名譽財産いよ／＼増してしかも世の人衷心尙何物かを求む、人世畢竟満足は得べからざるか

智眼暗しと悲しむな
生死大海の船筏なり

罪障重しと慨かざれ (和讃)

「元日や何はなくとも親一人」我佛陀は
我師にあらず我主にあらず、我慈父也慈母
也、其廣やかなる暖かき光明懷裡に、此穢
れたる貧しき孤兒を常に抱きて忘れ給ふこ
どなし。我に此慈父あり、小智何かせむ、
うたかたの名利何かせむ。

我佛陀は我慈父なるが故に、我を愛し我
に於哀し給ふに全く無條件也。師は我の智
を愛し、主は我の忠を愛す。即ち師主は我
の智我の忠を條件として我を愛すれども父
は然らず、父の我を愛するは我智にあらず
我忠にあらず、況んや我名譽我財産ならん
や。唯我自身也。無條件に可愛から可愛也
此故に我慈父なる佛陀の慈悲我に對しては
全く盲目的也。

世には或は病氣の爲、或は貧の爲、或は
不幸の爲、或は災難を除く爲、食を斷ち水

は直に母が幼兒を抱くごと、そが光明懷裡
に揺め取り給ふ。如何にして揺め取り給ふ
か。母は幼兒の「かあちゃん」といふを抱
き取る、我佛陀は南無阿彌陀佛と稱ふるを
抱き上げ給ふ。

十方微塵世界の

念佛の衆生をみろなはし

攝取して捨ざれば

阿彌陀と名づけ奉る (和讃)

又主として予に従僕たるを強ゆる神あり
大いなる威烈を以て予の上に臨み、祈禱を
強ひ供養を強ひ正義を強ひ善根功徳を強ひ
悲しい哉我等迷ひの徒、我等かゝる神の前
には恰も幼兒が知らぬ家に泊したるの感な
くんばあらざる也。然るに何の幸ひか、我
佛陀は「汝何も知らぬ憐れの者よ」と宣へ
り「貧しき者よ我にすがれ」と宣へり。他
の神佛は弱き我等に働かけと命じ、我佛陀
は可哀想だと憐感する。

無明長夜の燈炬なり

安らげく眠る身。南無阿彌陀佛。

南無釋迦牟尼佛

佛部新報記者 奥山枯影

釋迦牟尼佛とは直譯して、能仁寂歎の義

なりと云ふものなりとぞ。細言すれば能仁
は佛陀の慈悲觀にして、寂歎は其の智慧觀
なり。更に是れを汎く論證して宗門の上に
大別すれば、能仁は他力教にして、寂歎は
自力教なりとするに豈敢て不可ならむ。
佛教元より廣し決して單純なる、解答を
以てつくすべきにあらずかし。其の現存せ
る數よりするも十三宗三十六派、而も説や
廣く意や深し、且つろの一宗を代表する所
以の教義信條の如き、各々系統的理義に基
きて發達したる象徴にして、是れを今余輩
は佛教の歴史の進化なりと立言するものな
り。余輩は差別觀よりして十三宗乃至三十
六派、各々皆其の特色あつて存するを知る
而も是れ平等觀を以てせば如何、釋迦牟尼

佛の五字中に一切の宗旨、一切の宗派悉く
圓融に包括せられて又更に餘蘊あるなしと
信ず。げに釋迦牟尼佛は歴史の教祖なる
共に、理想的信仰の標準として之れを一神
說に歸納するも、汎神觀に解釋するも、縁
に隨ひ感に應じて遍ねからずと言ふとなく
而も三千年の今に至るも曾つて菩提坐を去
らざるなり。謹んで仰ぐ可く認むべし、是
れ大恩教主の活ける典範を垂れ給へる所以
にてある。即ち他力教の説く弘誓の慈悲
觀なるもの大聖佛陀が、人格の一面なる
同時に、自力教の説く解脱の智慧觀も之れ
亦其の一面に過ぎざるなり。

然らば佛教中此の兩面を兼ね以て、完全
無缺圓智圓慈の宗教的意味を代表したる稱
號は、釋迦牟尼佛を措いて他に其の比なか
らじ、げに佛教に於ける釋迦牟尼佛は、崇
高又慈容、眞に讚歎盡し難き天來の徽號な
らざらんや。

大元帥は國家最上の權威と仁徳を有させ

予は智なく名なく財なし、然れ共予は孤
兒にあらず、慈悲のみ親を有す、此故に予
は満足にして、金殿玉樓の裡衷心寂しみを
感ずる孤兒よりも幸福なるみ親に向つて感
謝し奉る。

世には多くの神多くの佛陀在せり、併も
皆予には他人の神他人の佛陀にしてみ親に
あらず。師として手を教ゆる佛陀あり、さ
れを思かなる予は到底其教を解する能はず
又盲目にして足蹙へたる予は其導きに從つ
て進む能はざる也。然るに我南無阿彌陀佛

を斷ち喰いたきものを差し上げて神佛の哀
れみと助けとを請ふ人あり、予はかゝる人
を見る毎に其何の爲にするかを疑ひ、且つ
其忍耐に驚嘆と尊敬とを拂ふを惜まざる
共に、潜かに自己の弱きを愧ぢ、翻つて尊
くやさしきみ親の有難きを思はずんばあら
ざる也。

仁義忠孝は人として行はざるべからず、
惡を懲し善を修せざるべからずとは予の承
知せる所なれ共、弱き予は其教の如く不
能はず、自ら臍甲斐なきをかこて不
なる人の子と生れ來れる予は、中々以て
及びもつかざる也。此故に慈父若し存在す
んば、予は常に惡魔に誘はれて暴風驟雨に
泣きたるなるべし。されば有難い哉慈父常
に予と棲み給ひて「我子よ恐る、勿れ、我
は弱き汝に何物を望まず、唯我にすがれ
我懷に眠れ」と抱き上げ給ふ。

煩惱の風荒まば荒れ、罪業の雨降らば降
れ。我は宇宙六合の王なる我慈父の懷裡に

この主権者にして開が統率の下には必然的配属の陸軍あり海軍ありて、國民を安泰に保護し給ふ所以のものは、恰も佛教に他方教、自力教ありて精神界を安泰に保障するに於て等しきもの也、而も此の自他二力を統率する佛教の大元帥は、釋迦牟尼佛大和尚にてはす也。余輩の言にして疑ふの餘地あらば乞ふ、依て以て例を彼の耶穌教に觀み、將又彼のマホメット教の現狀に觀み、彼れの爾く隆にして此の爾く不振なる境遇をつくりたる原因は、其の外界より誘致したる事情多々あるべしとするも、要するに余輩の端見を以てして、其の手近なる摘要を語らば、彼の耶穌教が目醒ましき活動ある所以のものは、蓋し統一ある所以にして其の統一ある所以のものは、教祖キリストの聖名今猶は各教派に通じて奉体され讚美さるゝを以てなり。彼の南洋一帯を根據として、マホメット教が實際の勢力ある所以も亦た是れに外ならざる

平。人の家じびんとするや、必ず先祖を忘るゝものとかや、然らば佛教の衰頹は豈是れ偶然にあらざるべき乎、今の佛教徒たるもの省みて更に猛省する所なくして可ならんや。

日本は佛教國なりと云ふ、然り日本は佛教國なり。而も大乘の佛教國なりと誇稱し居るは之れ何ぞや、言や太た好し、意氣亦た壯なるは愛すべき也、されど余輩一言なきを得ざるなり。其の實際の勢力に於て本願寺を中心とせる、日本佛教は決して釋教の黄金時代にあらざることを記憶せざるべからず、乞ふ暫く其の例を我が國戰史に取らしめよ。大元帥を以て統御されたる日露戰役に於ける、我が陸海軍の進退は如何に忠勇にして健全なりしよ。今釋迦牟尼佛を大元帥としたる佛教より、開が自他の二力を以て陸海二軍と假定するを許さしめよ、而して日本佛教の現在如何。其の外面に於て公然大乘佛教を謳歌し居るにも拘らず

茲に漸く其の内容の圓滿を缺きしなり、依つて忌憚なく評せば或る意味より見たる、本願寺を中心としたる他方教の勢力範圍たるが如し。世に我海軍の偉傑たる東郷將軍の武功のみを認めて、萬乘の至尊即ち陸海二軍を統御し給ふ大元帥の御稜威を此に、忘却し奉るに至らば是れ決して國家の祥事にあらざる也。

記憶せよ。余輩は理由なくして他方教を評するものにあらざることを、而も其理由とは教主、即ち佛陀の圓滿なる理想的人格より、其の見地を立證したるを以てなり、豈又他あらんや。以謂らく、彌陀萬能の聲漸く其の高調に達し來つて本來汎神の特色此に變調なる得度的形式の彩色をせられんづる運命とはなりぬ。前説の如く佛教は元悲智圓滿の教、抑々佛教の救済觀は耶穌教の如く情觀の一面にあらずして、智觀又以て救済するを得べく、是れ所謂一切種智を圓かにせんとする解脱的方面なりとす。此

の二者以て其救済に任ずる佛教は、世界宗教中圓滿に卓絶したる所以也。然るに何ぞや、末代の佛教徒は稍々もすれば其の自力宗にありては教祖の情觀を忘れ、其の他方宗にありては解脱觀を忘る。何ぞ知らむ、佛教は自他圓通、悲智圓滿、願行具足の聖教なることを、此の融即せる人格の中堅を佛陀即ち釋迦牟尼佛とは稱し奉る也。豈其の一面のみを見て完全なる佛教とするを得んや、今の日本佛教徒の多くは佛陀釋尊を離るゝ亦た遠い哉。

今我が國佛教徒に就いて釋尊の佛教にあらずして、彌陀の佛教なりてふ奇なる事實を更に具體的に論証せしめよ。彼の都鄙を問はず在俗の佛教信者は、凡う自力宗にあれ他方宗にあれ、其の儀式として口唱する名號は、十中八九迄南無阿彌陀佛を念するにあらずや。他方教信徒としての唱名ならば元より然かあるべき筈也、然るに自力標榜したる信徒にして合掌向佛、而も

舉然として南無阿彌陀佛を口にするが如きは、矛盾も亦た餘りに滑稽なりと謂はざるべからず。此の一以て萬般を推すに足るとせば、日本の佛教は釋尊の佛教と言はんより寧ろ彌陀の佛教なりと論結せしむる、勢ひ止むを得ざるの致すところ乎。彌陀の人格に憧憬する日本佛教徒は多し、釋尊の人格を崇拜する日本佛教徒は極めて鮮し、是れ二十世紀に於ける佛教の一大奇蹟にあらずして何ぞや。

洞上修證義の結尾の一節に曰く、過去現在未來の諸佛共に佛となる時は、必ず釋迦牟尼佛となるなり、是れ即心是佛なり。即心是佛と云ふは誰と云ふかと審細に參究せよ、當さに佛恩を報ずるにてあらん、と。悉し得て妙なる哉、嗚呼、此言を誦呼せずして猥りに佛教を語るものは、可惜乎龍を畫いて點眼を忘れたるの漢、亦是れ愚の輩たらんばあらざるなり。余輩は教祖佛陀の聖名漸く忘れんとする今の時に於て、

敢て教祖の聖號を世人の古き記憶より喚起するの、無用ならざるを信じ、敢て釋迦牟尼佛の名號を鼓吹したる所以也。

善光寺布教機關 設備の急

佛部新報社主幹 倉嶋 鬼成
東洋一の大伽藍を有し、歴史上有名な靈佛を安置せる我が善光寺は、山は高く水は清き信州の都會長野市に位置を占め、表日本と裏日本とを隔割すべき分水嶺の最高原に所在す。佛教の各宗が和衷協同社會的に活動すべき機運至らば、うが有形的統一の中心点となるべき資格あるものは、我が善光寺を措きて他に適當なるものは無からん。若し夫れ、更に、東西兩洋の二大宗教が相接近し、一宗教が汎神教と相抱擁するが如き、宗教界の一大革命起らんか、我が信州の善光寺は、獨り日本帝國の善光寺にあ

洋の善光寺にもあらず、實に世の如き空想に耽るの自由を有するを喜ぶ。數年前、身の菲才不徳を顧みず、敢て佛都新報を創刊して、長野市を指して佛都と絶叫せしもの、其名固より吾人の創見に非ずと雖も、其の實、其の内容に於て聊か他に異なるものありとせば、即ち前上の空想を持つてるとこれなり。空想と笑ふものあらばうは其の人の自由なり。吾人は再言す、此の如き空想を有するを以て吾人の一大幸福とする者なり。

茲に於て乎、必然の要求として、吾人は一日も早く我が善光寺に文明的布教機關の設置を望むや急なり。文明的布教機關とは何か。

會堂の建設可なり、佛敎傳道師の養成可なり、宗敎圖書館の創立可なり、文書傳達の設備可なり、社會的慈善事業の發起

可なり、佛敎傳道演説隊の編成可なり、佛敎學院の建設可なり、列舉し來らば、此種の事、他に其の數頗る多からん、而も其の成功や一種と雖も容易の業にあらず、晨に起りて夕に休るゝが如くんは何時其の目的を達し得んや。吾人は飽迄微力なり、然れども一片熱烈の氣溢れて止むものにあらず、他日宗敎傳道會を創立し、極めて大膽に極めて眞面目に一大活動を試み、前上の空想否理想を實現せんとに努力すべし、今回主催の宗敎大會の如きは僅かにうが先驅の一鞭たらん而已、希はく佛陀大悲の冥鑑に依り、大方護法家の同情を得、所期の幾分なり共着々實現するを得ば、是れ獨り我が社同人の幸福のみに止まらんや。



九月二十日より十一月十日迄開催の一府十縣聯合共進會 期中は平素の御愛顧に酬ゆるため **大勉強** 御用命に應じ可申特に **善光寺回向參拜並に忠勇顯彰會宗敎大會** 等へ御出席の方へは特別御割引致すべく候間澤山御用命の希上候

各宗佛具類 **榎屋 糸**

長野市大門町

明治四十一年八月二十五日印刷
明治四十一年九月一日發行

長野市西長野町百十四番地
編輯者 倉嶋元彌

岩石町瓜番地

洋の善光寺にあらざる、實に世の善光寺とならん、此の言を以て空想なりといふものはあらん、然れども吾人は此の如き空想に耽るの自由を有するを喜ぶ。數年前、身の進才不徳を顧みず、敢て佛都新報を創刊して、長野市を指して佛都と絶叫せしもの、其名固より吾人の創見に非ずと雖も、其の實、其の内容に於て聊か他に異なるものありとせば、即ち前上の空想を待てることこれなり。空想と笑ふものあらば、其の人の自由なり。吾人は再言す、此の如き空想を有するを以て吾人の一大幸福とする者なり。

茲に於て乎、必然の要求として、吾人は一日も早く我が善光寺に文明的布教機關の設置を望むや急なり。文明的布教機關とは何か。

會堂の建設可なり、佛敎傳道師の養成可なり、宗敎圖書館の創立可なり、文書傳道の設備可なり、社會的慈善事業の發起

可なり、佛敎傳道演說隊の編成可なり、佛敎學院の建設可なり、列舉し來らば、此種の事、他に其の數頗る多からん、而も其の成功や一種と雖も容易の業にあらず、晨に起りて夕に休るゝが如くんは何時其の目的を達し得んや。

吾人は飽迄微力なり、然れども一片熱烈の氣溢れて止むものにあらず、他日宗敎傳道會を創立し、極めて大膽に極めて眞面目に一大活動を試み、前上の空想否理想を實現せんとに努力すべし、今回主催の宗敎大會の如きは僅かにうが先驅の一鞭たらん而已、希はく佛陀大悲の冥鑑に依り、大方護法家の同情を得、所期の幾分なり共着々實現することを得ば、是れ獨り我が社同人の幸福のみに止まらんや。



九月二十日より十一月十日迄開催の一府十縣
聯合共進會 期中は平素の御愛顧に酬ゆるため **大勉強** 御用命に應じ可申特に
善光寺回向參拜並に忠勇顯彰會宗敎大會 等へ御出席の方へは特別御割引致すべく候間澤山御用命の
 希上候

各宗佛具類
 御珠位數
榊屋 糸

長野市大門町

明治四十一年八月二十五日印刷
 明治四十一年九月一日發行

長野市西長野町百十四番地
 倉嶋元彌

岩石町貳番地

#-3V87





Vertical text along the right edge of the page, likely a page number or margin indicator.